



# ERINA REPORT

Economic Research Institute for Northeast Asia

## PLUS

### 特集: モンゴル経済—課題と将来性

Special Feature: Mongolian Economy—Challenges and Opportunities

- COVID-19パンデミックにおけるモンゴルの金融政策とマクロ・プルーデンス政策  
バヤルダワー・バヤルサイハン、バトバヤル・バートルフー、ムンフバヤル・ガントゥムル  
Monetary and Macprudential Policy Measures of Mongolia during the COVID-19 Pandemic (Summary)  
BAYARDAVAA Bayarsaikhan, BATBAYAR Baatarkhuu, MUNKHBAYAR Gantumur
- 2022年第2四半期のモンゴルの消費者信頼感指数  
ソヨルマー・バトベヘ、アルタンツェツェゲ・バトチュルン、ダワードルジ・ツェンドダワー  
Consumer Confidence Index in Mongolia-Q2 2022 (Summary)  
SOYOLMAA Batbekh, ALTANTSETSEG Batchuluun, DAVAADORJ Tsenddavaa
- 鉱業と地域格差—ソヨルマー・バトベヘ、アルタンツェツェゲ・バトチュルン  
Mining and Regional Disparity (Summary)  
SOYOLMAA Batbekh, ALTANTSETSEG Batchuluun
- モンゴルにおける国家公務員の「能力主義」に関する考察—アマルトゥグス・ツェンドダワー  
Issues on the Application of Civil Service 'Merit' Principles in Mongolia (Summary) AMARTUGS Tsenddavaa
- 日本海側港湾の連携によるポートセールスの実態調査報告—新井洋史、李春霞  
Current Situation of Coordinated Port Promotion Activities among Ports on the Sea of Japan (Summary)  
ARAI Hirofumi, LI Chunxia
- 北京市人工知能の発展状況と国際比較分析—陳媛媛、楊傑、李勁  
An Analysis and Comparison Study of AI Development in Beijing (Summary)  
CHEN Yuanyuan, YANG Jie, LI Jin

2023

February

No. 168

## 本誌の目指すもの

ERINA REPORTは135号よりERINA REPORT (PLUS) として、現実の経済交流という視点を取り入れた新たな編集形態をとり、多角的視点から北東アジア経済に切り込む総合的な学術雑誌となりました。本誌が目指すのは、北東アジア経済に関する独自性の高い学術論文に加えて、この地域における各国の最新の政策動向、実態に肉薄した現地調査レポートや有識者の視点などを掲載することで、理論と現実を結合させた総合的な情報を提供するとともに、北東アジア研究に質の高い研究素材を提供していくことです。

# 目次

## 特集：モンゴル経済—課題と将来性

Special Feature: Mongolian Economy—Challenges and Opportunities

■特集にあたって .....	1
ERINA 調査研究部主任研究員 エンクハヤル・シャグダル	
On the Special Feature .....	3
ENKHBAYAR Shagdar, Senior Research Fellow, Research Division, ERINA	
■ COVID-19パンデミックにおけるモンゴルの金融政策とマクロ・ブルーデンス政策 .....	5
モンゴル銀行金融政策部長 バヤルダワー・バヤルサイハン	
モンゴル銀行金融政策部エコノミスト バトバヤル・ハートルフ	
モンゴル銀行金融政策部エコノミスト ムンフバヤル・ガンツムル	
Monetary and Macroprudential Policy Measures of Mongolia during the COVID-19 Pandemic (Summary) .....	13
BAYARDAVAA Bayarsaikhan, Director General, Monetary Policy Department, Bank of Mongolia	
BATBAYAR Baatarkhuu, Economist, Monetary Policy Department, Bank of Mongolia	
MUNKHBAYAR Gantumur, Economist, Monetary Policy Department, Bank of Mongolia	
■2022年第2四半期のモンゴルの消費者信頼感指数 .....	14
国立調査コンサルティングセンター (NRCC) 主任研究員・ERINA 共同研究員 ソヨルマー・ノトベヘ	
国立調査コンサルティングセンター (NRCC) 所長・ERINA 共同研究員 アルタンツェツェゲ・ノトチュルン	
モンゴル国立大学モンゴル・日本人材開発センター (MOJC) 所長・ERINA 共同研究員 ダワードルジ・ツェンドダワー	
Consumer Confidence Index in Mongolia-Q2 2022 (Summary) .....	17
SOYOLMAA Batbekh, Senior Researcher, National Research and Consulting Center (NRCC)	
ERINA Collaborative Researcher	
ALTANTSETSEG Batchuluun, CEO, National Research and Consulting Center (NRCC)	
ERINA Collaborative Researcher	
DAVAADORJ Tsenddavaa, Director, Mongolia-Japan Center for Human Resource Development, National University of Mongolia	
ERINA Collaborative Researcher	
■鉱業と地域格差 .....	18
国立調査コンサルティングセンター (NRCC) 主任研究員・ERINA 共同研究員 ソヨルマー・ノトベヘ	
国立調査コンサルティングセンター (NRCC) 所長・ERINA 共同研究員 アルタンツェツェゲ・ノトチュルン	
Mining and Regional Disparity (Summary) .....	22
SOYOLMAA Batbekh, Senior Researcher, National Research and Consulting Center (NRCC)	
ERINA Collaborative Researcher	
ALTANTSETSEG Batchuluun, CEO, National Research and Consulting Center (NRCC)	
ERINA Collaborative Researcher	
■モンゴルにおける国家公務員の「能力主義」に関する考察 .....	23
モンゴル公務員評議会常任委員 アマルトゥグス・ツェンドダワー	
Issues on the Application of Civil Service 'Merit' Principles in Mongolia (Summary) .....	29
AMARTUGS Tsenddavaa, Permanent Member, the Civil Service Council of Mongolia	



# 特集:モンゴル経済—課題と将来性

ERINA 調査研究部主任研究員  
エンクバヤル・シャグダル

人類が COVID-19 パンデミックの打撃を受け、世界中で経済活動に様々な制限が課された2020年に、モンゴル経済は過去数十年で最も深刻な経済危機に直面した。経済の収縮規模は2009年に経済が打撃を受けた「リーマン・ショック」の衝撃をはるかに上回った。しかしながら、2021年の経済は僅かながら回復し、こうした状況が2022年を通して続いた。モンゴル国家統計局 (NSO) の最新の推計によると、2020年はモンゴルの実質 GDP が対前年比4.6%の収縮であったが、2021年は対前年比1.6%の成長となり、2016年以降最も低い成長率となった。2022年の第3四半期までの実質 GDP 成長率は対前年同期比3.7%の成長率であった。しかし、実質 GDP は2019年のパンデミック前の水準と比べて僅か0.4%の増加となった。このように、経済はパンデミックによって3年連続の低迷が続いている。

こうした状況を背景に、2022年8月24日に「モンゴル経済—課題と将来性」をテーマとする第12回 ERINA 共同国際ワークショップ・イン・モンゴルをモンゴル・日本人人材開発センター (MOJC) で開催した。ワークショップは国立調査コンサルティングセンター (NRCC) と MOJC が共催し、30人以上が参加した。

本特集号にはワークショップで意見を交わした以下3本の論文を収録している。

- モンゴル銀行金融政策部長のパヤルダワー・バヤルサイハン氏、モンゴル銀行金融政策部エコノミストのパバヤル・バートルフー氏、同エコノミストのムンフバヤル・ガンツムル氏の共著による「COVID-19パンデミックにおけるモンゴルの金融政策とマクロ・プルーデンス政策」は、パンデミックがもたらしたリスクを緩和するため、モンゴル経済、銀行、金融部門に対してモンゴル銀行がパンデミック中に実施した一連の政策は、マクロ経済の安定

化、経済成長、債務超過の防止を支援する上で効果的であったと主張している。国際的なベストプラクティスに準じて、これらの措置は債権者と債務者の両者を対象とし、モンゴル銀行の政策金利をかつて無い低水準に引き下げ、商業銀行の支払い準備率の緩和、ローン再編、銀行預金のドルシフトの抑制などを措置に盛り込んだ。

- NRCC 主任研究員のソルマー・バトベヘ氏、NRCC 所長のアルタンツェツェゲ・バトチュルン氏、MOJC 所長のダワードルジ・ツェンドダワー氏の共著による「2022年第2四半期のモンゴルの消費者信頼感指数」は、2022年第2四半期にモンゴルで実施された消費者信頼感指数調査の結果を報告している。この調査によれば、モンゴルの消費者信頼感指数 (CCI) は、現況指数が大幅に改善したことで、前年同期と比べて上昇した。消費者の求人に対する評価の改善が後押しとなり、現況指数は前年同期よりも上昇した。その一方で、消費者の近い将来への期待感は様々であった。耐久財に対する需要は今後6か月間安定するであろうものの、家計指数は激減した。さらに、モンゴル通貨トゥグルグの下落が続くと予想する消費者が増加した。報告者らは、CCI は経済成長と密接に関係しており、四半期成長率が2.6%を下回ることから、消費者が悲観的であることを示した。
- NRCC 主任研究員のソルマー・バトベヘ氏と NRCC 所長のアルタンツェツェゲ・バトチュルン氏の共著による「鉱業と地域格差」は、2000年代半ばからのモンゴルの鉱業を中心とした急速な経済成長によって、一人当たり GDP が過去20年で2倍以上に

なったものの、鉱業部門は鉱業地域の地域経済において、雇用面でマイナスの影響を与えたと主張している。鉱業部門が総生産に占める割合を基に、モンゴルの21の地域 (県) と首都ウランバートルを鉱業地域と非鉱業地域に分類した。閾値は21.8%で、これは2010~2021年の国の GDP に占める鉱業部門の平均的割合である。この分類により、6地域が鉱業地域に該当し、残りの15地域とウランバートルが非鉱業地域に該当した。

さらに、本特集号にはモンゴル公務員評議会常任委員のアマルトゥグス・ツェンドダワー氏による「モンゴルにおける国家公務員の『能力主義』に関する考察」を収録している。モンゴルの公務員数は1996年から毎年約1%増加し、2021年には総人口の6.3%相当となる20万8864人に達した。公務員の半数以上は女性で、2021年の公務員総数の62.7%を占めた。報告者は、「能力」主義を適用することで、公務員が昇進のために業績、経験、専門家としての行動を高める機会を得る一方で、能力やコンピテンシーに対する評価基準が不正確であることから、曖昧かつ不適切な行動や、時には「違法な」手続きや任命へとつながると主張している。こうして、信用と責任感のある有能な多くの公務員が退職したり、革新的で生産性のある働き方に消極的になることがよくある。そのため、最近改正された公務員法を施行し、公務員と公的機関が責務と説明責任を果たすよう、より良い業績管理システムと、評価・モニタリング・監査のメカニズムをさらに開発する必要がある。

前述の共同ワークショップではこのほか以下に以下の報告が行われた。

- モンゴル財務省 (モンゴルの雇用変革のための SDGs 連動予算編成に関する EU プロジェクト) チームリーダーのムンフズル・ラハグワスレン氏に

よる「モンゴルの年金制度に対する課題と長期予測」は、国内の社会保険被保険者数が2021年末時点で118万1300人（重複含む）となり、全労働力の96.4%を占めたことを示した。過去5年間で社会保険基金の支出が2倍になった一方、基金拠出金収入は健康保険を除き、1.6倍の増加となった。2016年以降、社会保険支出総額の33～49%は国家予算の補助金を財源としている。最近では年金と社会福祉手当のGDPに占める割合が増え続け、2022年には6.6%を占めた。概算では、年金基金の損失は2030年以降に急増し、2040年までにGDPの5%に達し、さらに加速していくことが分かった。よって、持続可能で、住民の社会的保護を保証するためには、年金とその他の社会福祉制度を改革することが望まし

い。こうした改革にはインフレ連動制度、賃金ベースの拡大、保険負担率の引き上げ、保険数理上公平となるような給付金減額などが含まれる。

-モンゴル生命科学大学上級講師のエルデネチュルーン・トゥムル氏による「モンゴルの食肉輸出と可能性」は、モンゴルの食肉産業の貿易上の課題と潜在的可能性に関して報告した。報告者は、食肉は牧畜世帯にとって2番目に重要な現金収入源であり、畜産部門の主要な輸出品目であることを強調した。研究では、現在の食肉の輸出は、食肉の輸出価格が低いことや、食肉の輸出過程への直接関与が限られていることによって、牧畜世帯の所得水準の十分な助けになっていないことが明らかになった。よって、政府は農村協同組合を食肉の輸出活動に参加させて牧畜者の関

与を促進するか、もしくは食肉貿易が牧畜世帯の生計にさらに利益をもたらすような他のやり方に着手すべきである。

-モンゴル国立大学准教授のドルバドラフ・サンドウイジャフ氏による「大気汚染がもたらす園児の欠席数への影響:モンゴルでの実証」は、モンゴルの首都ウランバートルでは深刻な大気汚染が喫緊の問題となっていることを報告した。エアール・ビジュアルによると、ウランバートルは2019年に全世界で最も汚染された50都市の1つとなった。大気汚染が園児の出席数に与える影響を評価したところ、大気汚染と園児の欠席数の間には統計的に有意な正の相関関係があることが分かった。さらに、大気汚染の累積的影響の規模は今現在の影響を上回るものであった。

# On the Special Feature: Mongolian Economy – Challenges and Opportunities

**ENKHBAYAR Shagdar**

Senior Research Fellow, Research Division, ERINA

Mongolia's economy experienced the deepest contraction in decades in 2020, when the COVID-19 pandemic hit and varying restrictions were placed on economic activities worldwide. The scale of economic contraction was far larger than that of the "Lehman Shock" impacts of 2009. Nevertheless, the merest of economy revivals occurred in 2021, and it continued through 2022. According to latest estimates by the National Statistical Office (NSO) of Mongolia, the country's real GDP contracted by 4.6% year-on-year (yoy) in 2020, but it grew by 1.6% yoy in 2021, the lowest growth since 2016. The real GDP growth rate equaled 3.7% yoy during the first three quarters of 2022. That said, the real GDP was only 0.4% higher than its pre-pandemic level in 2019; thus, the economy is still in stagnation for the third year in-row due to the pandemic.

On this background, the 12<sup>th</sup> ERINA Joint Workshop on Mongolian Economy in Mongolia held under the theme: "Mongolian Economy—Challenges and Opportunities" on 24 August 2022 at the Mongolia-Japan Center for Human Resources Development (MOJC). The co-organizers of the workshop were the National Research and Consulting Center (NRCC) and MOJC. Over 30 participants joined the workshop.

This special feature presents three papers discussed at the workshop as follows:

- *Monetary and Macprudential Policy Measures of Mongolia during the Covid-19 Pandemic* co-authored by Bayardavaa Bayarsaikhan, Director General, Monetary Policy Department, Bank of Mongolia, Batbayar Baatarkhuu and Munkhbayar Gantumur, Economists at the same Department, argues that the policy packages implemented by the Bank of Mongolia during the pandemic addressed at easing the risks posed by the pandemic on the country's economy, notably its banking and financial sectors, were effective for supporting macroeconomic stability, economic growth, and preventing credit crunch. In compliance with international best practices, these measures targeted both creditors and borrowers, and included reducing the Bank of Mongolia policy rate to a historical low, easing commercial banks' reserve ratio requirements, loan restructuring, discouraging deposit dollarization etc.
- *Consumer Confidence Index in Mongolia-Q2 2022* co-authored by Soyolmaa Batbekh, Senior Researcher at the NRCC, Altantsetseg Batchuluun, CEO of the NRCC and Davaadorj Tsenddavaa, Director, MOJC, reports the results of the Consumer Confidence Index survey conducted in Mongolia in the second quarter of 2022. According to this survey, the Consumer Confidence Index (CCI) in Mongolia increased compared to the same period a year earlier supported by significant improvement in the current situation index. Consumers' appraisal of job availability helped to raise the current situation index earlier than expected. However, consumers had mixed expectations for the near

future. Demand for durable goods would be stable in the next 6 months, while the household financial index dramatically decreased. Moreover, more consumers expect the depreciation of the Mongolian local currency, tugrik, to continue. The authors indicated that the CCI is closely associated with economic growth, and the consumers became pessimistic when the quarterly growth rate fell below 2.6%.

- *Mining and Regional Disparity in Mongolia* co-authored by Soyolmaa Batbekh, Senior Researcher and Altantsetseg Batchuluun, CEO of the NRCC, argues that although Mongolia's mining-driven rapid economic growth since the mid-2000s led the country's per capita GDP to more than double over the past two decades, the mining sector had negative impacts on the employment of local economies in mining regions. Mongolia's 21 provinces (*aimags*) and the capital city of Ulaanbaatar were classified into mining and non-mining regions depending on their share of production in the mining sector. The cut-off share was 21.8%, which is the national average share of mining sector in the country's GDP during the period 2010-2021. According to this classification, six provinces were mining regions, while the other 15 provinces and Ulaanbaatar are non-mining regions.

In addition, this Special Feature includes a paper titled "*Issues on the Application of Civil Service 'Merit' Principles in Mongolia*" by Amartugs Tsenddavaa, Permanent Member of The Civil Service Council of Mongolia. The number of civil servants in Mongolia grew by around 1% per annum since 1996, equaling 208,864 in 2021, and accounting for 6.3% of total population. More than half of the civil servants are females, and the ratio was 62.7% in 2021. The author argues that while the 'merit' principle provides opportunities for civil servants to improve their performance, experience, and professional manner in order to be promoted, inaccurately defined criteria on capability and competencies are leading to ambiguity and improper actions, and sometimes to 'unlawful' handling and/or appointments. Thus, many trustworthy, responsible, more capable civil servants tend to leave and/or become reluctant to be innovative and productive. Therefore, a better performance management system as well as evaluation, monitoring, and auditing mechanisms must be further developed to implement the recently amended Law on Civil Service and ensure better responsibility and accountability of civil servants and public institutions.

The other presentations delivered at the above-mentioned joint workshop were:

- *Challenges to the Pension System in Mongolia and its Projections in the Long-Run* by Munkhzul Lkhagvasuren, Team Leader, EU Project on SDG-Aligned Budgeting to Transform Employment in Mongolia, Ministry of Finance of Mongolia. The number of persons insured with social insurance in the country was 1,181,300 persons (including

double counting) at the end of 2021, accounting for 96.4% of total workforce. In the past five years, social insurance fund expenditures have doubled, while the fund contribution income increased by 1.6 times, excluding health insurance. 33-49% of the total social insurance expenditure have been financed by state budget subsidies since 2016. The GDP share of pensions and social welfare allowances has been increasing recently, and it accounted for 6.6% in 2022. An estimation found that pension fund loss would increase abruptly after 2030, reaching 5% of GDP by 2040 and accelerate further thereafter. Consequently, reform of the pension and other social welfare systems is desirable to render it sustainable and ensure reliable social protection of the population. Such reform would include inflation indexation, wage base extension, contribution rate increase, and actuarially fair benefit reduction.

- *Meat Export and its Potential for Mongolia* by Erdenechuluun Tumor, Senior Lecturer, Mongolian University of Life Sciences, who explored the challenges and potential opportunities of foreign trade for Mongolia's meat industry. He underlined that meat is the second most important cash income source for herder households and is

one of the major export items within the livestock sector. The study revealed that current meat exports do not adequately support herder households' income levels, owing to the lower prices of meat exports and the limited direct involvement of herders in the export process. Therefore, the government should further promote herder's involvement by engaging rural cooperatives in meat export activities or initiating other arrangements that make the meat trade more beneficial to the livelihoods of herder households.

- *The Impacts of Air Pollution on Kindergarten Absences: Evidence from Mongolia* by Dulbadrakh Sanduijav, Associate Professor, National University of Mongolia. Heavy air pollution has become the most pressing issue in Ulaanbaatar, the capital city of Mongolia. According to Air Visual, Ulaanbaatar was one of the 50 most polluted cities globally in 2019. An assessment of the ambient air pollution impacts on kindergarten attendance found statistically significant positive correlation between air pollution and kindergarten absences. Moreover, the cumulative effect of air pollution was larger in magnitude than its contemporary effect.



# COVID-19パンデミックにおけるモンゴルの金融政策とマクロ・プルーデンス政策

モンゴル銀行金融政策部長 バヤルダワー・バヤルサイハン  
 モンゴル銀行金融政策部エコノミスト バトバヤル・バートルフー  
 モンゴル銀行金融政策部エコノミスト ムンフバヤル・ガントゥムル

## 要 旨

2020年早々から、COVID-19パンデミックはモンゴルの経済、銀行、金融部門に幅広く深刻な影響を及ぼしている。本稿は、COVID-19パンデミックが経済に影響を与える経路、経済・金融部門の主な不安定要因、リスク軽減のための政策とその成果を提示する。パンデミックが経済に影響を与える主な経路には、国際収支経路、収益経路、信用経路がある。マクロ経済指標や金融部門の指標によれば、パンデミックによって景気後退、信用収縮、債務超過、銀行システムにおけるその他の要因など、重大なリスクが生じていることが示されている。パンデミックの影響を緩和するため、モンゴル銀行は、(i) 債務者のための規制措置、(ii) 融資条件を軽減し、信用収縮を緩和し、経済成長を支援するための措置、(iii) 銀行システムの流動性、収益性、健全性を支える措置、で構成される包括的な政策を講じた。これらの施策は、信用の回復を後押しし、個人や事業体の支払能力を支え、景気回復を促進する一助けとなっている。一方、パンデミックにおいて実施された一連のマクロ・プルーデンス政策の結果、金融部門の収益性、流動性、自己資本比率は改善した。

キーワード：COVID-19パンデミック、経済的影響、金融政策、マクロ・プルーデンス政策、モンゴル  
 JEL Classification Codes: E5, E6, H12

## 1. COVID-19パンデミックが与える経済的影響の経路

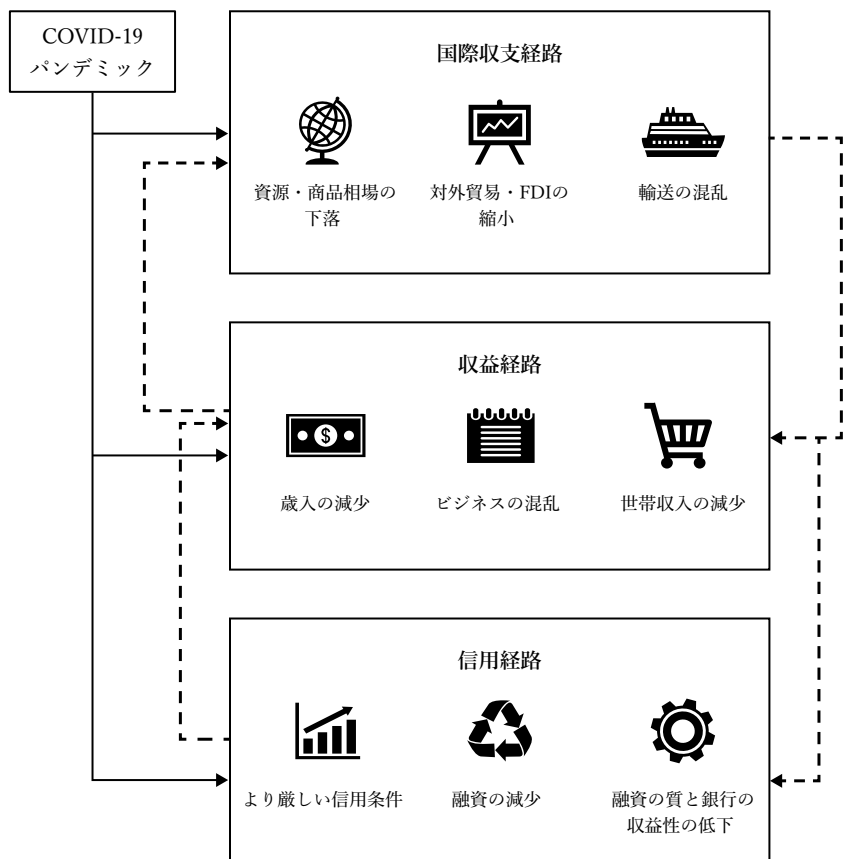
COVID-19パンデミックは (i) 国際収支経路、(ii) 収益経路、(iii) 信用経路を通じてモンゴルの経済、銀行、金融部門にマイナスの影響を及ぼしている(図1)。

### 1.1 国際収支経路

輸出と資本移動は、パンデミックに伴う規制や不確実性によってマイナスの影響を受けた。パンデミックの発生により、2020年上半期にはモンゴルの主要な輸出商品の価格が崩壊し、中国との国境税関が閉鎖されたことで石炭・石油の輸出が中断し、国際収支の赤字が増加した。具体的には、金属価格と原油価格がそれぞれ17%、40%下落し、交易条件の悪化を招いた。その結果、輸出収入が著しく落ち込み、純資本流出が加速し、通貨トゥグルグの下落へとつながった(図2)。

2020年後半からは世界経済と金融市場に好ましい変化が見られたものの、中国の「ゼロコロナ」政策によって新たな課題

図1 パンデミックにおいて経済・金融部門に影響を与える経路



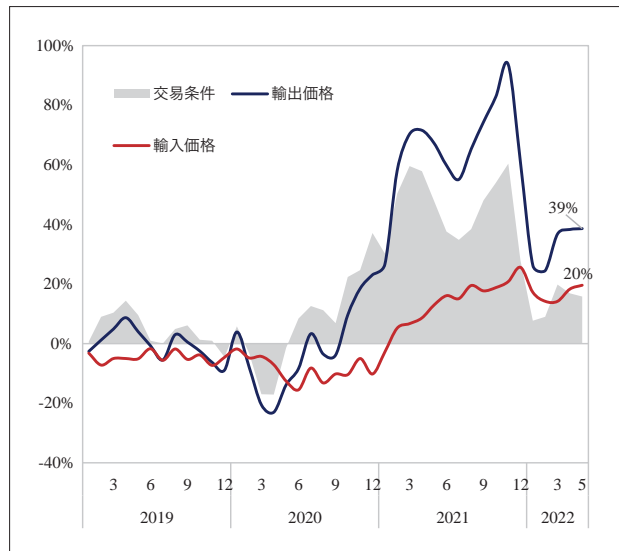
出所：Financial Stability Report of Mongolia-2021

に直面した。貿易収支は資源価格の回復、高成長を維持する中国経済、外需の回復によって支えられた。経常赤字が激減し、モンゴルへの外国直接投資が増

加したことで、2020年の国際収支は7億8670万ドルの黒字となった。主要な輸出品の価格は2021年に回復したものの、中国の「ゼロコロナ」政策によって国境税

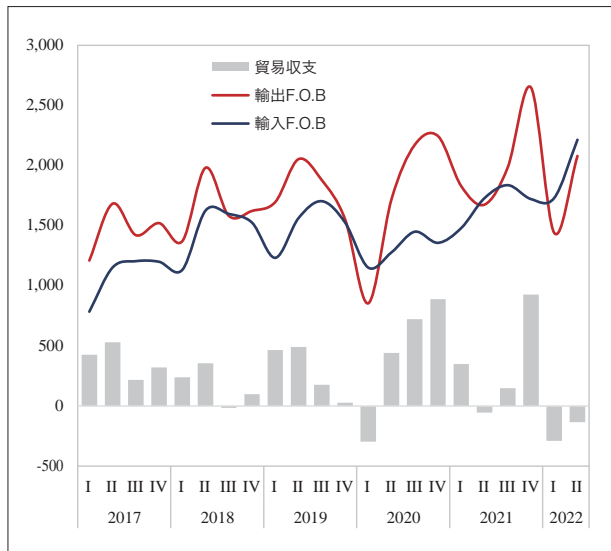
関が一部または完全に閉鎖されたことで、輸出は低迷し、2021年には2億2160万ドル、2022年上半期には10億5800万ドルという多額の経常赤字を引き起こした(図3)。

図2 交易条件、年間増加率



出所: モンゴル国家統計局、モンゴル関税総局

図3 貿易収支(契約価格、100万ドル)



出所: モンゴル銀行、モンゴル関税総局

## 1.2 収益経路

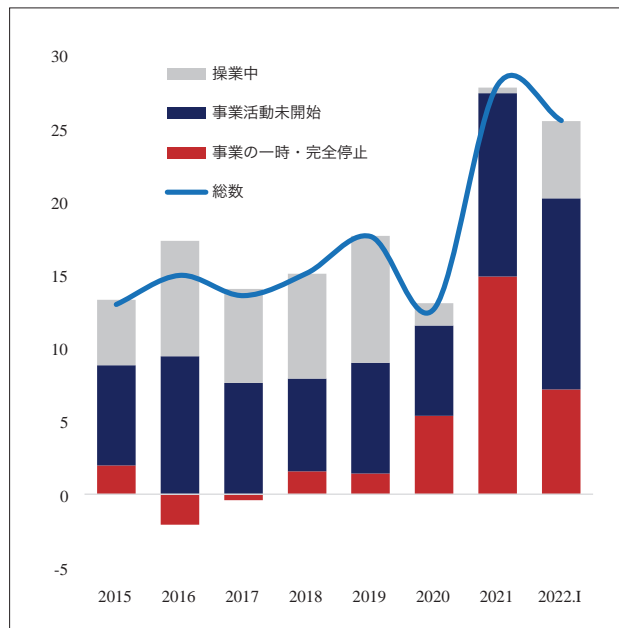
パンデミックによって鉱工業収益やその他の企業収益が大幅に失われた結果、巨額の財政赤字が生じた。2020年初頭からは、モンゴルの総合予算の収入が減ったことで財政赤字が増加した。とりわけ COVID-19パンデミックによる影響や検疫措置によって、経済活動が減速し、石

炭・石油の輸出が落ち込み、それに伴う税収不足が歳入減へとつながった。

貿易、サービス、建設、製造部門のような労働集約型部門においては経済活動の乱れが顕著となった。これらの部門では一時的または完全に操業停止した企業が最も多かった(図5)。全体では、パンデミックの影響で一時的または完全に

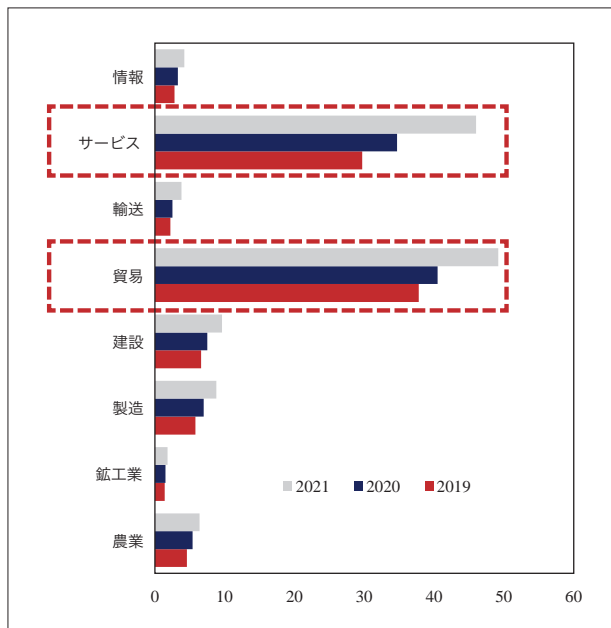
閉鎖した事業体の数は、2020年は1万2000社の増加、2021年には2万7000社の増加となり、過去10年間で最多となった(図4)。パンデミックによる労働市場の悪化に伴い世帯収入が減少したため、銀行に融資条件の緩和や延滞貸付金の繰り延べを求める依頼や要望が増加した。観光、教育、宿泊、食品、輸送、倉

図4 登録された企業数、年変化(千)



出所: モンゴル国家統計局

図5 一時的・完全操業停止企業数(千)



出所: モンゴル国家統計局

庫サービスの事業者はパンデミックによって大きな打撃を受けた。例えば、2020年上半期の工業部門の企業売上高は前年同期比30.3%減の7.1兆トゥグルグとなった。特に、採掘・採石部門の売上高は39%減少し、製造部門の売上高は15.6%減少した。しかし、2021年の同時期では鉱工業部門が63.7%増加し、急回復していること

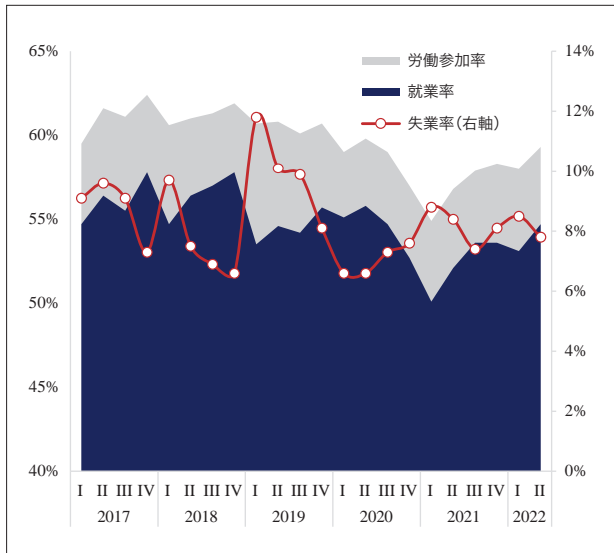
を示している。これは採掘・採石業の売上高が79.6%増加し、製造業の売上高が40.6%増加したことが主な要因であった。

COVID-19パンデミックは労働市場に深刻な影響をもたらした。パンデミックの開始によって労働参加率は低下し、2021年の第1四半期には過去15年間で最も低い54.9%にまで落ち込んだ。失業率は

パンデミックの開始以来増加し、2021年の第1四半期には8.8%に達した(図6)。

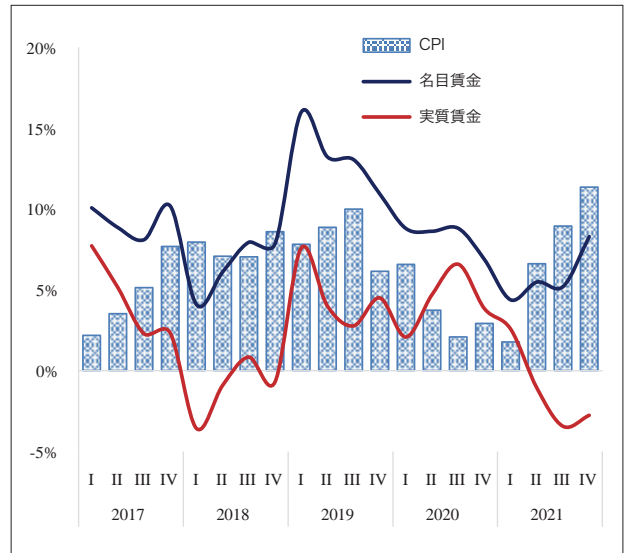
モンゴルの平均賃金は2021年の第4四半期には8.3%増加したものの、財、製品、サービスの価格上昇が加速したため、実質賃金は2.8%減となった。したがって、世帯の購買力は下落方向に転換し、家計がさらに圧迫されるようになった(図7)。

図6 労働参加率、就業率、失業率



出所：モンゴル国家統計局

図7 名目・実質賃金、年間増加率



出所：モンゴル国家統計局

### 1.3 信用経路

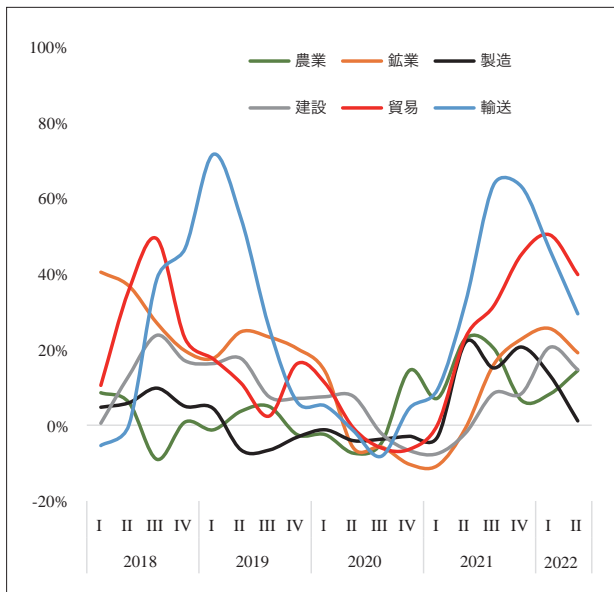
経済活動に影響を与える主な伝達経路である信用の増加率は、パンデミックでのリスクや不確実性が増したことで急激に減速した。2020年の上半期に銀行

が提供した新規融資額は9.4兆トゥグルグとなり、2019年同期比で7.7%の減少となった。銀行貸出観測調査によると、こうした銀行の融資額の大幅な減少は、COVID-19パンデミックに伴う事業活動

の削減や銀行のリスク回避が主な要因となっている。

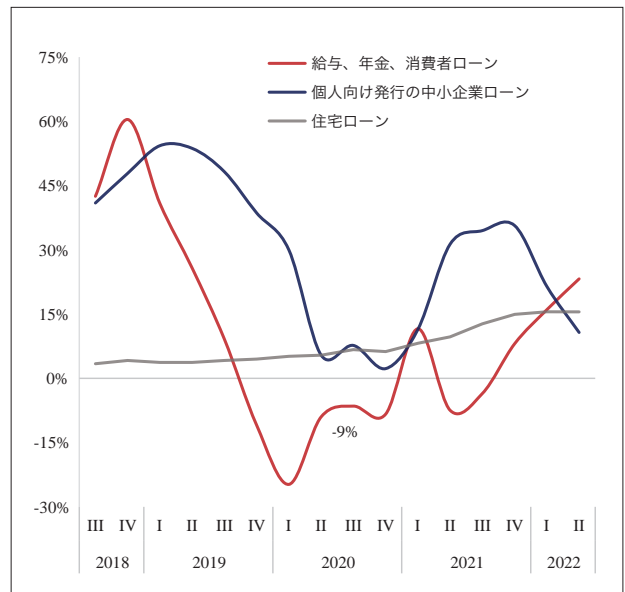
2020年は主要経済部門に提供された新規融資額が激減した(図8)。同様に、2019年は約10%だった個人向け給与、

図8 民間部門向け融資、年間増加率



出所：モンゴル銀行

図9 個人向け融資、年間増加率



出所：モンゴル銀行

年金、消費者ローンの増加率は、2020年にはマイナス10%へと減速が目立った(図9)。また、融資の質も急速に悪化し始めた。銀行システムに実施されたストレステストの結果によると、銀行の収益性が低下すると営業損失や融資の縮小が生じ、金融部門と実体経済部門が相互接続していることで経済活動にマイナスの影響を及ぼすことが分かった。

## 2. COVID-19パンデミックがもたらす経済・金融部門の安定に対するリスク

パンデミックによって金融安定リスクが高まった。2020年はCOVID-19パンデミックが世界的に拡大したことで、モンゴル経済は急激に収縮し、企業・家計部門は収入減や債務返済能力の問題、ローンの返済難などの大混乱に見舞われた。金融システム全体のリスク指標によれば、2020年早々からシステミック・リスクが急増し、とりわけ変化の50%以上はマクロ的リスクと対外部門のリスクが原因となっていた。また、銀行部門、資本市場、流動性、資金調達におけるリスクが増したことで、システミック・リスクがさらに増加した(図10)。経済および金融部門の安定性に影響を及ぼしていた主なリスクは以下のとおりである。

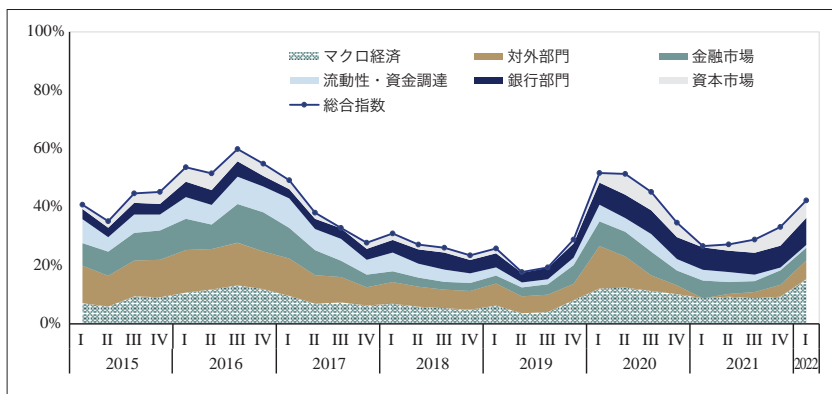
### 2.1 経済収縮

COVID-19パンデミックの発生に伴い、実質GDP予測値は急速に悪化した(図11)。2020年はパンデミックが拡大するにつれ、外需は萎み、資源価格は下落し、モンゴルへの外国直接投資と対外貿易が失速した。これは収益経路を通じて歳入減として反映され、特に、パンデミックに伴い企業収益が滞り、家計収入の減少が広範囲に及んだことで2020年は4.6%の経済収縮となった。

### 2.2 信用収縮

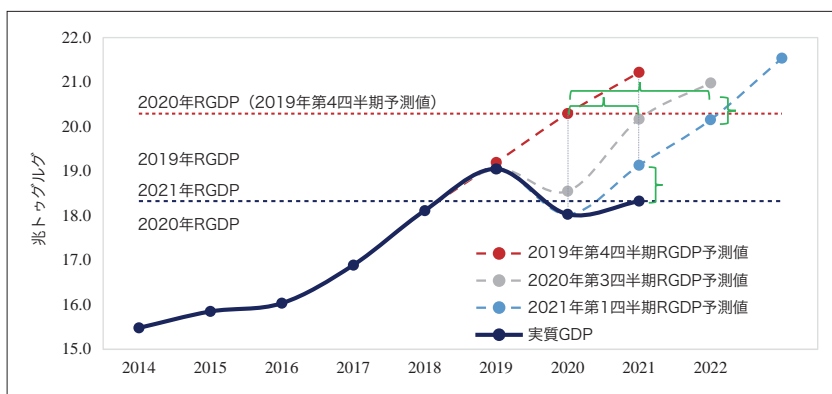
金融部門の政策が緩和的でなかった場合、金融システムにはパンデミックによる大幅な信用収縮が生じていたであろう。パンデミックをきっかけに経済活動が低迷したことで金融市場の不確実

図10 金融システム全体のリスク指標



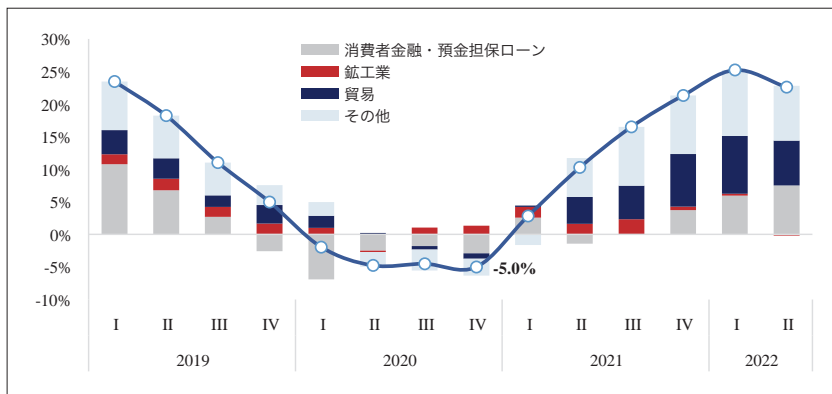
出所:モンゴル銀行

図11 実質GDP予測値の推移



出所:モンゴル銀行

図12 主な部門別銀行融資額、年間増加率



出所:モンゴル銀行

性が高まり、銀行やその他の貸出機関が信用条件を引き締め貸出を減らす方向にシフトしたことが、信用経路を通じて実体経済の悪化へとつながった。例えば、2020年の銀行融資残高および新規融資はそれぞれ5%と6%近く減少した(図12)。

### 2.3 企業・家計債務者の返済能力

パンデミックによって企業・家計債務者の

返済能力のリスクが高まった。パンデミックによって企業の経営活動が低下し、家計・企業の収益が減少したことで破産のリスクが高まった。具体的には、商業銀行の不良債権の総額(例えば、延滞貸付金や焦げ付き融資の合計)が、2020年5月までに4万3600の債務者によって3兆トゥグルグに達した。これらの債権の約74.4%である2兆3000億トゥグルグは企業向け融資で、残りの25.6%である7916億トゥグルグは消費者

ローンであった。さらに、2270億トゥグルグの元本と670億トゥグルグの利息は既に返済期限を過ぎていた。

これらの課題が放置されていた場合、さらなる悪化によって債務者の破産リスクが高まり、銀行の収益性は低下し、健全性が悪化していたであろう。また、銀行の流動資金不足や資本金不足のリスクが高まっていたであろう。

商業銀行の報告によれば、モンゴル銀行の施策が無ければ、銀行システムの不良債権総額は、融資総額の16.1%相当となる1兆5000億トゥグルグがさらに追加されていた可能性があることが示されている。

## 2. 4 銀行の収益性、流動性、自己資本比率

パンデミックの発生当初に銀行の収益が激減して融資の質が低下したことで、銀行部門のリスクが急速に高まり、銀行の流動性と自己資本比率にマイナスの影響を及ぼした。特に、パンデミックへの対応措置として行った厳しいロックダウンによって企業の経済活動が失速し、同時に銀行業務のデジタル化が急務となった。これらの措置は銀行のサービス料からの収益に不利に働き、銀行経営がさらに不安定になるおそれがあった。

## 2. 5 銀行負債のドルシフト

パンデミックの間、預金のドルシフトが懸念され続けた。銀行融資のドルシフトは数年にわたって急激に減少したものの、パンデミックでの預金のドルシフトが高水準に達したため、両者に大きな乖離が生じてしまい、それによって通貨の不均衡が高まり、銀行・金融部門にとっての大きなリスクとなった。

## 3. COVID-19の影響を緩和するための政策措置とその結果

モンゴル銀行は、国際金融機関の提言や他国の中央銀行の効果的な対策を考慮し、パンデミックの経済・金融安定性への影響を緩和するための包括的な政策を実施した。

これらの施策は金融政策とマクロ・ブロード政策のための国際的なベスト・プラクティスに沿ったもので、金融の仲介を

支援し、パンデミックが経済に及ぼすマイナスの影響を緩和するのに役立っている。

### 3. 1 債務者のための規制措置

債務者への負担を軽減するため、モンゴル銀行は国際的なベスト・プラクティスに準拠した迅速かつ強力な政策を実施した。パンデミックによる影響を緩和する各国共通の政策には、困難に陥っている債務者の消費者ローンや事業融資の条件緩和、債務返済の先送り、債権区分に用いる規定期間の一定の延長などがあった。そのため、モンゴル銀行は以下の措置を実施した。

- 住宅ローン、給与、年金、その他を対象とする消費者ローンの債権区分に用いる規定期間を一定期間延長し、区分要件を一時的に停止する
- あらゆる種類の融資のリストラチャリングを許可する
- 銀行に対し、困難に陥っている債務者の消費者ローン返済の繰り延べを許可する
- 政府の補助を受けた住宅ローンの元本と利息の返済を繰り延べする

モンゴル銀行は「資産区分、準備金およびその支出に関する規則」や「銀行業務に対するブルーデンス比率の設定と監視に関する規制」の規程に一時的な変更を加えた。とりわけ、銀行は債務者の融資期間を変更したり、問題となっている融資の区分にあたり、規定の期間をモンゴル銀行が定めた間先送りしたりすることができるようになった。

2020年4月13日に通貨政策委員会(MPC)

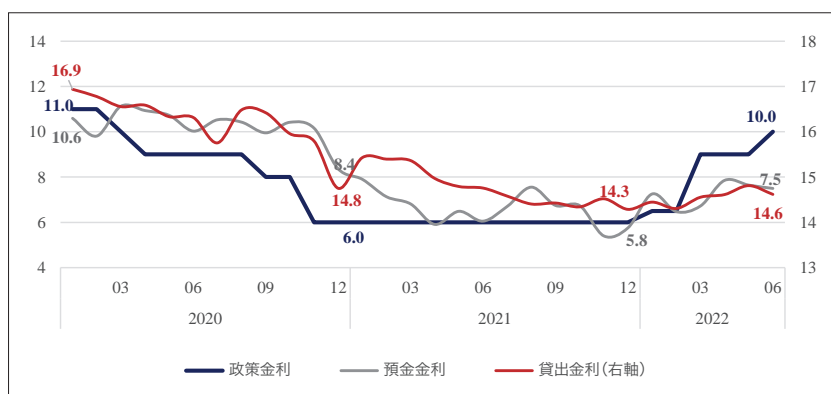
は困難に陥っている債務者の消費者ローン返済を最長12カ月間繰り延べする決断をした。2020年8月7日の MPC 会合の決定に基づき、期限が2020年末まで延長された(モンゴル銀行、2020)。

### 3. 2 融資条件を緩和し、信用収縮を軽減し、経済成長を支援するための措置

政策金利はかつてない水準に引き下げられた。モンゴル銀行は2020年に政策金利を全体で5~6%徐々に引き下げたが、2021年はそのまま据え置いた。こうした判断は、パンデミックで個人や事業者が直面した資金難や債務負担を軽減し、経済回復を支援する目的で行われた。施策の結果、新規融資への加重平均金利は、2019年12月の16.9%から2020年末には14.8%という前代未聞の低金利に達し、それ以降は14~15%程度で比較的安定した。その一方、新規預金への加重平均金利は2019年12月の10.5%から、2020年末、2021年末にはそれぞれ8.4%、5.8%へと引き下げられた(図13)。

国内通貨トゥグルグの支払い準備率は2008~2009年の世界的金融危機以来の最低率に引き下げられた。支援金利政策によると、モンゴル銀行は2020年にトゥグルグの支払い準備率を4.5~6%引き下げ、金利変動幅を政策金利のプラス・マイナス(+/-)1%に調節し、中小企業や非鉱業の輸出を支援するための長期的なレポ取引の手段を導入した。支払い準備率を引き下げることで、銀行システムに約7000億トゥグルグが供給された。前述の一連の判断は銀行の流動性を支え、負債のドル

図13 金利



出所:モンゴル銀行

比率を抑え、信用の増加を促進し、経済での金融仲介役を支えることを目的としている。

経済と企業の返済能力を支えるため、政府は2021年2月に「医療保障と経済回復のための10兆トゥグルグの包括的な計画」を導入した(後述)。このプログラムの下で、個人、事業者、遊牧民の正常な経済活動と破産リスクの軽減を支援するため、2021年に総額5兆5000億トゥグルグの補助金とレボ融資を提供する計画であった。(i)雇用保障プログラム、(ii)住宅ローン補助金、(iii)農業部門補助金、(iv)長期レボ融資によって、計6万1719の債務者が2021年末までに総額4兆2414億トゥグルグの融資を受けた(表1)。具体的な事業計画としては、56件の事業のうち25件は2021年に実施、3件は2021~2022年に実施、17件は2021~2024年に実施、残る11件は感染レベルやパンデミックの状況に応じて実施が計画されている。

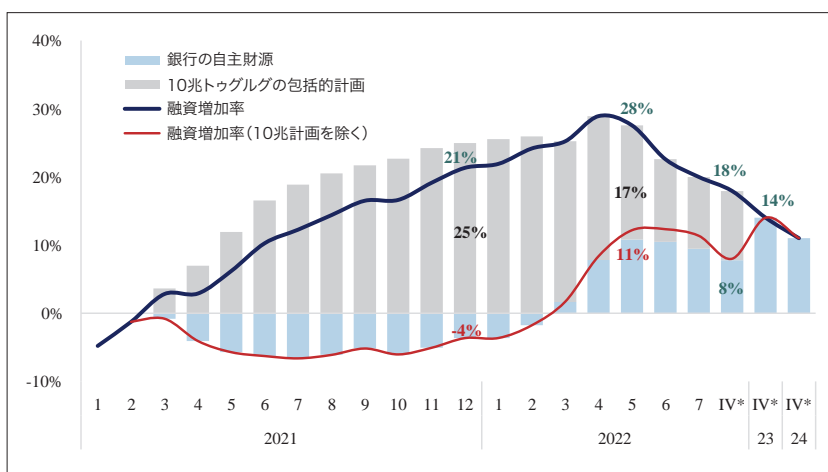
2021年の事業進捗実績は89%であった。雇用と長期的なレボ融資の手段を確保するためのプログラムの下、初期配分の43%は卸売・小売部門に、18%はその他のサービス部門に提供された。2021年末時点の推定値では、このプログラムによって約14万6000件の雇用が守られ、内訳は、約35%(5万708)が卸売・小売部門、19%(2万7131)がサービス部門、13%(1万9289)が製造部門、7%が建設部門、4%が世帯活動、3%が農業部

表1 経済回復のための10兆トゥグルグの包括的な計画の施策実績、2021年

融資プログラム	融資金額		債務者数	雇用数
	予算 (10億トゥグルグ)	充当 (10億トゥグルグ)		
<b>A. 銀行の自主財源</b>				
就労支援ローン	2,000.0	1,965.6	25,514	109,763
農業部門融資	500.0	494.3	20,607	
住宅ローンプログラム	380.0	357.6	3,462	
<b>B. モンゴル銀行による財源</b>				
長期レボ融資	2,000.0	834.9	3,395	36,622
住宅ローンプログラム	620.0	598.1	8,761	
<b>Total</b>	<b>5,500.0</b>	<b>4,241.4</b>	<b>61,719</b>	<b>146,385</b>

出所:モンゴル銀行、モンゴル財務省

図14 信用増加率



出所:モンゴル銀行

門、19%(2万7598)がその他経済部門となった<sup>1</sup>。

前述の政策は信用の増加を促進し、

実体経済の資金需要に対応し、経済回復にプラスの効果をもたらした。2021年初頭から、モンゴルの金融サイクルは、世界

### 【経済回復のための10兆トゥグルグの包括的な計画】

2021年2月17日の政府決議第42号の下、国民の健康を守り、無理のない住宅計画を提示し、生産・サービス・雇用を支援し、農業生産と遊牧民の収入を促進するための「医療保障と経済回復のための10兆トゥグルグの包括的な計画」が実施された(Legalinfo.mn, 2022)。モンゴル銀行、信用基金、貯金保険機構、銀行は、決議の5項目目で示された雇用の創出と農業支援融資活動で協力するための協定を結んだ。

計画には2つの主な目標があり、1つはパンデミックでの経済回復である。銀行や金融機関による融資を強化し、信用保証制度を利用して銀行のリスクを分担し、政府が承認した予算内で債務者に一定割合の利息を払うことで、債務者の資金的負担を軽減するため、以下の目標が定められた。一方、この計画は国や外国からの融資や補助金による事業の資金調達を強化することで、景気を刺激することを想定している。さらに、政府はエルデネス・タバン・トルゴイ社の開発事業や採算の取れるその他の事業に対し、国家予算や政府の債務限度を圧迫しない形で資金供給することを計画した。

<sup>1</sup>出所:「Report on Implementation and Outcome of the MNT 10 Trillion Comprehensive Plan for Health Protection and Economic Recovery - 2021」、モンゴル銀行(2022)

表2 計画実施の財源

主な実施内容・期間	予算 (10億トゥグルグ)	財源・実施計画
就労支援ローン 2021年	2,000.0	銀行の財源を基に、事業者に対して6%、個人に対して7%の利息割引をする。2021年の利息割引は、事前に承認された予算支出額に変更せず、予算を再編して資金調達され、2022年の利息支援は年次予算に含まれる。
住宅ローン 2021～2022年	2,000.0	モンゴル銀行と銀行が協力して資金提供する。予算への追加負担無し。
レボ融資 2021年	2,000.0	レボ融資の資金調達はモンゴル銀行が行う。予算への追加負担無し。
農業融資 2021年	500.0	銀行の財源を基に、融資に対して最大7.65%までの利息割引支援をする。2021年の利息割引は、既に承認された予算支出額は増加せず、予算を再編して資金調達され、2022年の利息支援は年次予算に含まれる。
マイクロ地区インフラ整備計画 2021～2024年	1,000.0	エルデネス・タバン・トルゴイ社の建設資金は国内証券市場での債券発行によって調達し、その他の外国融資、支援事業、若者向けの雇用訓練は、承認された年次予算の範囲内で実施する。政府の予算・負債に負担をかけずに、財政効率の良い商業プロジェクトを準備・実施する。
若者向けの雇用訓練 2021～2024年	500.0	
大規模事業融資 2021～2024年	2,000.0	
<b>合計</b>	<b>10,000.0</b>	

経済と金融市場の急速な回復、商品価格の上昇、その他の外部環境の好転、国内銀行を通じた補助金付き融資の大量供与によって、均衡水準を超えて回復している（図15）。2022年3月末時点での銀行融資の総貸付残高は前年同期比で約25%増加した（図16）。

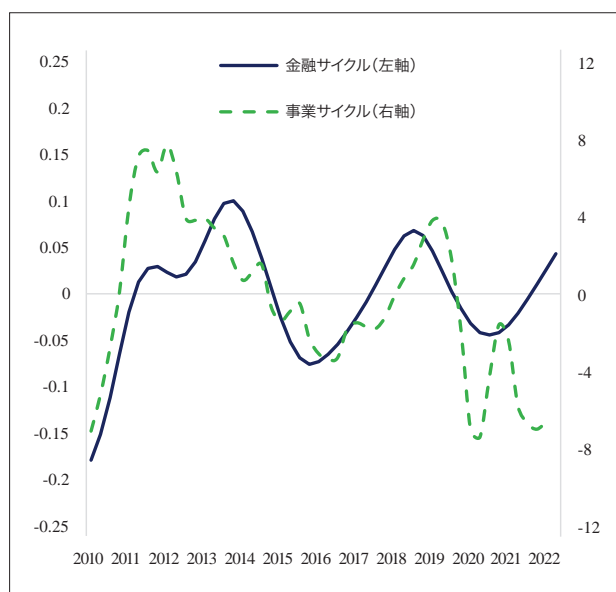
過去2年間における信用の増加の力強い回復が、個人や事業者の債務返済能力を支えてきた。さらに、債務者のための規制緩和措置を行ったことで、個人や事業者が直面する負担が軽減され、实体经济にも資金源が追加提供された。しかし、今後のさらなる信用増加の見通しに

ついては、国内の経済状況とマクロ環境に応じて注視・調整するべきである。

### 3.3 銀行システムの流動性、利益性、健全性を支える措置

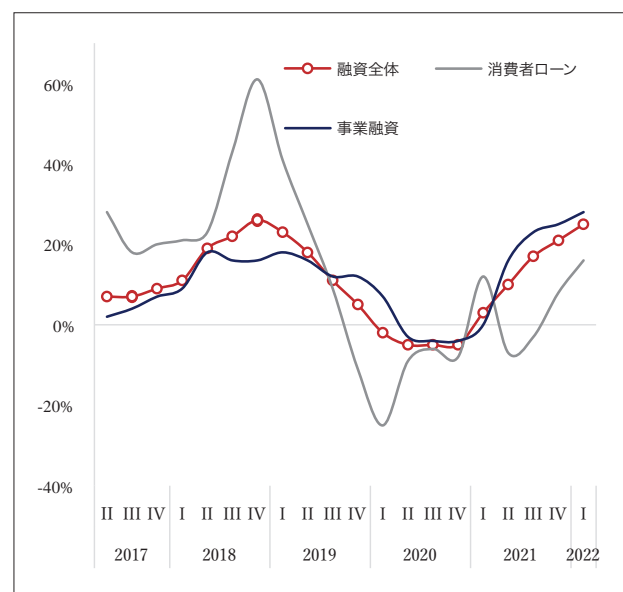
モンゴル銀行は銀行の流動性比率を25%から20%に引き下げる決定をし、銀

図15 事業・金融サイクル



出所：モンゴル銀行

図16 融資、年間増加率（前四半期比）



出所：モンゴル銀行

行に対して自己資本バッファの要件を違反しても罰則を課さないことを一時的に認め、銀行の財務状況にプラスの影響を与えた。また、パンデミックによるマイナスの影響を緩和するため、モンゴル銀行は2020年3月に資産区分と引当金に関する規制を一時的に緩めた。流動性比率を引き下げたためのこの措置は2021年7月に停止され、資産区分に関する先送り措置が2021年から段階的に解除されてきた。

前述の施策の実施によって、銀行部門の収益性、流動性、自己資本比率が改善された。具体的には、不良債権比

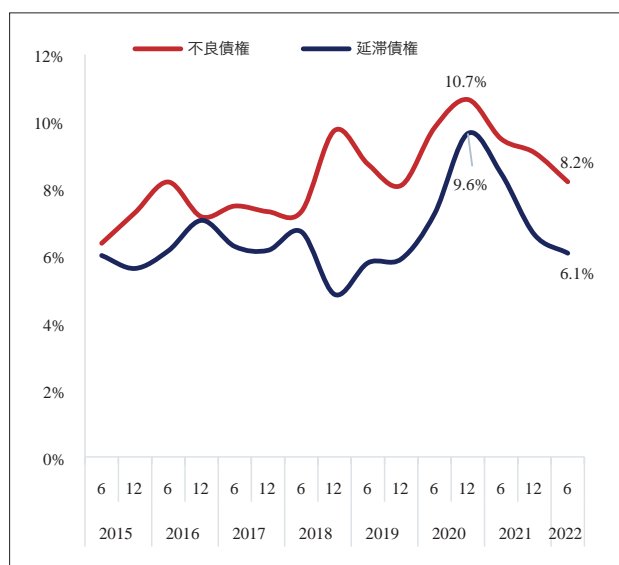
率と不良債権額が共に大幅に低減した(図17)。また、10兆トゥグルグの経済回復プログラムを導入した結果、企業の破産リスクも緩和された。

金融部門のドルシフトを緩和する一連のマクロ・プルーデンス政策を実施した結果、銀行預金のドル比率は2020年の第4四半期から2022年の第1四半期にかけて急減した(図18)。パンデミックにおける経済および金融市場の状況やリスクを考慮し、銀行預金のドルシフトの抑制とトゥグルグの相対利回り維持のため、以下の対策が実施さ

れた。

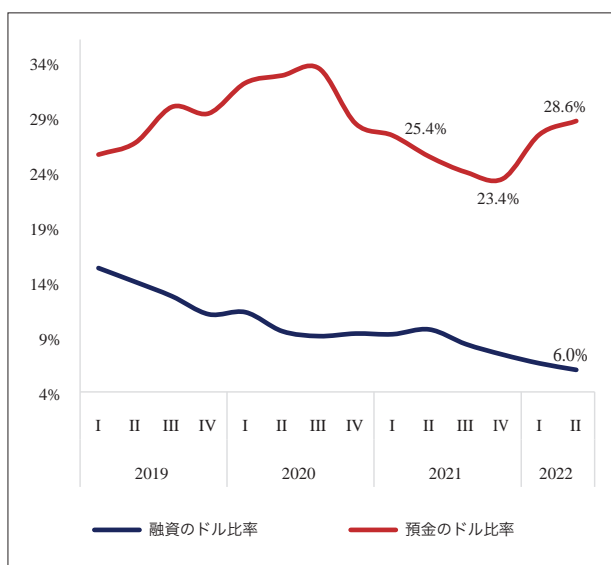
- 外貨預金に対してさらに高い支払い準備率を設定する。
- 銀行破綻の際の保険対象から外貨預金を外す。
- 個人および事業者に対し、国内銀行口座間の外貨送金を制限する。
- 必要準備金の報酬金額を、FX 預金および当座預金全体に占める高有利子 FX 預金および有利子 FX 当座預金の比率に応じて減額する。

図17 融資全体に占める不良債権と特記債権の比率



出所:モンゴル銀行

図18 融資と預金のドルシフト



出所:モンゴル銀行

#### 4. 結論

COVID-19パンデミックは、国際収支経路、収益経路、信用経路を通じてモンゴル経済、銀行、金融部門にマイナスの影響を及ぼしている。輸出と資本移動がパンデミックに伴う規制や不確実性からマイナスの影響を受けている一方、鉱業収益やその他の企業部門の収益がパンデミック初期に大幅に不足するとともに、労働市場にマイナスの影響を大きく与えた。総じて、パンデミックは、景気後退、信用収縮、

債務超過、銀行システムにおけるその他のリスク要因など、経済と金融部門の安定性に対して重大なリスクをもたらした。これらのリスクを緩和するため、モンゴル銀行は国際的なベスト・プラクティスに準拠した迅速かつ包括的な政策を実施した。融資の条件緩和、債務返済の先送り、区分要件の緩和に関連した規制措置は債務者への負担を軽減する一助となった。融資条件を軽減し、信用収縮を緩和し、経済成長を支援するため、モンゴル銀行は政策金利と支払い準備率を引き下げる

ための一連の対策を実施した一方で、政府は「経済回復のための包括的な計画」を導入した。これらの措置は信用の増加を促進し、個人や事業者の債務返済能力を支援し、経済回復を促進する手助けとなった。その一方で、パンデミックにおける一連のマクロ・プルーデンス政策を実施した結果、銀行部門の収益性、流動性、自己資本比率が改善された。

[英語原稿をERINAにて翻訳]



## &lt;参考文献&gt;

- Bank of Mongolia. (2020) . *Monetary Policy Statement*. Retrieved from <https://mongolbank.mn/eng/archivepolicy.aspx>.
- Bank of Mongolia. (2021) . *Financial Stability Report*. Retrieved from [https://mongolbank.mn/documents/sanhuugintb/FSC\\_report\\_202109.pdf](https://mongolbank.mn/documents/sanhuugintb/FSC_report_202109.pdf).
- Bank of Mongolia. (2022) . *Report on Implementation and Outcome of the MNT 10 Trillion Comprehensive Plan for Health Protection and Economic Recovery - 2021*. Retrieved from [https://www.mongolbank.mn/documents/mbez\\_eng.pdf](https://www.mongolbank.mn/documents/mbez_eng.pdf).
- Government Resolution No.42 of February 17, 2021*. (2022) . Retrieved from <https://legalinfo.mn/mn/detail?lawId=16160842294411>.

## **Monetary and Macroprudential Policy Measures of Mongolia during the COVID-19 Pandemic (Summary)**

**BAYARDAVAA Bayarsaikhan**

*Director General, Monetary Policy Department, Bank of Mongolia*

**BATBAYAR Baatarkhuu**

*Economist, Monetary Policy Department, Bank of Mongolia*

**MUNKHBAYAR Gantumur**

*Economist, Monetary Policy Department, Bank of Mongolia*

From early 2020, the COVID-19 pandemic has had severe and widespread impacts on Mongolia's economy, notably on its banking and financial sector. This paper presents channels of COVID-19 pandemic impact on the economy, major risks to the stability of the economy and financial sector, and policy measures to mitigate risks and policy outcomes. The main channels of pandemic impact on the economy are balance of payments, income, and credit channels. Macroeconomic and financial sector indicators show that the pandemic has posed significant risks including economic contraction, credit crunch, insolvency among borrowers, and other major risks in the banking system. To mitigate the impact of pandemic, the Bank of Mongolia adopted comprehensive policy measures, consisting of (i) regulatory measures targeted toward borrowers, (ii) measures to ease financial conditions, mitigate credit crunch and support the economic growth, and (iii) measures to support the liquidity, profitability and soundness of the banking system. Those measures have helped to boost credit growth, support the solvency of individuals and entities, and promote economic recovery. On the other hand, banking sector profitability, liquidity, and capital adequacy have improved as a result of sequential macroprudential measures during the pandemic.

Keywords : COVID-19 pandemic, Economic impact, Monetary policy, Macroprudential policy, Mongolia

JEL Classification Codes : E5, E6, H12

# 2022年第2四半期のモンゴルの消費者信頼感指数

国立調査コンサルティングセンター (NRCC) 主任研究員・ERINA 共同研究員 **ソヨルマー・バトベヘ**

国立調査コンサルティングセンター (NRCC) 所長・ERINA 共同研究員 **アルタンツェツェゲ・バトチュルン**

モンゴル国立大学モンゴル・日本人材開発センター (MOJC) 所長・ERINA 共同研究員 **ダワードルジ・ツェンドダワー**

## 要旨

本稿では、2022年第2四半期にモンゴルで実施された消費者信頼感指数調査の結果を報告する。消費者信頼感指数 (CCI) は、モンゴルの消費者が経済の全体的な状態と財政状況について感じる楽観的な度合いを測定する。人々の支出および貯蓄活動は、収入と所得の安定性についてどの程度自信を持っているかにかかっている。経済が拡大するにつれて消費者の信頼が高まると、消費者はより多くの購入を行うことになる。ただし、経済が縮小するにつれて消費者の信頼が低くなると、消費者は支出を削減し、さらに節約する。信頼に加えて、この調査では、世帯の耐久消費財の購入計画、主要な指標の1つである価格予想 (インフレ、為替レート、住宅価格、金利)、および自国通貨の信頼も測定する。

2022年第2四半期に、CCI は前年同期と比べて13.5ポイント上昇し、87.1に達した。現況指数は大幅に改善した。消費者のビジネス状況と求人に対する評価が大きく改善した。予想指数は僅かに上昇した。耐久財の需要は前年から15.6%増加した。

さらに、消費者が予想する年間インフレ率は約11.4%で、今後6カ月のインフレ率は約9.5%であると予想している。この調査は2014年から四半期ごとに実施されている。四半期ごとにランダムに選択された1000人を対象としている。

キーワード：価格、ビジネスの変動とサイクル、労働、消費者

JEL Classification Codes: E3, N3

## 1. はじめに

消費者信頼感指数 (CCI) は、モンゴルの消費者が経済の全体的な状態と彼らの財務状況について感じる楽観的な度合いを測定する。人々の支出と貯蓄活動は、収入と所得の安定性についてどの程度自信をもっているかにかかっている。経済が拡大するにつれて消費者の信頼が高まると、消費者はより多くの購入を行うことになる。ただし、経済が縮小するにつれて消費者の信頼が低下すると、消費者は支出を削減し、さらに節約する。したがって、CCI は起こりうる総需要変動に関する貴重な情報を提供する。国立調査コンサルティングセンター (NRCC) およびモンゴル国立大学モンゴル・日本人材開発センター (MOJC) は、全国を代表するサンプルとなる1000人を超える個人を対象に、四半期ごとに CCI 調査を実施している。CCI には2つのコンポーネントがある。現況指数と予想指数である。

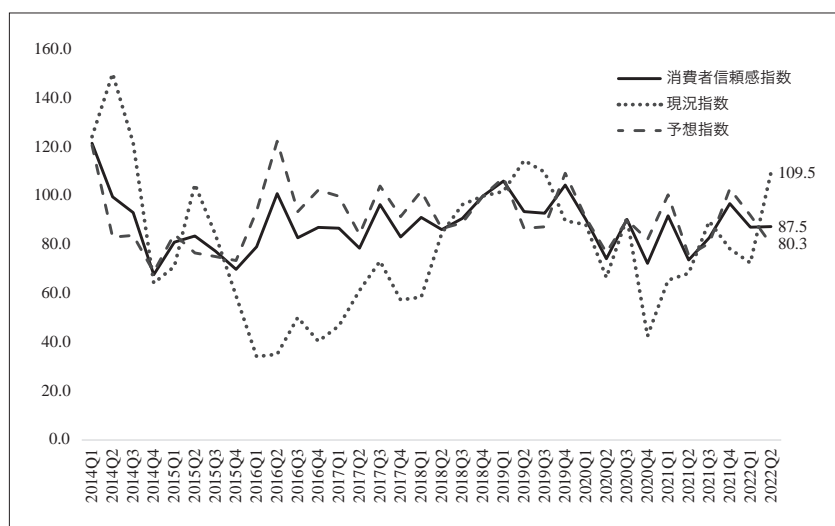
2022年第2四半期に、モンゴルの CCI は前年同期と比べて13.5上昇し、87.5に達した (図1)。消費者の現在のビジネス

状況と労働市場の状況に対する評価から計算される消費者の現況指数 (CSI) は、68.3から109.5へと大幅に上昇した。近い将来のビジネス状況、収入、雇用状況についての消費者の予想を表す予想指数 (EI) は、75.7から80.3へとわずかに上がった。

消費者のビジネス状況に対する評価は

様々である。消費者の8.9%はビジネス状況が「良い」と回答し、前期から6.2ポイント低下した。消費者の43.9%はビジネスの状況は「悪い」と回答し、前期から22.2ポイント低下した。労働市場に対する消費者の評価は大幅に改善し、23.8%は職が「豊富にある」と回答し、前期から0.7%ポイント上昇した。消費者の30.6%は「職

図1 消費者信頼感指数 (CCI) (2018=100)



出所：NRCC の調査を基に筆者が推定し作成

注：消費者信頼感指数は季節調整され、2018年の指数を基に調整されている。

に就くのが難しい」と回答し、前期から14.6ポイント低下した。

近い将来への消費者の期待感は様々であった。消費者の17.3%は近いうちにビジネス状況が「良くなる」と回答し、消費者の23.6%は今後数カ月でビジネス状況は「悪くなる」と回答した。消費者の12.3%は雇用状況が改善すると考え、前期から2.2ポイント低下した一方、22.7%は悪化すると考え、4.1ポイント上昇した。消費者の18%は収入が増える予想し、前期から2.8ポイント低下し、12.7%は収入が減ると予想し、4.8ポイント低下した。

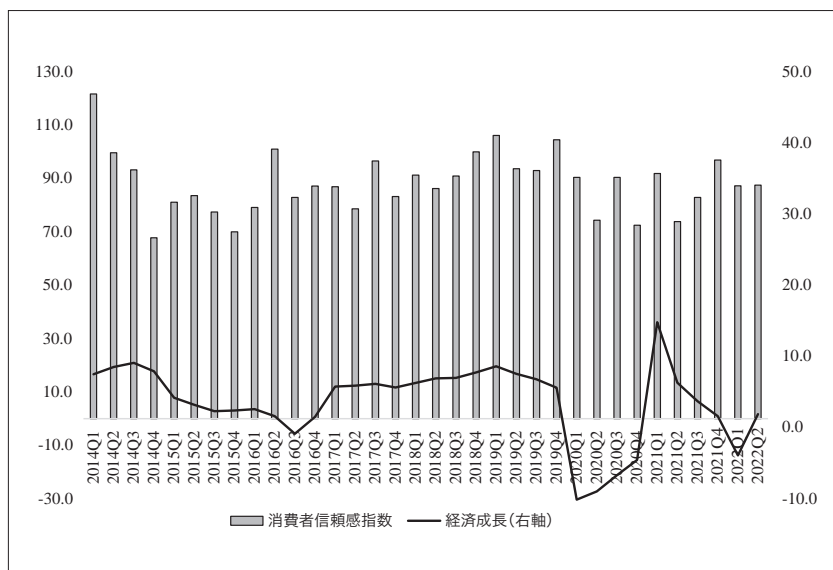
図2はCCIと経済成長を示している。四半期ごとのCCIの動向からは、この指標がモンゴルの経済成長と密接に関係していることが分かる。消費者が楽観的な場合の四半期平均GDP成長率は6.1%であった一方、消費者が悲観的な場合の成長率は2.6%を下回った。

世帯の家計状況は大幅に悪化した。回答者の49.9%が収入減を経験した。この割合は前期と比べて13.5ポイント、前年同期と比べて2.2ポイント高かった。回答者の12.9%は50%以上の大幅な収入減を経験した。世帯の家計指数はこうした変化を反映している。今期は、家計指数が49.3にまで激減した。回答者の60.5%は、過去1週間に少なくとも1時間以上働いたか、もしくは定職を持っている。就業率は2021年の同時期から1ポイント上昇した。

耐久財に対する需要は前年よりも15.6%増加した(図3)。増加の主な要因は観光である。観光需要はパンデミックの時期に激減したものの、パンデミック前の水準にまで復活した。2019年の第2四半期では、旅行を計画していた消費者の割合は31.5%であった。今期は国内旅行の需要は高まった一方、海外旅行の需要は2019年の水準を下回った。消費者の5%はモンゴル国外で使用されていた中古車の購入を計画している。不動産を購入する消費者の半数以上(63%)はアパートの購入を計画していると回答した。

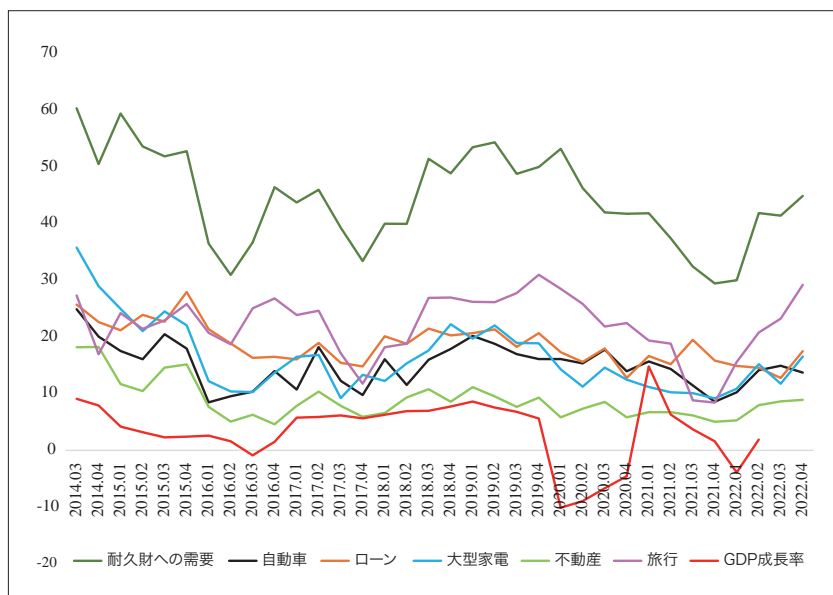
ローン需要は過去2年間と比べて増加した。特に、住宅ローンと年金ローンの必要性が他のローンよりも高まった。ローン申込者の21.7%と21.1%は、それ

図2 消費者信頼感指数(CCI)と経済成長



出所: NSO 1212.mn Statistical information service  
注: 経済成長に関するデータは国家統計局のウェブサイトからの数値

図3 耐久財に対する需要



出所: NSO ウェブサイト、1212.mn

ぞれ年金ローン、住宅ローンの取得を計画していた。

## 2. 価格

CCI分析のもう一つの重要な部分は、消費者価格、為替レート、住宅価格、金利などの価格予想である。実際のインフレ率は16.1%で、2021年の水準から9.5ポイント上昇している。2022年の第2四半期時点で、調査参加者の82%が今後1年以内に価格水準が上昇すると予想している。これは前年と比べて6ポイント

高い。予想インフレ率は11.4%で、前年の予想とほぼ同水準となった。

調査参加者の57.1%は、今後6カ月のUSドルの為替レートは上昇すると予想している。これは前期と比べて7.7ポイント高い。消費者の今後6カ月の予想為替レートは3234 MNT/USDとなっている。2022年第2四半期の米ドルの実際の為替レート(3124 MNT/USD)と比較すると、予想為替レートは約110 MNT高くなっている。前期に為替レートに関する不確実性が高まり、今期も同水準となっている。

住宅価格予想の指標は来年の住宅価格の変化に対する消費者の認識に基づいて計算される。消費者が住宅価格の安定を予想する場合、この指数は1を取る。消費者が住宅価格の上昇を予想する場合、指数は1より大きく、消費者が価格の低下を予想する場合、指数は1より小さくなる。2022年の第2四半期は、回答者の56.3%が住宅価格の上昇を予想し、住宅価格指数は1.82と前期よりもわずかに高かった。

### 3. 結論

2022年の第2四半期は、CCIが前年同期と比べて上昇した。今期は現況指数が大幅に改善された。消費者の求人への高い評価が現況指数を押し上げた。消費者期待指数は僅かに上昇した。ただし、消費者の予想は様々である。

耐久財の需要は今後6か月間安定するであろう。2022年の第2四半期時点で、耐久財の需要は15.6%上昇した。消費者

図4 年間の予想インフレ率



出所: NSO ウェブサイト、1212.mn

全体の29.9%が旅行を計画し、16.6%が主要な家電製品や家具の購入を予定し、8.9%が不動産の購入を予定し、13.7%が自動車の購入を予定している。

消費者は来年の年間インフレ率が11.4%

程度になると予想している。調査参加者の57.1%はモンゴルの通貨トゥグルグの為替レートが下落すると予想している。

[英語原稿を ERINA にて翻訳]

### <参考文献>

Conference Board, 2000 "Consumer Confidence Survey".  
 Richard Gabay, 2004 "Survey results: Uncertainty rises in June", The Conference Board of Canada.  
 International Center for Policy Studies, "Consumer Moods in Ukraine, 2009".  
 Sydney C.Ludvingston "Consumer Confidence and consumer spending", The Journal of Economic Perspectives, Vol.18, No 2, pp.29-50.  
 Jeff Dominitz, Charles F.Manski "How should we measure consumer confidence?" The Journal of Economic Perspectives, Vol.18, No 2, pp.51-66.  
 Friedman, Milton, 1957 "A Theory of the consumption function" Princeton University Press.  
 Mankiw, N.Gregory, 1982 "Hall's consumption hypothesis and durable goods", Journal of Monetary Economics 10, pp.417-425.  
 Romer, Christina D. 1986 "Spurious Volatility in Historical Unemployment Data", Journal of Political Economy 94, pp.1-37.

# Consumer Confidence Index in Mongolia-Q2 2022 (Summary)

**SOYOLMAA Batbekh**

Senior Researcher, National Research and Consulting Center (NRCC)  
ERINA Collaborative Researcher

**ALTANTSETSEG Batchuluun**

CEO, National Research and Consulting Center (NRCC)  
ERINA Collaborative Researcher

**DAVAADORJ Tsenddavaa**

Director, Mongolia-Japan Center for Human Resource Development, National University of Mongolia  
ERINA Collaborative Researcher

This paper reports the results of the Consumer Confidence Index survey conducted in Mongolia in the second quarter of 2022. The Consumer Confidence Index (CCI) measures the degree of optimism that Mongolian consumers feel about the overall state of the economy and their financial situation. People's spending and saving activities depend on how confident they feel about the stability of their incomes and earnings. Consumers will make more purchases if consumer confidence is higher as the economy expands. However, if consumer confidence is lower as the economy contracts, consumers will cut their spending and save more. In addition to the confidence, the survey also measures the households' plan to purchase durables, one of the leading indicators, price expectations (inflation, exchange rate, housing prices and interest rates), and confidence in the national currency.

In the second quarter of 2022, CCI has increased by 13.5 points compared to the same period of the last year and stands at 87. The current situation index has improved significantly. Consumers' appraisal of the business condition and job availability greatly improved. The expectation index has slightly increased. Demand for durable goods increased by 15.6 percent from the previous year.

Furthermore, consumers expect the annual inflation rate to be around 11.4 percent and inflation in the next six months to be around 9.5 percent. The survey has been conducted every quarter since 2014. It covers about 1000 randomly selected individuals per quarter.

Keywords : Prices, Business Fluctuations and Cycles, Labor and Consumers

JEL Classification Codes : E3, N3

# 鉱業と地域格差

国立調査コンサルティングセンター (NRCC) 主任研究員・ERINA 共同研究員 **ソヨルマー・バトベヘ**

国立調査コンサルティングセンター (NRCC) 所長・ERINA 共同研究員 **アルタンツェツェゲ・バトチュルン**

## 要旨

モンゴルは資源豊富な開発途上国である。鉱業部門は2000年代半ばから急拡大し、最大の経済部門となった。鉱業を中心とする急速な経済成長により、一人当たりGDPは過去20年で2倍以上となった。本稿は、各県とウランバートルの経済活動に関するパネルデータを使って、鉱業地域と非鉱業地域の所得、成長、変動、雇用の格差をまとめる。さらに、鉱業部門が地域経済の雇用に与えるマイナスの影響について立証する。

キーワード：地域経済、労働力、雇用、非再生資源

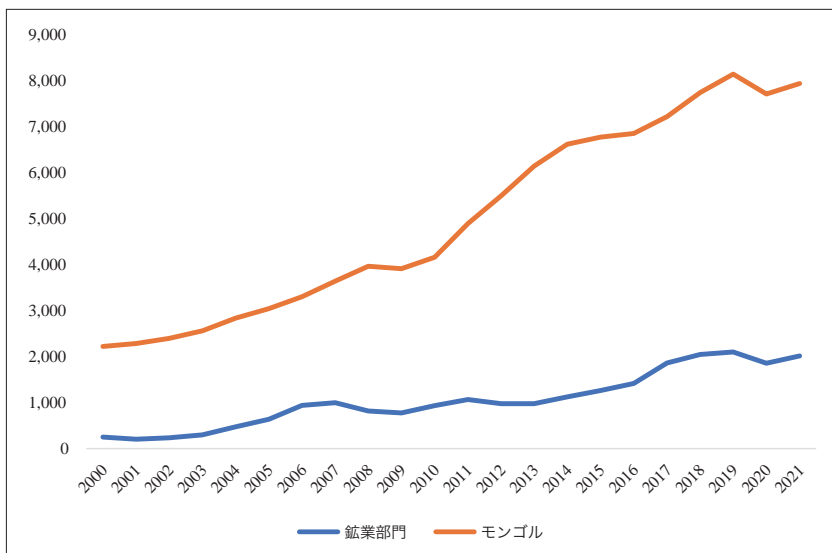
JEL Classification Codes: R1, J21, Q3

## 1. はじめに

地方経済は実質的な所得成長の恩恵を等しく受けているのか、それとも鉱業が牽引する成長は、モンゴルの開発成果において地域格差を増大させているのか。モンゴルは銅、金、石炭、鉄、石油の埋蔵量を誇る資源豊富な開発途上国である。鉱業部門は2000年代半ばに急拡大し、2018年までにはGDPの約25%に相当する最大の経済部門となり、輸出全体の80%を超えるまでとなった(図1)。経済成長は鉱業部門の盛り上がりと共に加速した。鉱業が牽引する急速な経済成長により、一人当たりGDPは過去20年で、実質ベースで2倍以上となった。2018年の一人当たりGDPは4210ドル(実質ドル)であった。しかし、鉱業地域と非鉱業地域における所得と雇用の差は過去20年にわたり大幅に広がった。

モンゴル国内の鉱業開発が地域格差へ与える影響についての文献は限られている。Batdelger & Zagdbazar (2022) は家計調査のデータを使って、鉱業開発が鉱業産出地域の住民世帯の生計にプラスの影響を与えていることを証明している。つまり、この結果は鉱業地域と非鉱業地域の間で所得格差が拡大していることを示唆している。本稿では、2000年から2021年の経済指標に関する調査データを使い、各県<sup>1</sup>とウランバートル

図1 GDP (2005年価格、100万トゥグルグ)



出所: Mongolian Statistical Information Service, 1212.mn

の鉱業部門が、所得、成長、雇用へ与える影響を数値化する。地域格差を研究するにあたり、地域経済に対する鉱業部門の寄与度を使って、資源の豊富な地域と乏しい地域を特定する。鉱業部門は労働市場に大きな影響を与えている((Ross, 2008)、(Aragón et al., 2018)、(Batchuluun, 2021))と考えられるため、主に雇用に焦点を当てることにする。

本稿の残りの部分の構成は以下のとおりである。第2節では関連した文献をレビューする。第3節では推定方法論を示す。第4節ではデータについて説明し、

鉱業部門が際立つ地域の特定方法について説明する。第5節では推定結果について考察する。最後に、第6節で結論をまとめる。

## 2. 文献レビュー

天然資源は、国の生産力において重要な原資としての役割を果たしている。つまり、資源が豊富にあるということは経済発展にとって良いはずである。しかし、資源を豊富に有する国々の多くは、経済発展の面で資源が乏し

<sup>1</sup> [訳注] 県(エイマグ)はモンゴルの行政単位のことである。モンゴルは21のエイマグと首都ウランバートルとに分けられている。

い国々から遅れをとっている (Zhang et al., 2009)。「資源の呪い」と呼ばれるこの現象に関する文献は多くある。これらの文献は主にその国の統計や各国とのデータ比較に焦点を当て、豊富な資源の保有が低・中所得国の開発成果に及ぼす悪影響について重要な証拠を示した ((Mehlum et al., 2006), (Auty, 2007), (Ross, 2015), (Ross, 2018))。資源への依存は制度的な質を低下させ、ある種の腐敗を助長し、武力衝突の引き金となる。

しかし、最近では、鉱業部門の国内での影響に注目が移っている (Cust & Poelhekke, 2015)。国内での影響は少なくとも2つの理由で重要である。第1に、「資源の呪い」の発現に至る重要な伝達メカニズムがそこに存在している可能性がある。第2に、資源の豊かさが経済的・社会的な成果において地域格差を生じさせる可能性がある。鉱業部門が与える地域格差への影響に関する文献は増えている。様々な研究で、鉱業プロジェクトが有意なプラスの福祉効果を地方にもたらすことが証明されている ((Aragón & Rud, 2013), (Lippert, 2014))。さらに、資源採掘は地域間の不平等を深刻化させている (Loayza et al., 2013)。Kotsadam と Tolonen によれば、鉱山の生産開始はその地域の労働市場や経済構造に影響を与え、性差による雇用効果をもたらしている (Kotsadam & Tolonen, 2016)。

鉱業部門がモンゴルの地域格差に与える影響に関する文献は限られている。Batdelger と Zagdbazar は家計社会経済調査のデータと鉱業生産に関連するデータを使い、鉱業が地域世帯の生計に与える影響を研究した (Batdelger & Zagdbazar, 2022)。彼らは鉱業生産が著しい県を鉱業生産県と判定し、処理群に割り当てた。研究によれば、鉱業生産県における実質収入と実質消費は非生産県よりもそれぞれ15.3%と14.7%高かった。

本稿は、各県とUBの経済活動に関するパネルデータを使って、鉱業地域と非鉱業地域の収入・成長・変動・雇用

の格差についてまとめた。さらに、鉱業部門が地域経済における雇用に与える影響について立証する。

### 3. 方法論

差分の差分 (DD) 法を使い、鉱業部門が雇用に与える影響を推定する。2001~2007年を「鉱業ブーム前」の時期、2008~2021年を「鉱業ブーム後」の時期と表す。この手法によって、制御群における雇用の変化を使って共通の時間効果を制御し、鉱業ブーム前後での処理群の雇用の変化を比較して鉱業部門の影響を推定する。処理群は、鉱業部門の発展の影響を受けた県、つまり鉱業地域にある県で構成される。制御群には非鉱業部門に属する県を用いる。これらの県では、地域経済に対する鉱業部門からの寄与がほとんど無いか、もしくは何も無い。DD 推定には、鉱業ブームが無かったとした場合に、処理群と制御群の雇用が共通の時間的推移をたどることが必要である。

雇用への処理効果を推定するため、以下の DD 法を想定する。

$$EMP_{it} = \alpha_i + \gamma M_{it} + \delta I(t \geq s) + \beta M_{it} I(t \geq s) + X_i \theta + e_{it}$$

$i$  は県を示し、 $EMP_{it}$  は時点  $t$  での就業率、 $M_{it}$  は  $t$  年に県が鉱業地域の一部である場合に1に等しいダミー変数、 $I(t \geq s)$  はその時点が鉱業ブーム後である場合に1に等しい指示関数、 $M_{it} I(t \geq s)$  は  $I(t \geq s)$  と  $M_{it}$  間の交互作用項、 $\alpha_i$  は年固定効果、 $X_i$  は県の実質収入、 $\theta$  は県の実質収入と就業率との関係を示すパラメーター、 $\beta$  は鉱業ブームの効果を反映する。処理群と制御群の共通の傾向は年固定効果によって表される。

### 4. データ

本節では、GDP、一人あたりのGDP、雇用に関する国家統計局 (NSO) の年間データについて説明する。GDPと雇用については国家・地域レベルで統計が揃っている。対象期間は2000~2021年とする。

鉱業生産が総生産に占める割合を基に、それぞれの地域を鉱業地域か非鉱業地域かに分類する。2010~2021年の鉱業部門の平均的な割合は21.8%であった。地域の鉱業部門の割合が国の平均値を上回れば鉱業地域として、平均値を下回れば非鉱業地域として分類する。この分類によって、21の地域のうち、6地域が鉱業地域に分類され、UBを含むその他の地域は非鉱業地域に分類された。

図4.1で示されているとおり、鉱業部門が占める割合はオルホン地域が最も高い一方、アルハンガイ地域にはほとんど無い (0.04%)。閾値を基準とすると、ウランバートルは国の平均値である21.8%をわずかに下回るため、非鉱業地域に該当する。

図4.2では、2005年以降の鉱業地域と非鉱業地域とでは一人当たり実質GDPに明らかに差があることが示されている。2006年の鉱業地域の一人当たりGDP平均は非鉱業地域の一人当たりGDP平均よりも126%高くなった。それ以降もこの差は変化しているものの、30%以上を保っている。この格差は鉱業地域の一人当たりGDPの高成長率によってもたらされている。

鉱業地域の一人当たりGDPは非鉱業地域よりも急速に増加している。しかし、鉱業地域の成長率は非鉱業地域と比べて変動が大きい。表4.1は工業地域と非鉱業地域の一人当たりGDPの年間成長率と標準偏差を示している。鉱業地域の一人当たりGDPの成長率では、変動率が高いことが分かる。

鉱業地域と非鉱業地域の格差には、その他に就業率がある。前述したとおり、所得水準は非鉱業地域よりも鉱業地域の方が高い。しかし、2008年以降は鉱業地域の就業率の低下が非鉱業地域よりも速いペースで進んでいることが分かる (図4.3)。鉱業地域の就業率が2000~2008年は66.5%であったのに対して、2009~2021年には56.6%であった。

就業率の低下に加え、鉱業地域では就業率の男女格差が拡大する傾向にある。モンゴルでは過去10年にわたり就業率の男女格差が拡大している。しか

しながら、鉱業地域における格差は非鉱業地域よりもさらに大きく、変動が激しい。2007年以降、鉱業地域では男性の就業率が女性よりも高い状態となっている(図4.4)。この地域では男女格差も変動が続いている。

2007年以前の(非)鉱業地域における就業率の男女格差は、最小、最大でそれぞれ(6.4%)5.8%、(10%)8.8%であった。2007年以降は、鉱業が影響(しない)する地域の格差は最小で(6.8%)8.2%、最大で(18.1%)24.6%であった。

鉱業地域と非鉱業地域の収入・雇用統計には格差が顕著に表れている。鉱業部門の拡大は所得水準を引き上げているものの、就業率を低下させている。これは鉱業部門の資本集約的な特性が原因となっている可能性がある。鉱業部門が拡大すると、今なおモンゴル最大の就業先である農業部門の占める割合は減る可能性がある。2009~2021年に鉱業部門の就業先が占める割合は3.5%から5%へと増加した。反対に、同時期の農業部門における割合は34.7%から25.9%へと減少した(NSO)。

## 5. 分析

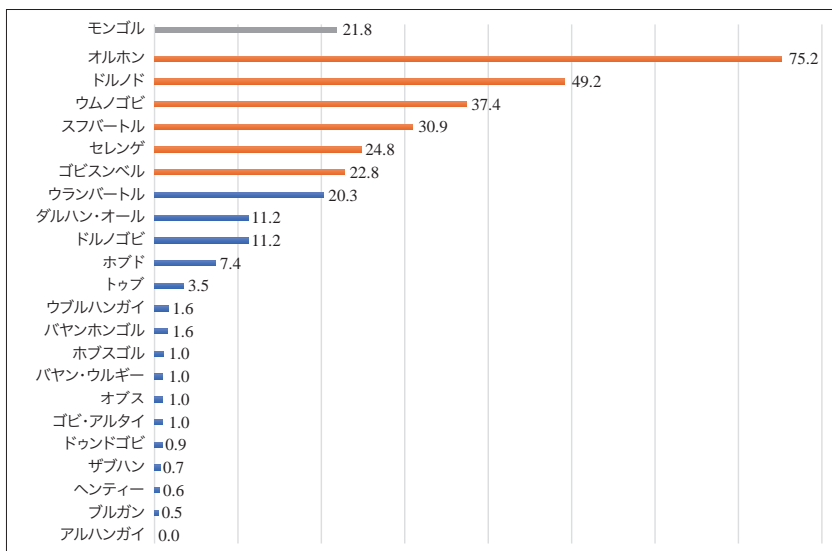
前節で述べたデータから、その地域が鉱業地域か非鉱業地域かによって就業率に格差が生じている可能性があることがわかる。そこで、就業率について差分の差分分析を行った。この分析では、2008年前後の年別に鉱業・非鉱業地域の就業率を比較する。

表5.1はその結果を表したものである。この結果から、2008年以降、鉱業地域の就業率が非鉱業地域と比べて5.2%ポイント低下したことが分かる。地域の基礎条件を制御変数に含めると、推定係数はそのまま、精度が上がる。これらの制御変数は、鉄道ダミー、車検合格車両数、人口、都市人口の割合、一人当たりGDP、携帯給水器使用世帯数である。

## 6. 結論

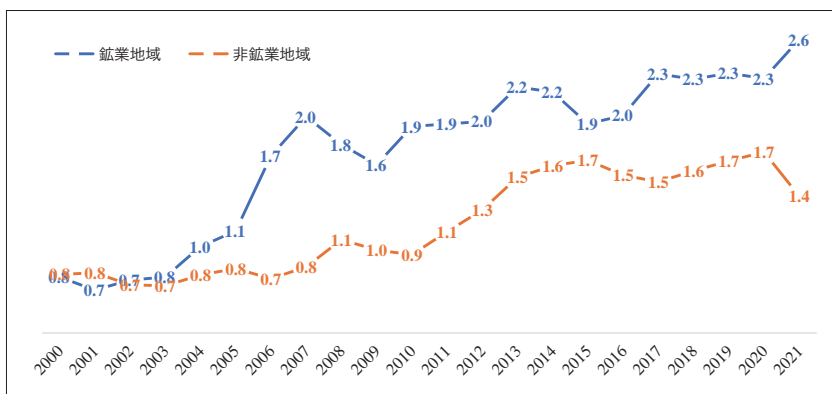
生産に占める鉱業部門の割合を基に、21の地域と首都ウランバートルを鉱業

図4.1 鉱業部門の割合(2010~2021年の平均、%)



出所: Mongolian Statistical Information Service, 1212.mn

図4.2 鉱業地域と非鉱業地域の一人当たりGDP平均(100万トゥグルグ)

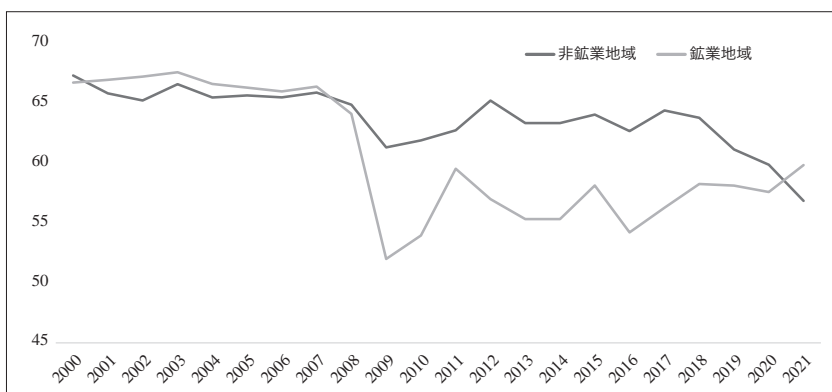


出所: Mongolian Statistical Information Service, 1212.mn

表4.1 鉱業地域と非鉱業地域別の一人当たりGDP年間成長率と標準偏差

	2001-2005		2006-2021	
	年間成長率	標準偏差	年間成長率	標準偏差
モンゴル	5.3	2.6	4.5	5.3
鉱業地域	11.6	21.7	5.3	16.3
非鉱業地域	4.5	2.0	4.6	6.7

図4.3 鉱業地域と非鉱業地域の就業率



出所: Mongolian Statistical Information Service, 1212.mn



地域と非鉱業地域とに分類した。この分類によって、6地域が鉱業地域に該当した。残りの15地域とウランバートルは非鉱業地域に分類された。

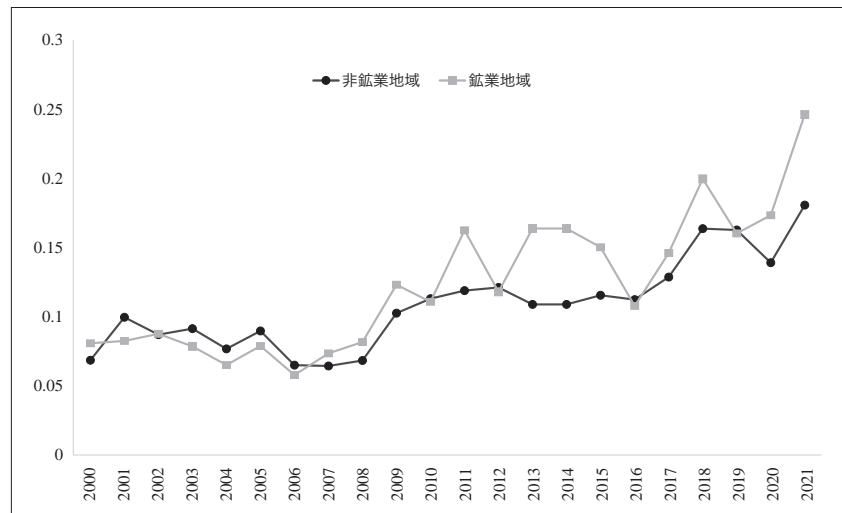
鉱業地域と非鉱業地域とで、一人当たりGDPと就業率を比較した。2005年以降は鉱業地域と非鉱業地域の間に明らかに格差があることが分かった。所得水準は鉱業地域の方が高いものの、就業率は低下し、2007年以降は就業率の男女格差が拡大した。

資本集約的な鉱業部門の拡大はその地域の就業率にマイナスの影響を及ぼしている。差分の差分分析では、2008年以降、鉱業地域の就業率が5.2%ポイント低下したことが分かった。

鉱業部門が鉱業地域のそのほかの社会経済変数に与える影響を探索するためには、さらなる分析が必要である。

[英語原稿を ERINA にて翻訳]

図4.4 鉱業地域と非鉱業地域の就業率の男女格差



出所: Mongolian Statistical Information Service, 1212.mn

表5.1 推定結果

変数	就業率への影響	
鉱業ダミーと時間ダミーの交互作用	-5.204**	-5.204***
	(0.150)	(2.226)
制御変数	No	Yes

## <参考文献>

- Aragón, F. M., Rud, J. P., & Toews, G. (2018). Resource shocks, employment, and gender: Evidence from the collapse of the UK coal industry. *Labour Economics*, 52, 54–67.
- Auty, R. M. (2007). Natural resources, capital accumulation and the resource curse. *Ecological Economics*, 61(4), 627–634.
- Batchuluun, A. (2021). The gender wage gap in Mongolia: Sectoral segregation as a driving factor. *Review of Development Economics*, 25(3), 1437–1465.
- Batdelger, T., & Zagdbazar, M. (2022). Does mining improve rural livelihood?: Evidence from Mongolia. *Resources Policy*, 78, 102794.
- Cust, J., & Poelhekke, S. (2015). The local economic impacts of natural resource extraction. *Annual Review of Resource Economics*, 7(1), 251–268.
- Kotsadam, A., & Tolonen, A. (2016). African mining, gender, and local employment. *World Development*, 83, 325–339.
- Lippert, A. (2014). Spill-overs of a resource boom: Evidence from Zambian copper mines.
- Loayza, N., Mier y Teran, A., & Rigolini, J. (2013). Poverty, inequality, and the local natural resource curse. *World Bank Policy Research Working Paper*, 6366.
- Mehlum, H., Moene, K., & Torvik, R. (2006). Institutions and the resource curse. *The Economic Journal*, 116(508), 1–20.
- Ross, M. L. (2008). Oil, Islam, and women. *American Political Science Review*, 102(1), 107–123.
- Ross, M. L. (2015). What have we learned about the resource curse? *Annual Review of Political Science*, 18, 239–259.
- Ross, M. L. (2018). The politics of the resource curse. *The Oxford Handbook of the Politics of Development*, 200.
- Zhang, X., Xing, L., Fan, S., & Luo, X. (2009). Resource abundance and regional development in China. In *Regional Inequality in China* (pp. 113–134). Routledge.

## ***Mining and Regional Disparity (Summary)***

### **SOYOLMAA Batbekh**

*Senior Researcher, National Research and Consulting Center (NRCC)*

*ERINA Collaborative Researcher*

### **ALTANTSETSEG Batchuluun**

*CEO, National Research and Consulting Center (NRCC)*

*ERINA Collaborative Researcher*

Mongolia is a resource-rich developing country. From the mid-2000s, the mining sector rapidly expanded and became the largest economic sector. Due to mining-driven rapid economic growth, GDP per capita has more than doubled over the past two decades. Using panel data on the economic activities of aimags and UB, we document the income, growth, fluctuation, and employment disparity between mining and non-mining regions. Moreover, we provide evidence of the mining sector's negative impact on the employment of local economies.

Keywords : Regional economics, Labor force, Employment, Non-renewable resources

JEL Classification Codes : R1, J21, Q3

# モンゴルにおける国家公務員の「能力主義」に関する考察

モンゴル公務員評議会常任委員  
アマルトゥグス・ツェンドダワー

## 要旨

1995年に国会は国家公務員法を採択した。これは、現代の公的労働を制度化する初めての法的枠組みだ。これまで、モンゴルの国家公務員制度は成果を上げた一方、改善の上で問題に直面している。しかし、他国や世界の経験から学ぶことによってその意味は徐々に拡大されているとはいえ、「メリット」（能力（成績）主義）の理念は不変だ。

新たなメリット・システムの整備は共通理解の調整、しかるべき規範の制定、包括的指針の構築と同時に、透明で競争志向の、しっかりと機能する人材選抜システムに関する意識改革も必要とする。国家公務員の数は徐々に増えているが、モンゴルの国家公務員制度は、機能性、有効性の向上、公務労働部門の段階的改革による全体的コストカットに努めている。特に給与・賞与の改革が、賃金の支払いと階級付けシステムや賞与政策にかかわる問題を処理するために必要となった。CSC（公務員評議会）は、現代デジタル化社会における公共性と公的労働の新たな価値観を形成し、優れた成果を促進し専門家の生産性を向上させるための、特にリスク軽減意識の形成のための新たなスキルアップ方策を実施し、行政機関の新たな文化と倫理観の形成に注力している。それは特に、リスク軽減文化の形成、すべての公的労働分野での透明性と説明責任の完全な維持である。しかし、期待されている国家公務員制度改革の成果をモンゴルで達成するためには、持続的で専門性の高い指導とならび、首尾一貫した政策が必要だ。

キーワード：メリット、国家公務員制度改革、国家公務員の地位、モンゴルの国家公務員

JEL Classification Codes: H10

略語：LCS—国家公務員法、CSC—公務員評議会

## 1. はじめに

モンゴルの国家公務員制度は、国家の民主主義への移行と1992年の新憲法採択のあと、段階的に発展した。国家公務員制度のシステムの法的基盤として、国会は1995年に国家公務員法を採択した。この法的基盤はこれまでに3回改正され、然るべき修正がいくつか施された。

メリット・システム（資格任用制）を研究するために、複数の国々の例を取り上げた。1883年のアメリカでは「ペンドルトン法」が採択された。当時、多くの連邦行政機関が初めて、政治的縁故主義に沿った選抜ではなく、競争試験を導入した。同様の方法で、日本の公的労働に

おけるメリット・システムは、職員採用時の競争試験による公正性の確保を目的としていた<sup>1</sup>。カナダの公務員制度についても同様の見方ができる<sup>2</sup>。カナダでは職員の採用時、職務遂行のための主要な技能熟練審査を含む能力主義の原則を採用しなければならない。他国の経験を分析すると、我々は国家公務員制度にメリット・システムを導入することのいくつかのメリットと問題がわかる。我々がメリット・システムを採用し、そこから国家公務員制度改革の主要目標を導き出すとすれば、主な関心事の一つは採用である。採用試験の結果、人々、あるいは国家公務員が公的役職に任命される。このように、能力主義の原則はより競争的で公正な採用制度に作用し、教育水準、職業資格、

仕事ぶりなどの主要基準を含有している。採用試験での倫理、行動に関する問題がより重視される場合もあるだろう。

キャリア型は、国家公務員のキャリアの早い段階で競争選抜を行うことを特徴とし、この際、より高位の役職は公務員にのみ開かれている。逆に、職能型システムでは、候補者は直接、具体的な職務に希望を提出し、職務の多くは内外の希望者に対して開かれている<sup>3</sup>（OECD、2009）。両システムとも、様々な試験内容の開かれた公正な競争採用手順を用いて、コアコンピテンシー・モジュールや行動テストなど標準的基本的枠組みとして制定された、一定のスキルやまとまった得意分野を評価するものだ。

さらに、コルタサル・フェンサリダと

<sup>1</sup> <https://www.jinji.go.jp/en/recomme/annual2014/pdf/14.pdf> p.2

<sup>2</sup> <https://www.canada.ca/en/public-service-commission/services/publications/publications/merit-non-partisanship-under-public-service-employment-act-2003.html#toc2>

<sup>3</sup> GOVERNMENT AT A GLANCE. (OECD)(2009) <http://www.oecd.org/dataoecd/59/28/44251675.pdf>

ラ・フェンテ(2016<sup>4</sup>)の意見では、必要なスキルを持った人材の選抜と区分は生産性を向上させる。これは、政策とサービスを改善し、社会をより幸せで健全に繁栄させることにもつながる。公務員の誠実性に関するOECDの提言では、賛同者が成績に基づき、職業意識が高く、公務員的価値観と「善き統治」を重んじる公務員制度を推進することを提唱している。特に:

1. 公務員の職業意識を維持するために一貫して成績や透明性などの基本原則を採用する人材管理は、えこひいきや縁故主義を防止し不当な政治的介入を防ぎ、職権乱用と不正行為のリスクを軽減する。
2. 公正で開かれた採用、選抜、客観的基準と正式な手続きに基づいた昇進の確保、さらにアカウントビリティと公共心を維持する評価システム(OECD、2020年)<sup>5</sup>

上記の事例及び提言と組み合わせ、本稿ではさらに、モンゴルの公務員制度における成績重視の原則の現状が分析されている。第2章では、法律や規則が「メリット・システム」をどのように定義しているかを論じ、その後、公務員の現状と統計について説明する。第4章では国家公務員制度における問題と挑戦が検討されている。最後に、そこで競争力があり公正で開かれた公務員システム構築のための能力主義の今後の展開と応用問題が論じられている。

## 2. モンゴル国家公務員法の中で定められた「メリット・システム」の定義とその主な特徴

### 2.1 「メリット・システム」の定義と主な特徴

国家公務員法に定められているように、「国家公務員の使命は、基本的な国家利益の遵守および社会と国家への最大限の忠誠を伴う奉仕と同時に、モンゴル国憲法及びその他の法律の順守を

確保することである」(国家公務員法(CSL)規定第5.1、2017年)そして、モンゴルの公務員制度の主な原則は、民主主義、正義、自由、平等、国民統合、法の支配である。さらに、国民への奉仕、職業意識と持続可能性の維持、政党や結社の活動を控えること(政治任用職を除く)、モンゴル国民に公的機関で働く機会を平等に与えること、能力のみにもとづく総合職の採用/任用、透明性の確保、利害対立の回避、階層的優位性の保持を守ること(CSL規定第7.1、2017年)である。

2017年に国会を通過、2019年1月1日発効の国家公務員法によれば、「能力」は次のように定義される。

「能力」は、選抜、国家公務員の任命及び解任、国家公務員の勤務評定、昇進、賞与の決定根拠として用いられうる知識、学歴、専門性、経験、実績/業績など技能熟練度を意味する(CSL第3.1.3条、2017年)。さらに、ここには国家公務員の主要ポストに対する総合的及び専門的な要件が、階級に応じて定められている(詳しくは図1参照)。

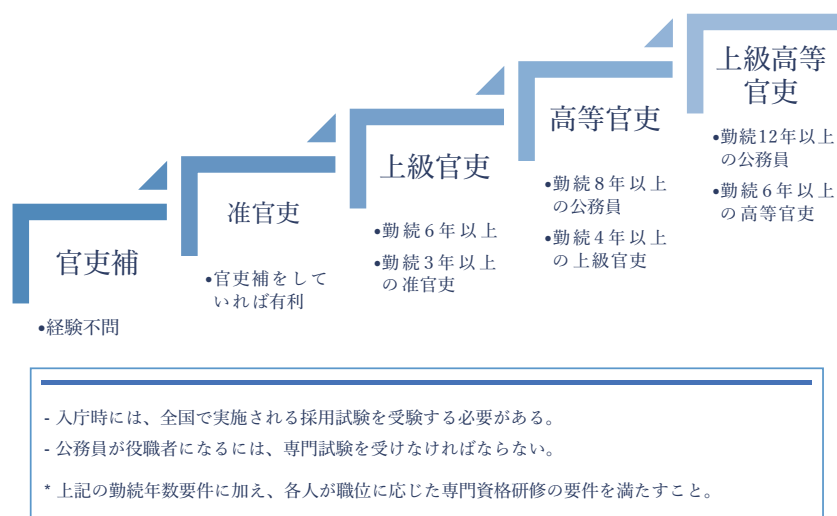
人材不足等の理由から、2022年7月に総合職員になるための勤続年数を短縮するため、国会は国家公務員の主要ポストに対する一部の要件を修正した。そ

して、優秀な業績や資格レベル、倫理観、知識、専門性、経験に達した国家公務員は、雇用期間の特定要件の50%を満たせば昇進することができる(LCS第26.3条、2017年)。

現行のモンゴルの公務員採用制度では、職能制ではなくキャリア制が適用されている。初級階級では、官吏補や准官吏は一般的な要件が求められている。より上級のポストは、法律に定められている特定の要件を満たす職員にのみ、開かれている。

国家公務員の採用プロセスではまず、任命責任のある権力機関(役人)が、ポストに空席ができしだい21日以内に、CSCあるいは然るべき小委員会に採用申請を行い、求人を公示しなければならない。各空席について、公務員の職位などを特定する職務記述書が承認されなければならない。同様のプロセスが中央および地方の国家公務員の主要ポストで用いられているが、試験内容は期待値と水準の間の大幅なずれを想定している。この試験は提出書類のチェック(受験者が要件を満たしているかどうか)、筆記試験、面接で構成されている。この試験はチームワーク、リーダーの資質、マネジメント、分析能力、トラブル処理能力、法律の知識、モンゴル語

図1 公務員法に記載されている全階級の一般行政部門公務員の具体的な要件



出所: 筆者作成

<sup>4</sup> Merit based selection of Public Managers: Better Public sector Performance?: An exploratory Study, Inter-American Development Bank, <http://dx.doi.org/10.18235/0000323>

<sup>5</sup> OECD Public Integrity Handbook, OECD Publishing, Paris, <https://doi.org/10.1787/ac8ed8e8-en>

の会話力、文章力を評価する。

## 2.2 公務員制度の制度設定

国家公務員法によれば、国家公務員制度は国家公務員制度の中央機関である公務員評議会(CSC)とその下部組織によって制度化されている。CSCは1995年の設立以来、国家公務員法と関連法令を執行する権限を持っている。

国家公務員制度は第1次公務員法の施行当初に構築された基礎をベースに策定されたが、CSCの基本的役割は少し変化した。制度は大幅に変更されなかったものの、CSCの基本的役割と責任は拡大された。基本的役割と義務の一つは、モンゴルの公的機関の主要ポストのスタッフを補充することによって、競争ベースの公正な職員採用システムを制定し組織化することである。CSCは上級ポスト専用の試験を組織し、分科会とそれらの関連機関向けに専門性の高い指導と助言を提供している。この過程を通じてCSCはメリット・システムの実行を担保し、状況に応じて専門的な指導を行い、研修や能力開発活動を奨励するとともに、公的行政機関の人事監査も行う。さらにCSCは評定機能のほか、国会の2019年第19号決議で承認された苦情処理など、調査機能も担っている。

法律が定めるように、CSCは独立機関であり、モンゴル国会が6年の任期で任命する常任メンバー5名で構成されている。そのうち3名はそれぞれ大統領、国会、政府によって指名される。残り2名は、要件を満たす国家公務員のなかから、公開採用試験の結果、任命される。

さらに、国会はCSC事務局のルールに関する決議を採択。職員数の上限を設けている。現行の組織図は、事務局が4部局とローカル評議会、分科会で構成されていることを示している(図2)。

CSCは、分科会の規則と責任を管理する分科会条例を2019年に公布した。

分科会は各省庁および一部の公的機関、県レベルの地方行政府に設置されている。分科会は各省事務次官、長官、知事室長に主導されている。分科会は委員長と書記、委員7~9名で構成される。分科会書記は常勤、他のメンバーは非常勤である。2022年現在、49の分科会がある。

## 3. モンゴルにおける公務員の現状

以下のすべての統計は人材管理情報システムデータベースからとっている。国家公務員法と関連条項にしたがい、公務員評議会は人材管理情報システム

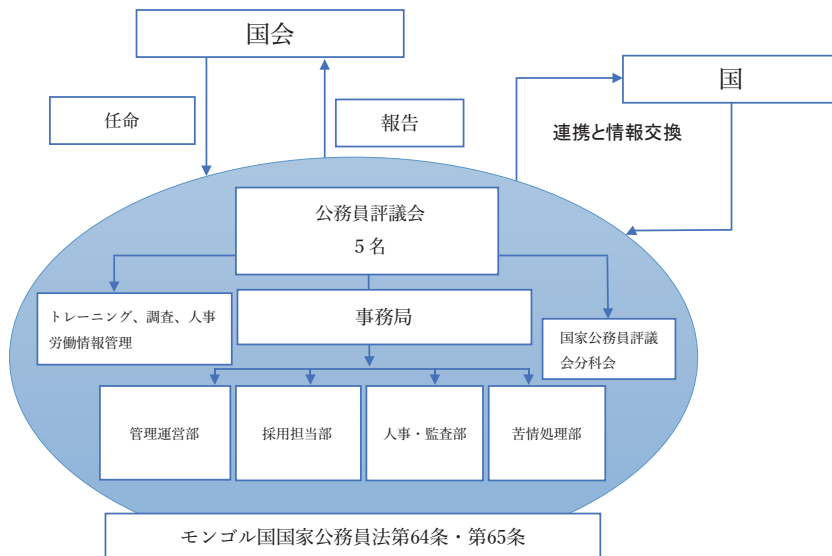
を構築し、展開している。その目的は、包括的データベース、国家公務員向けの登録・統計システムの構築である。このシステムの主な目的は、CSCで使用される公務員登録に限られていた。2007年からは、当初の人材管理情報システムの構想が修正され、2009年にシステムの開発が始まった。しかし、それは、各公的機関が日々の人材管理業務で使うような、より包括的な計画を策定するために、変更された。このように、このシステムは国家共通アプローチを採用しようとしているが、開発の初期段階にある。そこでは共通プラットフォームも開発中で、「国民」―「政府」―「政府」―「経済界」―「政府」―「自治体」、というコンセプトのモジュールで構成され、最新のテクノロジーの優位性を最大限に活用するものになるだろう。

現行の計画では、人事プロセスの各段階とリンクする13の構成要素を含んでいる。すなわち、人材管理情報システム(HRMIS)は、募集、選抜、昇進、異動、教育、昇給、解雇、退職、苦情処理など人事の全段階をカバーする。5つ目の構成要素の開発段階にあるにもかかわらず、このシステムは稼働を始め、すべての基礎データを収集し、ソースを特定し、それらをE-Mongoliaのプラットフォームと、共通試験及び個別試験のデータで構成される人事選抜システムとを一体化した。よって、モンゴルのHRMISは、評価と自己評価、国家公務員制度の透明性の確保の手段として、活用される。

HRMISのデータに基づいた2021年の報告書<sup>6</sup>によれば、国家公務員の総数は20万8,864人(総人口の6.3%)になった。法律によれば、国家公務員は「政治任用職」「総合職」「専門職」「一般職」の4つに分類される。2021年末現在の国家公務員のカテゴリーの構成はそれぞれ全体の2%、10%、22%、65.9%となっている。公務員の62.7%は女性職員だった。

直近の過去10年間に国家公務員の総数の平均増加率は1.5%だったが、カテゴリー間で異なっていた。増加の大部分

図2 モンゴルの現在の公務員制度



出所：筆者作成

<sup>6</sup> Civil Service Council Annual report for 2021. (2022) Statistical reports.

は一般職が占めた。2022年と2012年と比較すると、国家公務員のカテゴリー構成はかなり変化した。各カテゴリーの割合は次のように変化した。政治任用職0.2%増、専門職3.5%増、一般職3.7%増。

一般行政部門の職員数は徐々に拡大した。そのうち上級高等官吏は1.76倍に、高等官吏は1.03倍、上級官吏1.7倍、准官吏1.4倍だった。ただし、官吏補は2021年には2012年比で11.5%減少した。

しかし、より多くのスキルや学歴、経験、専門知識が要求される一方、給与報酬の引上げ政策は包括的ではなく、法で定められた一定要件での引上げとあまり連動していない。

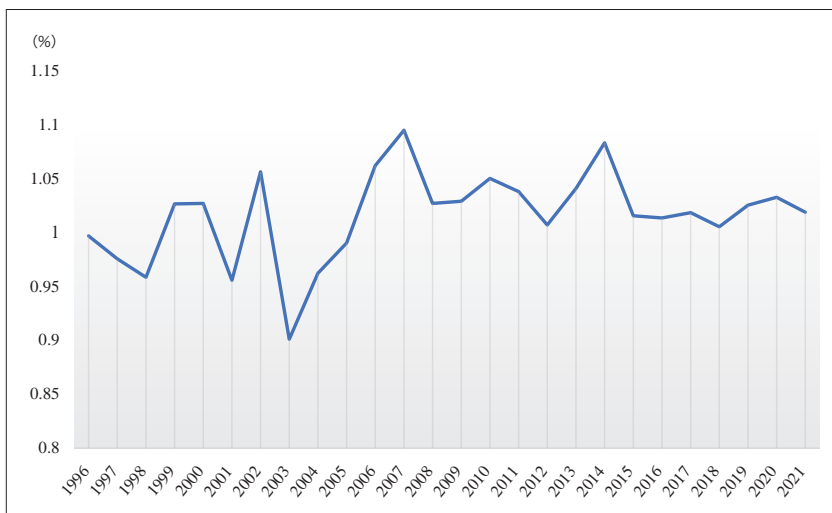
また、HRMISは、財務省が開発、適用している給与・報酬データベースと連動している。連動のデータベースから、給与・報酬増額制度の分析を行うことができる。

例えば、現在直面している主な問題の一つが、第1スケールと第5スケールの間の差と、官吏補と上級高等官吏の間の差とが異なることである。国家公務員法によれば、国家公務員の給与は基本給、手当、報酬、賞与からなっている。図5が示す通り、スケールの違いによる差はかなり小さい。一般行政部門の職位は、15段階の等級付けがなされており、当然のことだが職位にあわせて給与も上昇する。職位による差は、最も高いスケール(第5スケール)において最小である。他方、最高の給与(15級3号)は最低の給与(1級1号)の3.4倍、2番目に高い職位(14級3号)は2.4倍である。この給与体系は高度専門人材にとって魅力的ではなく、パフォーマンスを高めようという気持ちにならない(世界銀行、2020年)。

#### 4. 「メリット・システム」に基づく公務員制度を発展させるための課題と挑戦

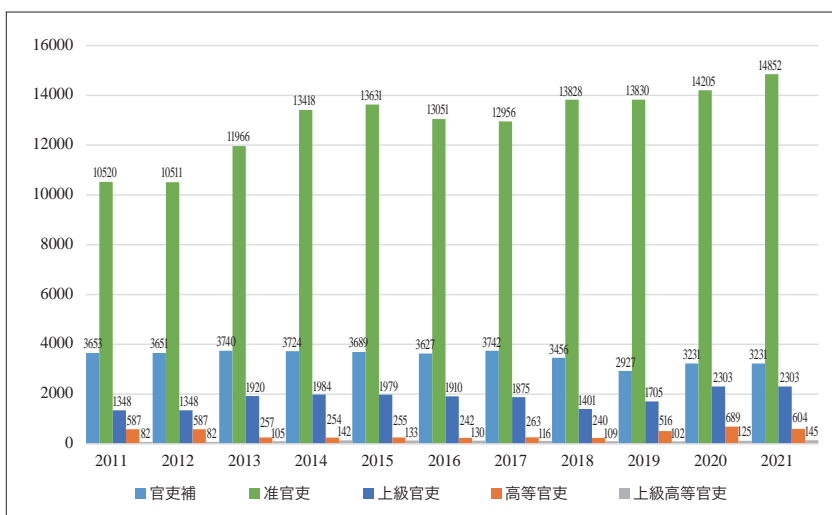
「メリット」は高度なスキルや専門知識、学歴と職歴、経験、基準に沿った業績を意味するが、それによる給与面の違いは若干の増額にとどまる。したがって昇進した人がモチベーションを上げるとは言いがたい。

図3 国家公務員の各年増加率



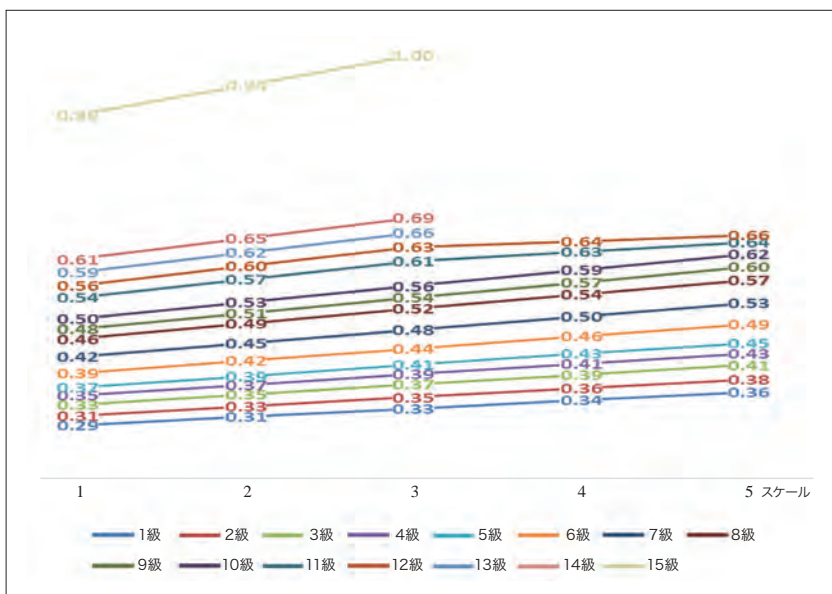
出所: 国家統計局データに基づき筆者作成

図4 一般行政部門の公務員の数(年別・等級別)



出所: CSC2021年次報告書に基づき筆者作成

図5 一般行政部門公務員の職位間の給与水準の差



出所: 給与水準の設定に関する政府決議に基づき筆者作成

一部のケースは、国家公務員(特に地方)の低賃金に注目する必要性を示している。これは、公務員全体のえこひいきや恩顧主義に帰結しうる。多くの調査研究や諸外国の経験は、えこひいきや恩顧主義は様々な形態の汚職を招いている。

しかし、CSCは「メリット・システム」を堅持し、LCSの要件を満たす解任条項を作り、国家公務員の全階級での専門試験の組織のための提言や支援を行っている。CSCは関係機関、国家公務員、管理者向けに、採用に係る書類や証明書の偽造、提出などの国家公務員の採用や任命に係るあらゆる違法行為が厳しく禁じられている旨の情報提供を続けている。もし政治任用者がこのLCS第31.2と第32.2に違反すれば、それはこの人物の解雇の理由になりうる。つまり、LCSは違法な任命があった場合の解雇を伴う最大限の責任を規定している。

モンゴルの「メリット・システム」の実用では法の適用は数多くの問題に直面した。例として新型コロナが挙げられる。多くの場合、上級ポストへの任命の際、「新型コロナ予防・撲滅・社会経済影響緩和法」が、LCS要件を適用しないための法的根拠として利用されたのだ。

モンゴルのLCSの施行が満足いくものかどうか判断するのは時期尚早だ。この法律が採択された直後に新型コロナウイルスの世界的な流行が起り、政府は、新法、新規則、非常事態対策など緊急事態に対応するための数多くの方策を講じた。パンデミックの悪影響への対策に、数回にわたりロックダウン措置も発令したほどだ。

パンデミックが最高潮にあった時、LCSの施行は減速し、非常事態対策措置の下で導入された新制度との連携が困難となり、並行する規制メカニズムの使用に混乱をきたすことになった。モンゴルの国家公務員制度は、汚職や利害の対立の撲滅、国家公務員の非倫理的な行為の防止のために能力評価システムの整備を続け、その結果、透明かつ公正、競争力のある採用・業績管理システムを整備していく必要がある。

モンゴル国会は2022年7月5日、LCS改正法案を可決した。改正法案は対象

となる職位の具体的な要件を緩和した。それは、早期に若い人材を幹部にするチャンスの拡大と解釈できる。しかし、それは、公務員として、採用されて短期で辞める人々よりも長く勤務を続ける職員にとっては、一定の影響をはらんでいる。その一方、この改正は職位制とのバランスの取れた新しいキャリア制へのアプローチの確立につながる。ただし、2020年の世界銀行の報告書は、モンゴルにはキャリア、職位に基づく等級制度が導入されていないと結論付けている(世界銀行、2020年)。

同時に「メリット・システム」は、昇給するために良く働き経験、専門知識を積むための機会をより多く公務員に与えている一方、能力と専門知識の基準が明確に定義されていないことが、あいまいさと不適切な行動、さらに違法な依頼あるいは任命と結びついている。その結果、信頼に値する責任感の強い優秀な数多くの職員が通常、辞めていくか、あるいは革新的で生産性の高い職員になりたがらない。つまり、LCS施行の際の勤務管理システムと評価・モニタリング・監査メカニズムは、国家公務員と公的機関の責任感の向上に関して、今後の改善を必要とする。

したがって、同時に、新しい「メリット・システム」を導入するには、共通理解の調整と適切な基準の制定、包括的リーダーシップの発揮、透明で競争志向の高機能な採用制度に関する意識の向上に、より一層しっかり取り組むことが必要となっている。

例えば、コア・コンピテンシー・フレームワークの構築は、採用や業績評価、スキルやコンピテンシーのギャップの測定による研修や能力開発の必要性を明確にする手段として利用されうる。全ての手段は、全ての利害関係者と公務員が相互に受け入れ、同意するものでなければならない。

さらに、CSCは公的機関における新しい文化と倫理感の形成、デジタル化が進む現代社会で新しい公務員の価値を創造し、専門家の優れた業績と高い生産性を促進するための研修や意識改革活動を増やし、特に公務のあらゆる分野

で、リスク軽減の意識を構築し、透明性と説明意識を維持することに努めている。しかし、そのためには、モンゴルの公務員制度改革の期待される成果を得るまでの、一貫した政策と専門的な指導が必要である。

世界銀行の報告書は、監督機関及び執行機関の両方を併せ持つCSCのハイブリッドな役割は利害の対立につながることを指摘し、国家公務員の全階級の管理と監督のための制度構造の見直しを求めている(世界銀行、2020年)。したがって、効率的で公正な採用システムを構築するためには、然るべき方法で、公務員制度の人材管理における政府とCSCの役割および責任の明確な分担が定められ、実行されなければならない。

また国家公務員が徐々に世代交代しているなか、「メリット・システム」の導入で適切な政策手段が用いられているかどうかという、もう一つの問題も指摘される。新しいアプローチと傾向において若い世代の価値観と認識が必要である。1990年代半ば、あるいは1990年代末、2000年代初めにおいてさえ、国家公務員ということで現在よりも人々は評価され、尊敬されプロ意識をもっていた。現在では多くの人が、特に、高級公務員の任命の際、公務員のプロ意識を疑問視している。

このように、「メリット・システム」はモンゴルの国家公務員制度の中核概念である。よって、国家公務員制度における人材管理の法的枠組みや日々のプロセスを継続的に改善するなど、あらゆる分野でなんらかの強化を必要とする。よって、国民の信頼を得るためには、説明責任を果たし透明で公正な仕組みを構築することが必要であり、デジタル化はその手段の一つとなりうる。

主要な手段の一つが、国家公務員人材管理情報システムであるとされている。CSCはまとまったデータ管理システムを構築し、すべての行政とサービスにおいて国家機関・組織全体をカバーする総合人材管理システムとして展開されるだろう。

選抜方法は、主観を避けるためにAIなど新テクノロジーを使用していくこと

になるだろう。一般教養試験と専門試験では、内容と選抜方法もまた、感情知能や倫理思想審査など様々な方法で導入されるべきだ。そのため、面接試験においてコアコンピテンシーに基づく新ルールの導入に踏み込むことも必要だ。

さらに、公共サービスの規模に注目しなければならない。なぜなら、現状では一般行政部門と現業部門の違いが明確ではないからだ。業績管理システムを開発するためには、勤務評定システムは、業績評価のためのより一層明確な指標と基準を必要とする。したがって、一般行政部門と現業部門の区別は不可欠である。

最後になったが、モンゴルの国家公務員制度改革を強化するためには、OECDの提言から学び、「良い統治」への取組みと、公正で競争力のある選抜・任命基準を確保することが重要である。

よって、ここで、より効率的で有効で透明性の高いモンゴルの国家公務員制度につながる一体的ガバナンスへのアプローチを適用することを提案したい。このアプローチのポイントは以下の通りである。

- 「メリット・システム」は、公的部門のあらゆる分野の汚職撲滅に貢献するであろう。実力主義の確立は、より高度な公務員人材の確保に役立つ。
- 「メリット・システム」を確保し人材管理システムを維持するための効率的な手段として CSC は、包括的デジタルシステムの構築のための一連のモジュールの完成をよりいっそう注視している。したがって、人材管理と実力主義の適用に対するリスクや違法行為の検出システムを使用し、データ分

析と適切な研修が行われるだろう。

- 倫理的、文化的側面のみならず、国家公務員の生活水準を確保し活動効率を上げるための経済力の拡大の面からも、意欲を上げる動機付けを分析しなければならない。

リモートワークやパートタイムなど様々な雇用形態が、モンゴルの国家公務員制度における競争力や新機軸に貢献するだろう。そして、逆に、国家公務員採用の第一の判断基準を長期雇用とすれば、若い世代は依然として、昇進や昇給、賞与獲得で問題にぶつかるといえる。

## 5. 結論

このレポートでのこれまでの議論に基づくと、モンゴルの国家公務員制度の能力主義は発展の初期段階にある。

したがって、モンゴルの国家公務員制度改革の焦点は「メリット・システム」だ。そのためには、国家公務員と公的労働の概念の再構築、人材管理、コンピテンシー・フレームワーク、競争試験制度、業務管理などの分野での一定の進歩が要求される。CSC は、新しい文化や倫理観、新たな人材管理の構築を主導し、優れた結果を促進するため研修や意識向上のための事業を増やすべきだ。

国家公務員の勤続年数は経験と連動する能力基準の一つである。よって、全ての能力基準が有効に利用されていることが確認できるように、適切な人材の採用、業績評価、研修と自己開発事業の企画と実行に活用できるコンピテンシー・フレームワークを構築しなければ

ならない。

国民の納得と信頼を確立するためには、説明責任を果たし透明性が高く公正なメカニズムの構築の可能性を検討しなければならない。その手段の一つになりうるのがデジタル化だ。このように、HRMIS の開発を実現するには、相当な資金力とリーダーシップが必要である。

HRMIS の導入によって、技術上の負担が軽減されるだろう。例えば、苦情処理と人事監査の際に HRMIS は必要な情報をすべて提供できる。

国家公務員の数は増加を続けてきた。モンゴルの公務員制度は、段階的な公務員改革を通じて、効率性と有効性を高め、全体の支出を削減しようとしている。特に給与と賞与は、給与と等級制度、賞与政策にかかわる問題の処理のために不可欠となった。

改革のための行動に加えて、国家公務員改革の方針、さらに、国家公務員改革を強化し、国民の生活水準の向上とより一層包括的な社会経済成長の達成に影響を及ぼす、透明で平等で公正な公的サービスの達成に係る代替案を裏付けるためには、新たな調査分析とより深い探求が必要である。

最後に繰り返すが、もっと他国の経験を知る必要がある。モンゴルの国家公務員制度は、キャリア型から職能型へのシステムの移行にともない、より包括的でデジタル化された職員採用システムの開発を続け、国家公務員の等級・職位決定の改革を続けており、それは結果的に給与・賞与改革につながるであろう。

[英語原稿を ERINA にて翻訳]



## References:

- D.Baigal “The civil service system” (2017) in Sh.Batsukh. Public sector human resources handbook. p.10-13.
- D.Zumberelkham (2011) “Mongolian civil service reform”. Leadership journal. 2011/1.
- Hiroaki I., “Comparative Study of Recent Development of Civil service systems: Japan, US, UK, Germany and France (2020) p.21-27.
- T.Suvdmaa (2022) “The civil service human resources management system of Peoples republic of Korea” (translation in Mongolian) . p.51-80.
- Parliament of Mongolia: The Law on Civil service (2017) .
- Parliament of Mongolia: the Law on COVID-19 prevention, fight and mitigation of its socioeconomic impact (2020) .
- The Civil Service Council (2021, 2020) Annual report.
- The Civil Service Council (2020) Civil service reform handbook.
- The World Bank (2020) . Mongolia-Towards a High Performing Civil Service: Reform Progress and Challenges. Ulaanbaatar.
- Government of Mongolia. (2022) . Laws and Regulations [www.legalinfo.mn](http://www.legalinfo.mn).
- Cortázar, J., J. Fuenzalida and M. Lafuente (2016) , Merit based selection of Public Managers: Better Public sector Performance?: An exploratory Study, Inter-American Development Bank, <http://dx.doi.org/10.18235/0000323>.
- OECD (2020) , OECD Public Integrity Handbook, OECD Publishing, Paris, <https://doi.org/10.1787/ac8ed8e8-en>.
- National Personnel Administration (2014) . Annual report of 2014. <https://www.jinji.go.jp/en/recomme/annual2014/pdf/14.pdf> p.2.
- Public service commission of Canada (2003) . Public service employment Act. <https://www.canada.ca/en/public-service-commission/services/publications/publications/merit-non-partisanship-under-public-service-employment-act-2003.html#toc2>.

## ***Issues on the Application of Civil Service ‘Merit’ Principles in Mongolia (Summary)***

***AMARTUGS Tsenddavaa***

*Permanent Member, the Civil Service Council of Mongolia*

The Mongolian Parliament passed the Law on Public Administration Service in 1995. It was the first legislative framework that saw modern civil service institutionalized. Ever since, the civil service of Mongolia has seen achievements and faced challenges in its development. However, the ‘merit’ core concept remains unchanged, although its meaning was gradually extended by learning from other countries and international experiences.

Mounting a new ‘merit’ principle requires much more work on not only harmonizing common understanding, establishing the proper criteria, and creating a comprehensive leadership, but also on developing awareness of a transparent, competitive, and well-functioning recruitment system. Although the number of public servants had been increasing over time, the Mongolian civil service tried to increase efficiency, improve effectiveness, and diminish whole expenditure through phases of public sector reforms. In particular, pay and compensation reform became essential to overcome problems related to the pay and grading system as well as a compensation policy. The CSC<sup>1</sup> is striving to generate new cultural and ethical concerns in public institutions, creating new public and civil service values in the modern world of digitalization, and providing more training and awareness-building activities for promoting outstanding performance and higher performance levels of professionals. Specifically, it is building a protective culture to reduce risks, while supporting transparency and accountability in all areas of the public service. But consistent policy is needed, along with sustainable and professional guidance, before the expected outcomes of the civil service reform in Mongolia are realized.

Keywords : Merit, Civil service reform, Civil service positions, Mongolian civil service  
JEL Classification Codes : H10

<sup>1</sup> CSC – Civil Service Council

# 日本海側港湾の連携によるポートセールスの実態調査報告

ERINA 調査研究部長・主任研究員 新井洋史

ERINA 調査研究部研究主任 李春霞

## 要旨

我が国の国際コンテナ航路は太平洋側港に集中しており、日本海側の地方港には航路が少ないのが現状である。日本海側の各港湾の貨物量は限られており、単独で航路を誘致することが難しい。そのため、連携してポートセールスを行うことは、日本海側港湾の共通の利益につながり、大きな意義があると考えられる。日本海を航行する国際コンテナ航路やクルーズ客船は、日本海側の複数港湾に寄港することが一般的であり、クルーズ客船誘致も含めて、連携の可能性は十分にある。

そこで筆者らは、日本海側の地方港港湾の連携によるポートセールスの実態を把握することを目的として、2022年に日本海側の地方港の関係機関・団体を対象としたアンケート調査及びヒアリング調査を行った。その結果、クルーズ客船誘致のための連携活動の方が、コンテナ航路の新設や拡充を目的とした連携よりも活発に行われていることが分かった。後者についても、連携効果に対する期待はあるが、有効な連携活動はほとんど行われていない。

キーワード：日本海、地方港、ポートセールス、クルーズ船、コンテナ航路

JEL Classification Codes : R41 O18 L99

## 1. はじめに

我が国の国際コンテナ航路は太平洋側港に集中しており、日本海側の地方港には航路が少ないのが現状である。日本海を航行する航路・船舶の増加は、日本海側の地域経済振興に利益があることは言うまでもない。しかしながら、日本海側の各港湾の貨物量は限られており、単独で航路を誘致することが難しい。そのため、連携してポートセールスを行うことは、日本海側港湾の共通の利益につながり、大きな意義があると考えられる。しかも、日本海を航行する国際コンテナ航路やクルーズ客船は、日本海側の複数港湾に寄港することが一般的であり、クルーズ客船誘致も含めて、連携の可能性は十分にある。しかしながら、各港湾の関係者などからは、港間のライバル意識などが邪魔をして港間連携はほとんど行われていないといった声を聞くことが多い。そもそも、港間連携についてのまとまった情報が存在せず、その実態はまだ把握されていない。

そこで、筆者らは、日本海側の港間連携がどの程度行われているのかの実態を明らかにすることなどを目的として、2022年に日本海側港湾の関係機関・団体を対象としたアンケート調査及びヒアリング調査を行った。以下、第2節で調査の全体像の説明、第3節及び第4節でそれぞれアンケート調査及びヒアリング調査の結果報告を行い、第5節において調査結果を踏まえた若干の考察を加える。

## 2. 調査の全体像

本調査は、日本海側の地方港の連携によるポートセールスの実態を把握することを目的として実施した。ポートセールス活動は、港湾の利用拡大を目指して、(潜在的)利用者に対して自港湾の利便性や優位性等をアピールして利用を促す活動である。特に、国際コンテナ貨物量及びクルーズ客数の増加を目的とした活動が積極的に展開されている。これらの分野は、特定の企業活動(製鉄、石油化学、発電など)と結びついた

バラ貨物や定期フェリー航路の乗客と異なり、輸送ルートの選択・変更の余地が相当程度ある。そこに、港間での競争関係が存在することから、ポートセールス活動の必要性が生じることになる。

こうした状況を踏まえ、調査の対象港湾を、北海道から九州に至る日本海側港湾のうち、定期コンテナ航路が就航している17港湾とした(表1)。2022年初頭に実施したアンケート調査では、これらの全港湾の港湾管理者を始め関

表1 対象港湾

道府県	対象港湾
北海道	石狩湾新港、函館港、小樽港
秋田県	秋田港
山形県	酒田港
新潟県	新潟港、直江津港
富山県	伏木富山港
石川県	金沢港
福井県	敦賀港
京都府	舞鶴港
鳥取県・島根県	境港
島根県	浜田港
福岡県	北九州港、博多港
佐賀県	伊万里港
長崎県	長崎港

出所：筆者作成

係する機関・団体に対して調査票を送付した。2022年夏以降に実施したヒアリング調査では、新潟港、伏木富山港、金沢港、博多港の4港の港湾管理者を対象として実施した。

### 3. アンケート調査

#### (1) 調査の概要

アンケート調査は2022年1月～2月に実施し、回答期限を2月4日に設定した。調査票は郵送送付した。回答方法については、郵送調査票を利用した郵送またはFAXでの回答、ウェブ上に設定した入力フォームからの回答、電子ファイルを利用した電子メールでの回答のいずれかの方法が選択できるようにした。

調査対象は、全ての対象港湾(17港湾)に関わる港湾管理者、立地自治体(道府県・市町)、港湾振興団体、商工団体(商工会議所・商工会)とした。このうち、港湾振興団体については、インターネット上で、連絡先が把握できたものをリストアップした。なお、港湾管理者と立地自治体が同一団体である場合は、それぞれを分けずに1通の調査票を送付した。港湾振興団体の連絡先が港湾管理者、立地自治体、地元商工団体となっている場合には、同一連絡先に各団体別の調査票を送付した。その際、原則としてそれぞれの団体の立場での回答を求めたが、実際の活動が一体化していて個別の団体に分けて回答するのが困難な場合は、いずれかの団体が代表する形で、他団体の分も併せて回答することも可能とした。調査票の総発送数は80通であった。

調査項目は大きく分けて、3分野から構成した。すなわち、①国際コンテナ航路に関するポートセールス活動、②クルーズ客船誘致に関するポートセールス活動、③港間相互連携である。

#### (2) 調査票回収状況

調査票を送付した80団体のうち、なんらかの回答があった団体数は59団体で、(粗)回答率は74%であった。このうち、ポートセールス活動を実施してお

り、その内容について回答があった団体は32団体であった。このほか、ポートセールス活動を実施していないとして、ポートセールス活動の内容に関する設問への回答がなかった団体が8団体あった。また、有効回答があった他団体と一体として活動しているとして、独自回答を省略した団体が19団体であった(表2)。

#### (3) 調査結果

上述の通り、アンケート調査では大別して3分野の質問を設けたが、そのう

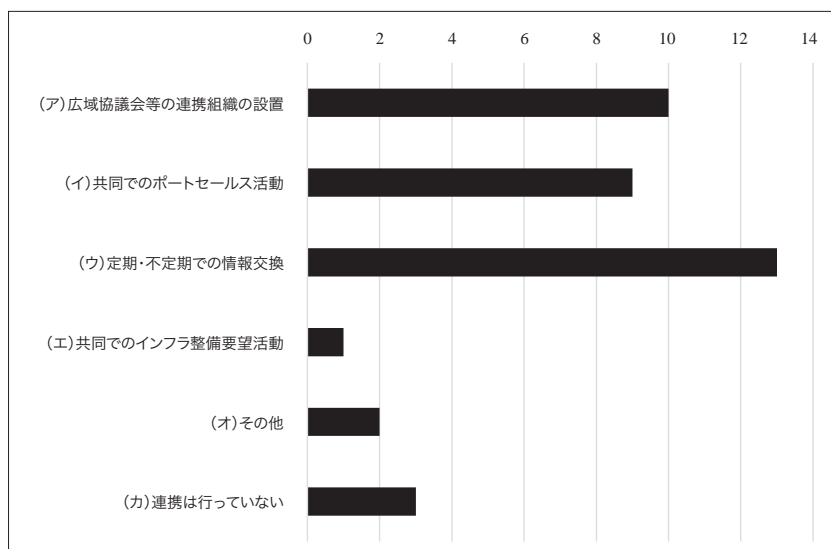
ち「③港間相互連携」に関する部分の調査結果を示す。全質問項目に対する回答については、別途、公表済みであるので、そちらを参照されたい(新井・李、2022)。まず、港間連携の有無等に関する基本的情報を、各港を代表すると考えられる機関の回答に基づいて示す。原則として、港湾管理者団体を各港代表機関とみなしてそれらの回答を集計した。ただし、港湾管理者からの回答が無かった港湾については、他団体の回答を用いた。具体的には、酒田港、舞鶴港については港湾管理者と一体とし

表2 調査票回収状況

港湾	港湾別回答数	うち			
		港湾管理者	立地自治体	港湾振興団体	商工団体
石狩湾新港	1(2)	1	0	0(2)	0
函館港	1(1)	1	0	0(1)	0
小樽港	1(2)	1	0	0(2)	0
秋田港	3(3)	1	1	0(3)	1
酒田港	1(1)	0(1)	0	1	0
新潟港	4	1	1	1	1
直江津港	2(1)	1	1	0(1)	0
伏木富山港	3(1)	1	2	0(1)	0
金沢港	1(1)	1	0	0(1)	0
敦賀港	2(1)	1	1	0(1)	0
舞鶴港	1(1)	0(1)	0	1	0
境港	4(1)	1	0(1)	1	2
浜田港	2(1)	1	1	0(1)	0
北九州港	1	1	0	0	0
博多港	1	1	0	0	0
伊万里港	2(2)	1	1	0(2)	0
長崎港	2(1)	0	1	1(1)	0
合計	32(19)	14(2)	9(1)	5(16)	4

注:カッコ書きの数字は、有効回答があった他団体と一体として活動しているため、独自回答を省略した団体の数である  
出所:筆者作成

図1 港間連携活動内容(複数回答可)



有効回答数:17 出所:筆者作成

て活動している港湾振興団体の回答を、長崎港については立地自治体の回答を用いた。図1に示す通り、17港のうち13港が定期・不定期での情報交換を行っている。10港が広域協議会等の連携組織を設置している。また、共同でのポートセールス活動を行っている港も9港ある。これに対し、他港との連携を行っていない港が3港ある。

港間連携を行っている14港のうち、ほぼすべての13港は日本海側の港湾との間での連携を行っている(図2)。同時に、ちょうど半数にあたる7港は日本海側以外の港湾と連携を行っており、連携が海域を越えて行われていることが分かる。

次に、期待する連携効果や障害についての回答状況を示す。ここでは、有効回答票とした32件の回答の集計結果を用いる。前掲表2の通り、港湾によって回答数が異なり、最大で4回答あった港湾(新潟港、境港)も含めて単純合計しているため、一部港湾のバイアスがかかっている可能性があることに留意が必要である。

期待する連携効果で最も多いのは、「新規コンテナ航路開設の促進」と「クルーズ客船寄港回数の増加」で、いずれも半数を超える18団体が回答している。次いで、17団体は「知名度・ブランド力の向上」と回答している。「コンテナ貨物集荷量の増加」や「ポートセールス活動の費用削減・省力化」との回答がそれぞれ13団体である。「特に期待することはない」との回答はゼロであり、港間連携への期待があることが分かる。

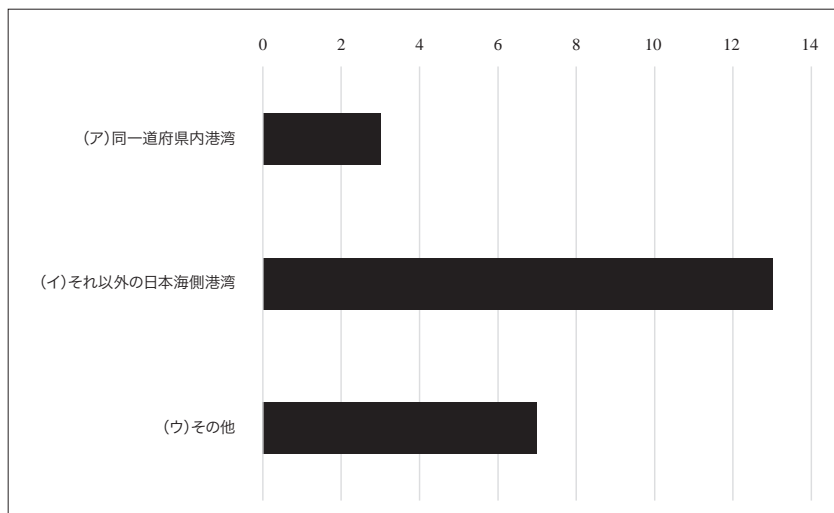
他港との連携の障害になることに関しては、やはり最も多いのは「他港との競合関係」で、23団体が回答している。次いで、「それぞれの港湾の戦略・方針の違い」で、14団体が回答している。「特に障害はない(と思われる)」と回答している団体は6団体である。

#### 4. ヒアリング調査

##### (1) 調査の概要

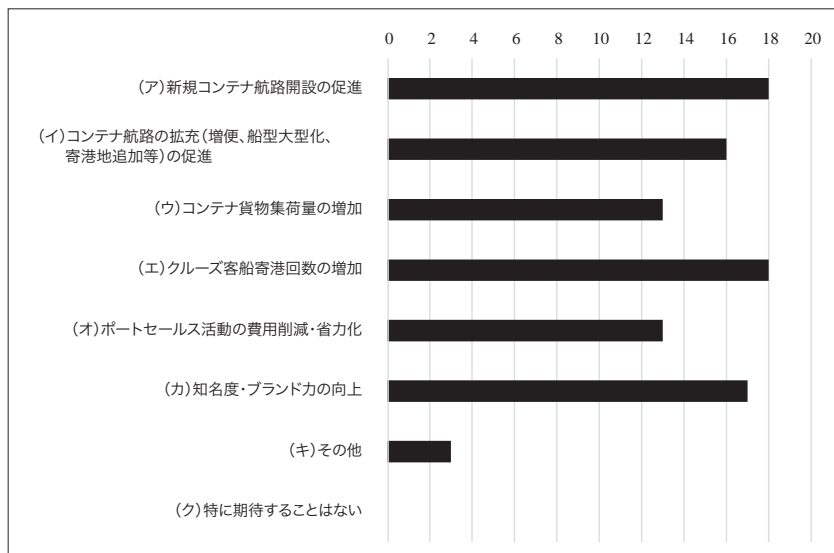
ヒアリング調査は、表3に示した4港の港湾管理者を対象として、面談

図2 連携相手港湾(複数回答可)



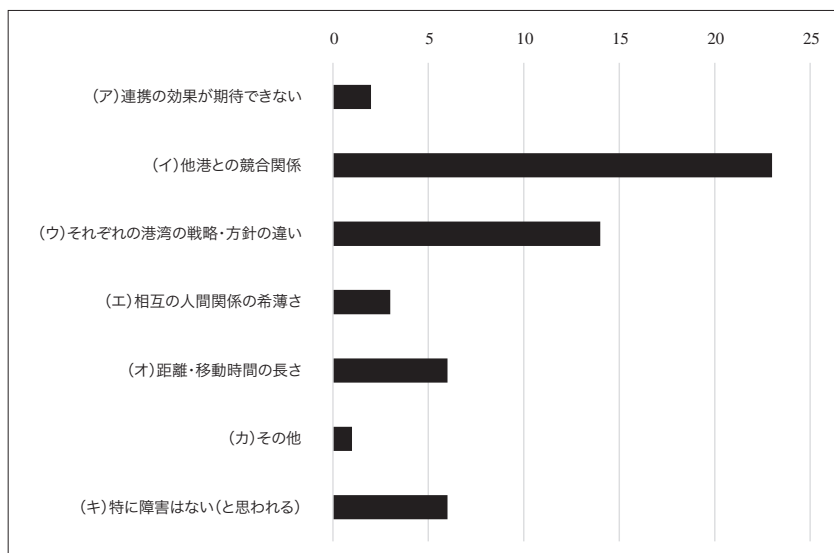
有効回答数: 14 出所: 筆者作成

図3 期待する連携効果



有効回答数: 32 出所: 筆者作成

図4 連携の障害(複数回答可)



有効回答数: 32 出所: 筆者作成

表3 ヒアリング調査対象

港湾	ヒアリング先	実施日
新潟港	新潟県交通政策局	2022年12月7日
伏木富山港	富山県商工労働部・土木部	2022年8月25日
金沢港	石川県商工労働部	2022年8月24日
博多港	福岡市港湾空港局 博多港ふ頭株式会社	2022年10月24日

出所：筆者作成

方式で実施した。

訪問先では、まず基本的な情報として、ポートセールスの戦略・重点課題、ポートセールスの実施体制（港湾管理者と地元自治体、経済団体、関係企業等との連携、役割分担など）について聞いたうえで、本題として他港との連携開始のきっかけや経緯、現在の活動状況及び他港との連携の現状評価や課題、今後の方針について聞き取りを行った。

## (2) 調査結果

面談の中で、港湾管理者から聞き取った内容のうち港間連携に関する要点を取りまとめると以下の通りである。なお、報道やプレスリリース等によって公知となっている事柄を除き、港湾名には言及しない。

具体的な連携事例としては、連携組織の立ち上げによる共同セールス活動、ポートセールス用資料の共同作成、港湾施設見学会が挙げられた。連携組織としては、金沢港と伏木富山港において、それぞれクルーズ客船誘致を目的とした組織が立ち上げられている。ある連携組織では、海外での共同PR活動などを実施しているとのことであった。

伏木富山港の連携相手は、小樽港と舞鶴港である。この3港での連携開始の契機は、2011年に国土交通省が「日本海側拠点港」を選定したことで、この際に3港は連名で外航クルーズ機能での拠点港を目指して応募し、選定を受けた。金沢港は、さまざまな港湾と連携している。例えば、神戸港、広島港、北九州港、境港、金沢港、青森港での6港での連携の場合は、石川県が主導する形で連携を呼びかけたとのことであった。

コンテナ航路関連では、連携組織の事例は確認されなかったが、複数港が共同で船社向けの説明資料を作成したケースがあった。このほか、各港での聞き取りの中から、他港港湾管理者との間で電話やメール、あるいはオンラインミーティングなどの形で情報交換を行っている様子が垣間見えた。特徴的な事例として、博多港では2022年10月27日、28日の2日間に日本海側港湾関係者を対象として、コンテナターミナルの見学会を開催している。こうした見学会の開催は今回が初めてとのことである。今回の開催趣旨は、これまでほとんど関係が無かった日本海側港湾との連携の糸口を探るべく、まずは接点づくりから始めることだとの説明を受けた。

連携の効果については、最終的にクルーズ客船の寄港回数として現れているとの評価があった。また、ポートセールス活動の有効性という点でも、連携組織に参加する港湾を巡るモデルクルーズプランを作成した上での船社への働きかけに手ごたえを感じている様子も窺えた。他方、コンテナ航路関連では、他港との情報共有が業務遂行に有益であるといった言及はあったものの、対外的に目に見える連携効果を指摘する港湾はなかった。なお、博多港の見学会については、今回の聞き取り調査が見学会実施前だったため、成果を聞くことはできなかったが、開催後に博多港ふ頭のウェブサイトに掲載された記事では、見学会期間中に多くの日本海側港湾関係者と交流し、各港の現状や課題について共有できたことが報告されている<sup>1</sup>。

連携を進める上での課題としては、

他港との競合関係やメリットが見えにくいといった点が指摘された。他港との競合は、コンテナ貨物の集荷の面で特に強く意識されていた。また、直接的に言及はなかったものの、聞き取りの様々なやりとりの中から、各組織での人事異動のために長期的な人間関係の構築が困難であることも窺えた。

今後の展望については、トラック運転手のひっ迫が懸念される「2024年問題」<sup>2</sup>との関連で内航コンテナ航路も視野に入れた連携の可能性を指摘する声があった。

## 5. 考察

今回の調査では、国際コンテナ航路とクルーズ客船の2つの側面に着目した。いずれも複数港湾による連携が有効であると考えたためであるが、それぞれの様相は異なることが明らかになった。総じて、クルーズ客船誘致における連携の方が活発に行われていると言える。

クルーズ客船の場合、日本近海でのクルーズ船の数が限定的である一方で、相対的に港湾の数が多く、運航船社にとって新規寄港地開拓は必ずしも優先課題ではないと考えられる。こうした中、複数の港湾が各地の観光資源や受け入れ態勢などの情報を集約しつつ、モデルコースを設定することは、船社側の労力軽減に寄与するので、クルーズ船誘致に有効である。また、クルーズ客船はある寄港地で観光した後、夜間に次の寄港地に移動することが一般的であり、寄港地間に適度な距離が必要であることから、連携港湾は遠距離にあることが有意義である。アンケート調査からは、連携相手が必ずしも日本海側港湾に限られていないことも明らかになった。したがって、今後も様々な組み合わせで連携が進む余地があるものと考えられる。コロナ禍で停止したクルーズ旅行も徐々に復活し始めており、今後の期待される。

<sup>1</sup> <https://hakatako-futo.co.jp/news/#1> 2023年1月5日最終閲覧)

<sup>2</sup> 「2024年問題」とは、働き方改革関連法によって2024年4月1日から自動車運転業務の年間時間外労働の上限が960時間に制限されることで発生する問題のことである。

国際コンテナ航路の分野での連携は相対的に低調であることがわかった。この分野でのポートセールス活動を集荷と航路開設（拡充）に分けて考えた場合、集荷活動では、背後圏が重なる近隣港同士は競合するため、そもそも連携することが難しい。アンケート調査結果でも集荷面での期待は相対的に小さかった。これに対して、新規コンテナ航路開設に関しては、クルーズ客船の場合と同様の構図となるので、連携の意義があると考えられる。この面での他港湾との連携には期待が大きく、ヒアリング調査で前向きな姿勢を示した港もある。とはいえ、観光地情報など詳細情報を必要とするクルーズ船寄港地選定と、端的に言えば貨物量のみで判断できるコンテナ船寄港地選定とでは、連携の意義も違ってくるかもしれない。

## 謝 辞

業務多忙の中、アンケート調査への回答、ヒアリング調査への対応にご協力いただいた関係機関・団体の方々に、あらためてお礼申し上げます。

## <参考文献>

新井洋史・李春霞（2022）『日本海側港湾のポートセールス活動・港間連携の概況』北東アジア情報ファイル EJ-2201.

他方、聞き取り調査の中でも指摘があったが、「2024年問題」を控え、内航コンテナ航路の充実が進む可能性もあり、このことが日本海側港湾の航路誘致戦略にも影響を及ぼしうる。折りしも、2022年11月に、井本商運は新たな日本海側フィーダー航路として、秋田港、新潟港、北九州港の間に配船を開始した。博多港、北九州港の北部九州2港は、日本海側の中では最も航路網が充実している港湾であり、日本海側港湾連携のカギを握る存在になりうるものと考えられる。

同時に、日本海側各港湾と釜山港との関係も焦点となってくるだろう。コロナ禍による国際的な物流混乱の中で、釜山トランシップサービスにおいても釜山港でのコンテナ滞留が発生したことで、一部荷主企業では釜山離れの動きがあるとの話もあった。釜山港

湾公社（BPA）は、2022年11月28日に金沢で、翌29日に新潟で荷主向けセミナーを開催した。こうした韓国側からのアプローチにどのように対応していくかも課題である。

## 6. おわりに

本調査は、日本海側の港湾によるポートセールス活動での連携の展望や課題について検討するための情報収集を目的として実施した。対象港湾17港のうち、ヒアリング調査を実施したのが4港に留まるなど、必ずしも十分な調査ができたわけではない。今後は、追加的な港湾ヒアリングに加え、船社側を対象とする調査なども行って、より詳細な検討を行っていきたい。

# ***Current Situation of Coordinated Port Promotion Activities among Ports on the Sea of Japan (Summary)***

***ARAI Hirofumi***

*Senior Research Fellow, ERINA*

***LI Chunxia***

*Associate Senior Research Fellow, ERINA*

Most international container shipping services to/from Japan cover ports on the Pacific Ocean side, with few container shipping routes available to local ports on the Sea of Japan side. The cargo volume of each port on the Japan Sea side is limited, making it challenging to attract shipping routes independently. Therefore, it would be of great significance to conduct port promotion activities in a coordinated manner, which would lead to the common interests of ports on the Japan Sea side. International container routes and cruise vessels sailing on the Japan Sea generally call at multiple ports on the Japan Sea side, and there is ample potential for collaboration, including in attracting cruises.

The authors conducted a questionnaire-style survey and an interview-style survey of relevant institutions and organizations of local ports on the Sea of Japan in 2022, aiming to understand the current situation of port promotion activities through collaboration among ports on the Japan Sea coast. As a result, the authors found that collaborative activities to attract cruise ships are more active than those to open a new or extend an existing container route. As for the latter, there are expectations for the effectiveness of cooperation, but there are few practical cooperative activities.

Keywords : Sea of Japan, Local port, Port promotion activities, Cruise vessel, Container shipping route

JEL Classification Codes : R41, O18, L99

# 北京市人工知能の発展状況と国際比較分析<sup>※</sup>

北京市科学技術研究院 陳媛媛

北京市科学技術研究院 楊傑

北京市科学技術研究院 李勁

## 要旨

人工知能産業は北京の十大ハイテク産業の一つであり、北京の産業構造最適化の発展、生産力全体の飛躍的向上、科学技術の飛躍的発展を促進する中核である。本稿では、科学技術資源、科学技術成果、企業革新、産業の将来性などの面から、北京市の人工知能産業の発展の現状に対して多次元分析を行う。また、特許分析により北京市人工知能分野の技術研究開発力と発展状況を明らかにし、北京市と他国との技術上の焦点や産業配置などの面における差異といくつかの問題点を提起する。最後に、最先端技術の突破、高価値特許、基礎研究、人材育成の環境整備、グローバルガバナンスへの参加などの角度から、北京市人工知能の今後の発展のために適切な対策を提案する。

キーワード：人工知能、北京市の発展、国際比較

JEL Classification Codes : L86 O57

## 1. はじめに

人工知能 (Artificial Intelligence, AI) は未来をけん引する戦略的技術として、新しい技術革命と産業変革における各国の競争の焦点となっている。また、グローバルに多分野で技術革新が起こる様相を呈し、世界の産業競争と産業構造の再構築に大きな影響を与えていることから、世界で注目を集めている。北京市は2017年に人工知能を北京十大ハイテク産業の一つとすることを明確にした。また、企業主体型、市場志向型、産学研が深く融合する人工知能技術革新システムを積極的に構築することで、人工知能の自主革新能力と産業競争力を強化し、人工知能の産業クラスターとイノベーション高地の構築に向けた努力をすることを提案した。2021年に公布された『北京市第14次5年計画期間(2021~2025年)における高精鋭産業発展計画』でも、北京市に国家人工知能革新応用先導区の建設を速めて、世界人工知能革新の発信地と産業発展の高地を構築することを明言している。本稿は特許分析、事例比較などの方法を利用

して、科学技術資源、科学技術成果、企業革新と産業の将来性などの面から AI 分野における北京の発展状況と問題点を整理・分析し、政策提言を行う。

## 2. 人工知能の基本概念

国内外とも国家戦略のレベルで人工知能の技術と産業の発展を推進しているが、学界には人工知能に対する明確かつ統一的な定義がなく、多くの学者が異なる角度から異なる定義を与えている。マサチューセッツ工科大学 (MIT) のパトリック・ウィンストン教授 (2005年) は、人工知能とは、過去に人間にしかできなかった知的作業をコンピュータにどのようにさせるかを研究することであると考えている<sup>[1]</sup>。中国科学院の院士、清華大学人工知能研究院の張鉞院長 (2019) は、人工知能は人間の知的行動を機械で模倣することであり、これら知的行動には推論、意思決定、計画、知覚、移動などが含まれると考えている<sup>[2]</sup>。ブリタニカ百科事典では、人工知能をデジタルコンピュータまたはデジタルコンピュータによって制御されたロボットが、

知的生命のみが持ちうる多くのタスクを実行するための能力と定義している。中国電子技術標準化研究院による『人工知能標準化白書 (2021年版)』では、人工知能をデジタルコンピュータまたはデジタルコンピュータによって制御された機械を用いて人間の知能をシミュレーション・延長・拡張することで、環境を認識し、知識を獲得し、それに知識を利用して最適な結果を得る理論、方法、技術、応用システムであると定義している<sup>[3]</sup>。一般教材での定義は「知的エージェント (intelligent agent) の研究と設計」である<sup>[4]</sup>。知的エージェントとは周囲の環境を観察し、目標達成のために行動できるシステムを指す<sup>[5]</sup>。要するに、人工知能はビッグデータのアルゴリズムに基づき、心理学、言語学、行動学、コンピュータ科学の要素を取り入れた総合的な現代化技術であり、現在のコンピュータ科学の発展の産物である。

## 3. 北京市人工知能産業の発展に関する基本状況

人工知能の発展は技術上の問題だけ

<sup>※</sup>本文は北京市科学技術研究院の財政プロジェクト「革新プロジェクト(ソフト)―北京市脳模倣型知能分野技術ロードマップ研究」(プロジェクト番号:13220226301 KF0020)の段階的な成果である。

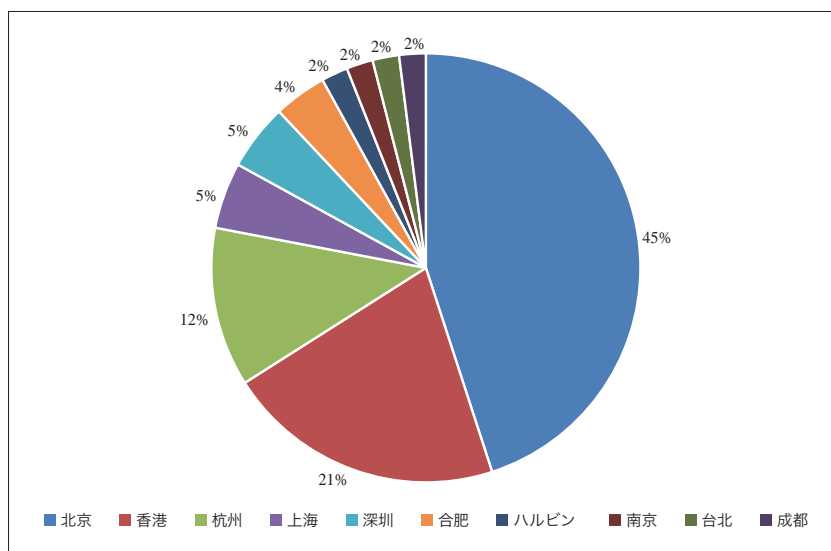


でなく、初期段階での科学技術資源の投入、後期段階での技術転換や産業発展など多くの段階に関連している。

### 3.1 科学技術資源

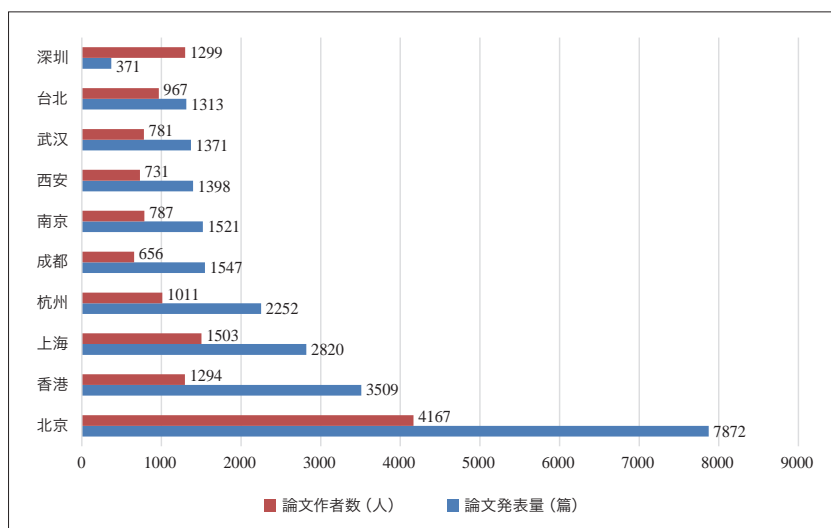
科学技術資源の面では、北京市は中国 AI 分野における最も優秀な人材、研究主体、プラットフォームを集めている。人材に関しては、北京市における AI 分野の学者とトップ科学者の数が全国で最も多い。図1に示したように2020年末まで、中国清華大学が開発した学術論文検索サービス「AMiner」プラットフォームによる世界で最も影響のある AI 研究者2000人のリスト「AI2000」に選ばれたハイレベル学者の中、北京市は79人で全国の半分近くを占めている<sup>[6]</sup>。2020年11月 Guide2Research が発表した「2020年世界コンピュータ科学と電子分野におけるトップ科学者TOP1000ランキング」では、北京市は12人が選ばれ、中国国内の4割近くを占めている<sup>[7]</sup>。研究主体に関しては、清華大学、北京大学、中国科学技術大学、北京航空航天大学、中国人民大学、北京郵電大学、北京交通大学、北京科技大学、北京工業大学の9大学が人工知能学院・研究院を設立した。更に、清華大学、北京大学、中国科学院大学など北京の大学が人工知能分野における学術機関の世界ランキング「CSRankings」の中国TOP10にランクインしている<sup>[8]</sup>。また、百度、京東、小米、奇虎360、バイトダンスなどの大手企業は人工知能研究院や実験室を次々に設立し、AI 関連技術の研究を積極的に設置し、産業の発展を活発化させている。プラットフォームに関しては、北京は2019年に中国初の新世代人工知能革新・発展国家試験区として承認された。15の新世代人工知能開放革新国家プラットフォームのうち7カ所が北京にある。北京には AI 分野の国家重点実験室8カ所、国家工学実験室3カ所、中央省庁レベル中国科学院重点実験室3カ所、北京市重点実験室8カ所、北京市工学技術研究センター2カ所が集まっている。プラットフォームと基地の数が多く、研究の成果も著しい。

図1 中国 TOP 10都市・地域ハイレベル AI 学者の分布



出所：AMiner プラットフォーム公表した2011-2020年「AI2000世界人工知能学者名録」のデータより作成

図2 2010-2021年中国人工知能分野の論文発表数トップ10都市



出所：AMiner プラットフォーム公表した2010-2021年「世界人工知能で最もイノベーション力の高い都市リスト」のデータより作成

### 3.2 科学技術成果

科学技術成果の面では、AMiner の統計データによると、2010年から2021年まで北京の学者が国際的トップジャーナルとトップカンファレンスで7872本の論文を発表した。図2が示すように北京の数値は国内全体の3割を占め、2位と3位の香港と上海を大きく上回っている。中国信息通信研究院が公表した『2018世界人工知能産業発展青書』のデータによると、1999年から2017年にかけての中国人工知能分野の特許出願件数は世界1位であり、全体の約4割を占めている。そのうち、北京の特許出願件数は全国1位である<sup>[9]</sup>。北京で

は、清華大学の施路平チームによる世界初のヘテロジニアス融合類脳型コンピュータチップ「天機芯(Tianjic)」、中国科学院計算技術研究所の陳雲霽と陳天石チームによる世界初のディープラーニングプロセッサチップ「寒武紀(Cambricon)」など、人工知能分野における独自の重要な成果が出ている。

### 3.3 企業革新

企業革新の面では、企業が AI 革新の主体となり、目覚ましい発展を遂げている。北京では30社以上の人工知能ユニコーン企業が誕生している。「CB Insights」による2021年世界ユニコーン企

業ランキングに選ばれた北京の人工知能企業が7社あり、中国全体の6割以上を占めている。また、「CB Insights」による2021年 AI 100世界ランキングには中国企業5社が選出され、そのうち4社が北京に所在している<sup>[10]</sup>。北京はバイトダンス、セスタイム、京東、百度をはじめとするトップ企業を有している。このように、独自の技術、データ、人材などの優位性を活かし人工知能分野における躍進を続ける一方、人工知能技術と業界の発展を効果的に融合させ、人工知能プラットフォームを通じて業界にさらに力を与えている。例えば、百度はバイオコンピューティング技術で駆動するライフサイエンス企業—百図生科を設立した。バイトダンスは百科名医網の買収を通じて医療知識マップ分野に進出した。クエスタイルはAI技術を家庭用電子機器、モノのインターネット、スマート都市、スマートパーク、スマート金融などの分野に活用させている。

### 3. 4 産業発展

産業発展の面では、AI産業が首都圏の経済発展の新たな成長ポイントになりつつある。産業規模から見ると、北京市の人工知能関連の産業生産額は2020年に1860億元に達し、前年同期比9.8%増と急速な成長傾向を示している。産業配置から見ると、北京市海淀区と朝陽区は全市の9割近くの人工知能企業を集め、エリアごとに差別化された特色ある発展を実現している。そのうち、海淀区は高品質の人工知能研究開発と産業革新クラスターのエリアを建設した。朝陽区はデジタル経済示範区を積極的に建設中である。北京経済技術開発区は国家人工知能ハイテク産業化基地を建設した。石景山区は中関村（首鋼）人工知能革新応用工業団地を積極的に建設中である。門頭溝区は中関村（京西）人工知能科学技術パークを建設した。産業チェーンの分布から見ると、北京の人工知能産業は基本的にはほぼ完全な産業チェーンを形成しており、基礎、技術、応用の分野における企業がそれぞれ10%、38%、52%を占めている。基礎分野では寒武紀（キャンブリコン・テクノロジーズ）、

地平線（ホライズン・ロボティクス）、海天瑞声（Speechocean）、技術分野では雲知声（ユニサウンド）、クエスタイル、瑞萊智慧（RealAI）、応用分野では度小満金融（Du Xiaoman Financial）、万集科技（VanJee）、沃豊科技（Udesk）など、いずれもその分野でリーダーシップを発揮できる企業が数多く現れている。

## 4. 北京市人工知能の発展状況と国際比較分析

北京市のAI技術の発展状況を他の国際地域と比較するために、本稿では世界最大の特許権データサービス提供企業 Clarivate Analytics の中国パートナー incoPat 特許データベースにおける、2011年1月から2021年12月までの特許出願日のAI分野の国内外特許データを利用して比較分析を行うことにする。これは、incoPatの特許データが中国各省・市・地区までに細分化しているためである。世界知的所有権機関（WIPO）が2019年に発表した人工知能に関する技術キーワードを用いて、本体リストを作成した<sup>[11]</sup>。INPADOCのファミリー結合と重複排除処理を経て、合計4万3942件の北京市の人工知能技術特許を取得した。

### 4. 1 技術状況の分析

#### (1) 特許出願

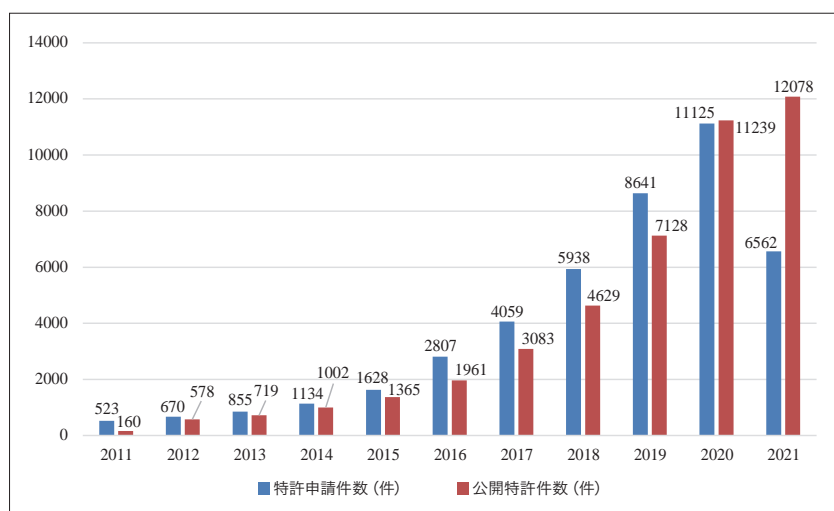
特許出願は急速に発展していると同

時に、その技術は成長期に入っている。2011年以降、北京市の人工知能特許の出願件数は年々増加傾向にある。特に第13次5カ年計画（2016～2020年）以来、人工知能技術は急速な発展期にあり、対応する特許出願件数も指数関数的に増加傾向にある。2020年には北京の人工知能技術特許出願件数は1万1125件に達した（図3）。技術のライフサイクルから見ると、ミレニアム以降、北京の人工知能特許申請人数と特許申請件数は共に急速な伸びを示しており、北京の人工知能技術は依然として技術成長期のなかにある。

#### (2) 技術上の焦点

技術上の焦点は画像認識・画像解析、音声認識、ニューラルネットワーク、ディープラーニング、知能ロボットなどの分野に集中している。技術構成から見ると、北京市の人工知能業界に関わる技術は主にG06N（コンピューターシステム）、G06F（データ処理）、G06K（データの識別）、G06Q（商業方法）、G06T（画像データ処理）、G10L（音声識別）などの小分類に集中している。技術テーマから見ると、TOP10000の特許を選択してテキストのクラスター分析を行った結果、北京市の人工知能技術は主に、ターゲット画像・画像・検出モデル、ディスプレイ・グラフィカルユーザインタフェース・状態遷移図、フィーチャデータ、認識結果・音声情報・媒質、損失関数・Attention機

図3 2011～2021年北京市人工知能技術特許申請件数と公開特許件数の変化



出所：IncoPat 検索2011～2021年AI分野特許データより作成

構・ネットワークモデル、テキスト・分類モデル・特徴ベクトル、予測・BP 神経回路・遺伝的アルゴリズム、知能ロボット・画像認識・ロボット、スパイキングニューラルネットワーク (SNN)・人工ニューラルネットワーク (ANN)・畳み込み、ディープラーニング・ニューラルネットワークモデルといった10の分野に応用されている。

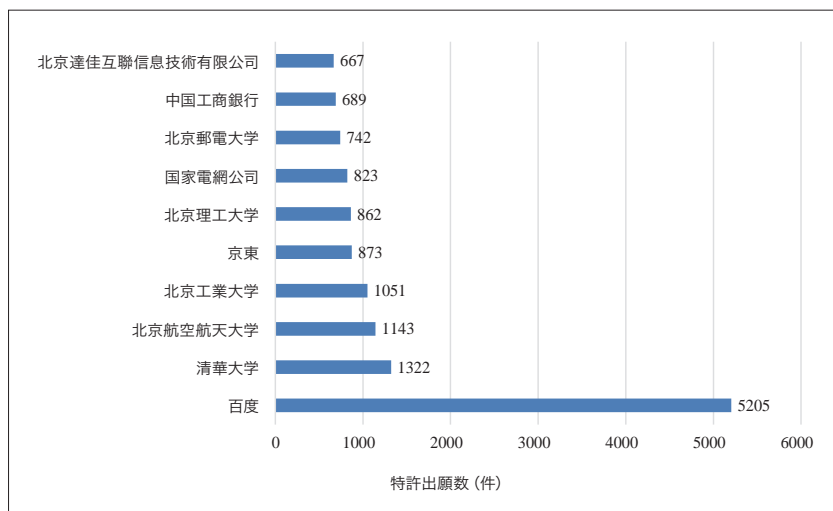
### (3) 特許出願の主体

特許出願の主体は企業、次に大学と研究機関である。また、技術分野には相違点がある。出願人の種類から見ると、企業、大学、研究機関の割合はそれぞれ69%、19%、9%である。出願件数から見ると、百度の出願件数が1位、その次は清華大学、北京航空航天大学と続く(図4)。この中で、百度の研究は主に知識マップ、言語モデル、コンピュータ記憶媒体、音声認識などで、清華大学は主に強化学習、畳み込みニューラルネットワーク、ニューラルネットワーク計算、自動運転など、北京航空航天大学は主にリモートセンシング画像、時系列予測、バックプロパゲーション、極超音速機などの分野に集中している。その他、北京工業大学、京東、国家电网公司、北京郵電大学などの大学と企業がトップ10にランクインしている。

### (4) 特許譲渡

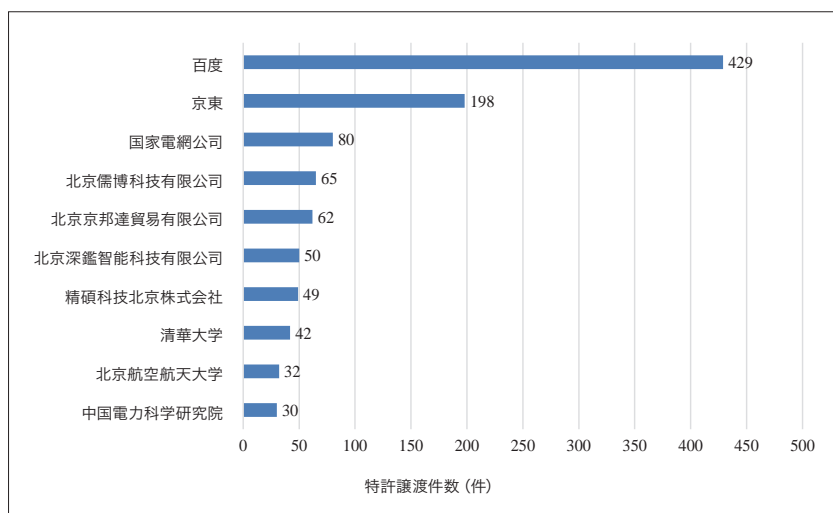
人工知能特許権の譲渡率は高くない。また、企業は特許譲渡の主体となっている。特許譲渡の動向から見ると、第12次5カ年計画(2011~2015年)以降、北京市の人工知能特許権が譲渡された特許件数は急増している。北京の4万3942件の人工知能特許のうち、特許権が譲渡された特許は2250件であり、全体の5.1%を占めている。特許運用の動向から見ると、TOP10の譲渡者のうち、百度と京東で特許権譲渡が発生した特許件数が比較的多く、この2社が発明した人工知能技術の商業価値が高いことがわかる。大学と研究機関は、清華大学、北京航空航天大学、中国電力科学研究院のみがランクインしたが、いずれも下位である(図5)。これは大学と研究機関の研究能力の市場への移転、つまり実用化がう

図4 2011-2021年北京市人工知能技術分野の主要出願人ランキング



出所: IncoPat 検索2011-2021年 AI 分野特許データより作成

図5 2011-2021年北京市人工知能特許譲渡者ランキング



出所: IncoPat 検索2011-2021年 AI 分野特許データより作成

まくいっていないことを示している。

## 4.2 国際比較分析

同じ本体リストに基づき、incoPat 特許データベースを利用して米国と欧州代表国のドイツ、英国、フランス、オランダ、スイス、フィンランド、スウェーデン、イタリアの8カ国を選択し、人工知能分野の特許を国際比較したところ、次のような相違が見られる。

### (1) 特許件数の比較

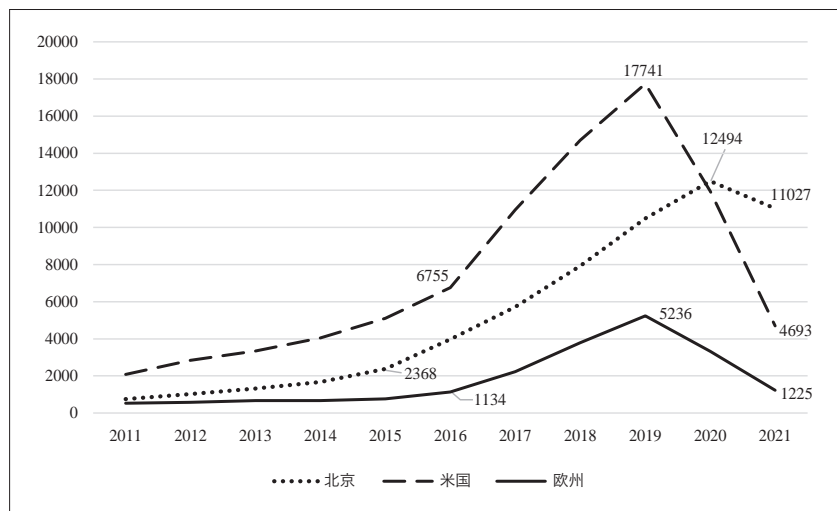
北京の人工知能分野での特許技術の研究開発力はすでにヨーロッパ諸国を上回り、米国との差も徐々に縮まってきた。北京市の人工知能分野の特許出願件数は2015年以来、安定的かつ

急速に増加している。2021年の出願件数はやや下落した。一方、米国と欧州の発展傾向は似ている。2016年以降の特許出願件数が急増したが、2020年と2021年はコロナ禍の影響で、明らかな減少傾向が見られる(図6)。

### (2) 出願人の構造

北京市の人工知能分野の特許技術システムにおいては、大学が重要な役割を果たしているが、欧米はいずれも企業が主導している。出願人ランキングを見ると、出願件数1位の百度は、欧州1位のシーメンスヘルシニアーズの出願件数をはるかに上回り、米国1位の Intel 社をやや下回っている。北京の特許出願人トップ8のうち、百度、国家电网、京東のほか

図6 2011-2021北京と米国、欧州の人工知能特許出願傾向



出所: IncoPat 検索2011-2021年 AI 分野特許データより作成

表1 人工知能分野における北京、米国、欧州の特許出願人ランキング

エリア	出願人 (TOP 8)
北京	北京百度網訊科技有限公司、清華大学、北京航空航天大学、北京工業大学、北京理工大学、北京郵電大学、国家電網公司、北京京東世紀貿易有限公司
米国	IBM、グーグル、マイクロソフト、クアルコム、アマゾン、Adobe、キャピタルワン・フィナンシャル、Facebook
欧州8カ国	ジーマス、ボッシュグループ、フィリップス、DeepMind、ノキア、SAP SE、エリクソン、IBM (英)

出所: IncoPat 検索2011-2021年 AI 分野特許データより作成

は、北京工業大学、北京理工大学、北京郵電大学などの大学である。それに対し、米国と欧州はすべて企業である(表1)。

### (3) 技術研究の焦点

特許技術の焦点に関しては、北京市と先進国との間に明確な差異がある。北京市の特許出願人トップ3はそれぞれ百度、清華大学、北京航空航天大学である。その特許技術の主要研究分野は、畳み込みニューラルネットワーク、スパイキングニューラルネットワーク、量子ニューラルネットワーク、ディープラーニング、グラフィカルユーザインタフェース、音声認識と対話などである。米国の特許出願人トップ3はそれぞれIBM、グーグル、マイクロソフトである。その主要研究分野は機械学習、知識マップ、回帰型ニューラルネットワーク、畳み込みニューラルネットワーク、量子ニューラルネットワークなどである。欧州の特許出願人トップ3はそれぞれシーメンスヘルシニアーズ、ボッシュ、フィリップス

である。その主要研究分野は人工ニューラルネットワーク、畳み込みニューラルネットワーク、ディープラーニング、車両自動故障検出、医療画像解析などである。比較分析をした結果、上流部分の基礎研究と応用基礎研究で、北京市と米国の注目点と研究力は比較的に似ているが、欧州の研究力は比較的に低く、北京市や米国と肩を並べられないことが判明した。応用分野では、北京市の人工知能の特許技術は自動運転と航空機分野に重点を置く一方で、米国と欧州は主に医学分野に重点を置いている。

## 5. 北京市人工知能技術の問題点

上記の特許データ分析と国際比較をした結果、北京市 AI 技術の発展にはいくつかの問題があることがわかる。

### 5.1 国際的なリーダーシップとの距離

北京市の AI 技術も AI 企業も国内

で圧倒的な優位性を持っているが、このような国内優位性は世界で AI 技術のリーダーシップを形成するのに十分ではない。とりわけ AI チップや学習フレームワーク、商用サーバーなどの基本分野において、北京市と海外との差はまだ大きい。AI チップの分野では、中国国内は主にクアルコム、NVIDIA、ザイリンクスなどの国際大手に依存しており、技術自給と国際 AI イノベーション高地という目標の達成まではまだ一定の距離がある。

### 5.2 特許バブルによる数の弊害

北京の AI 技術の特許出願件数は多いが、それほど強くない。その中にはある程度バブル的要素も存在している。中国第12次5カ年計画(2011~2015年)で初めて「1万人当たりの発明特許件数」を国家経済と社会発展の総合評価指標システムに組み入れてから、特許出願件数は実際の役職評価、ハイテク企業の資格認定、税金の減額と免除、さらには進学や刑事罰の軽減などの重要な指標となった。こうした特許出願刺激政策は、やみくもな出願とイノベーションバブルをもたらしている。国家革新能力に実質的な変化を及ぼすことはほとんどなく、かえって特許権によるイノベーション資源への調整と配分という市場の機能を大きく歪めることになった。このような状況は、AI 分野の特許出願にも見られる。

### 5.3 応用技術研究への過度の集中

北京の AI 技術開発の焦点分野は技術の応用に集中しており、多くの基礎研究を欠いている。北京市の人工知能企業は機械学習やコンピュータビジョン、自然言語処理、知識マッピングなどの分野で明らかな優位性を持っている。しかし、国際社会と比較すれば、世界人工知能産業と技術発展をけん引する中核企業とトップ技術がなく、多くの技術は応用性に焦点を当て、技術面の発明はまだ不足していると言える。中国は人口と市場の優位性を持つため、豊富なデータ資源と巨大な市場需要を有している。それは AI 技術の発展に巨大

なデータソースと利用場面を提供することができるが、知的な基本アルゴリズム、知的ソフトウェアとハードウェアの面で欧米と一定の差がある。

#### 5.4 ハイエンド AI 人材活用の問題点

中国は資金を投じて有名な AI 分野の専門家を招聘することに熱心であったが、知名度は低いが実際の研究を担うハイエンド人材の需要や研究環境の構築などにはまだいくつかの問題がある。例えば、北京智源人工知能研究院を調査したところ、招聘されたトップレベルの専門家には名目上の管理職を担当する必要がある。彼らには多くの研究経費が与えられるが、経費の増加により会議や評価も増加し、かえって研究の時間が少なくなる。その一方で、創造性豊かな若手研究者は北京への定住や昇進のプレッシャーなど、現実的な問題に直面するため、研究成果にも影響がある。そのため、人材導入後のサポート改善が必要である。

#### 5.5 グローバルガバナンスへの参加意識の欠如

北京は、AI 技術の国際標準の策定、倫理関連制度の構築、将来の AI グローバルガバナンスへの参加などの面ではまだ積極的ではない。人工知能技術は経済と社会活動を支える基盤であり、単なる技術の問題ではない。AI 技術は権力の非対称と不平等の問題を拡大させる恐れがあり、ビッグデータの乱用と悪用は道徳と倫理基準に違反することもある。そこで、中国は AI 技術を急速に発展させると同時に、関連する基準を策定して、人間本位という人工知能の発展の方向性を保証していかなければならない。

### 6. 北京市の人工知能産業発展のための提言

以上、北京市の既存の AI フロンティア研究の関連状況の総括と国際分析を通じて、一連の潜在する問題点を提起し、その解決策について提案する。

#### 6.1 最先端技術の発明で世界をけん引する

AI 研究の最先端分野をけん引する勇気と自信を持たなければならない。第一に、脳科学や計算科学、量子論など分野では、いくつかの大型研究開発プロジェクトの展開に力を注ぎ、投資を増やし、将来の人工知能産業発展の高地としての役割を積極的に占める必要がある。こうしたことから、人工知能技術の応用と産業化のために強固な理論基盤を構築していく。第二に、人工知能成果の実用化における企業の主体的役割を十分に発揮させることである。人工知能技術の研究開発、市場化、産業化、規模化などの面で、企業に有力な政策支援を提供する。特に中小企業への支援を強化し、人工知能など新しい産業形態の発展を促進していく。

#### 6.2 特許の数量から品質への転換を強調する

特許出願件数を唯一の評価指標とするやり方を転換し、品質の角度から高価値特許を強調すべきである。AI 分野における高価値特許の育成と転化は複雑かつ系統的な流れである。技術の研究開発とスクリーニングから、特許出願と保護、成果実用化と管理、関連サービスまでのイノベーションチェーン全体の中で、各段階が特許の発生と価値に影響を与える可能性がある。北京市は国家戦略を担う姿勢で、高品質技術革新戦略研究を展開し、AI 分野の重点的技術リストを整理する必要がある。政府は各研究機関に難関を一つ一つ突破するよう働きかけ、これまでの欠点を補うべきである。一方で、代替となる画期的な新技術を積極的に模索しなければならない。現在の学習模倣型革新から競争牽引型革新へと転換する必要がある。

#### 6.3 北京市人工知能の基礎研究を強化する

北京市の人工知能産業の基礎研究を強化しなければならない。第一に、政府は政策、人材、資金などの面から、人工知能チップ、アルゴリズム、ディープラー

ニングなどの基礎研究を重点的に支援すべきである。特定研究プロジェクトや産業基金の誘致などの措置を通じて、コア技術の発明に力を集中する。第二に、条件と技術を持つ企業による国家級実験室、国家級企業技術センターなどの各種の科学研究プラットフォームの構築を支援すべきである。これらの企業による基本的アルゴリズムの研究を奨励し、脳模倣科学など最先端技術の研究を強化することで、コア技術の発展を推進していく。第三に、科学研究の自主革新を強化し、ディープラーニングにおいて欧米の枠組みに依存し、コア技術が不足している問題を解決することである。国際市場でシェアをもてる国産の枠組みづくりを加速させなければならない。

#### 6.4 ハイレベルなグローバル人材確保

世界トップクラスの人材に対しては、ただ招聘するだけでなく、彼らに安心して革新できる環境を整備しなければならない。第一に、人工知能分野の海外科学研究人材、特にトップクラスの人工知能人材と潜在力のある若手人材を積極的に誘致する。経費のサポート、ビザ、戸籍、税、子供の教育なども含めた人材誘致政策を打ち出す必要がある。第二に、中国科学院、北京大学、清華大学、北京理工大学などの重点大学の力を借りて、人工知能産業の発展に必要な貴重な人材と複合型人材を育成する。

#### 6.5 人工知能のグローバルガバナンスに積極的に参加する

AI 分野の技術革新を絶えず実現すると同時に、国際 AI 技術基準の策定、倫理制度の構築などグローバル・ガバナンスの事業に積極的に参加しなければならない。第一に、国際 AI 技術の最前線研究に積極的に参加し、基礎研究のレベルを高めることである。確固とした基礎に基づいた国際協力による、国際的に高く認められ、科学技術の先端性を持つ研究計画を提出し、国際社会において科学技術での影響力と発言権を高めるべきである。第二に、国際組織と協力し関連基準を策定して、人間本位の

人工知能の発展の方向性を確保しなければならない。これには、より透明性のある品質基準が必要である。また、人工知能の社会的影響を継続的に監視すると同時に、伝統的な制度や政策を時

代に応じて更新する必要がある。第三に、北京市は人工知能技術の応用を推進すると同時に、安全管理能力の向上を進めるべきである。地方レベルから人工知能データの危機管理対応メカニ

ズムの構築を推進し、国際社会と国家の人工知能の倫理規則の構築に積極的に参加する必要がある。

## <参考文献>

- [1] [US] Patrick Henry Winston. 人工知能 (第三版) [M]. 崔良沂, 趙永昌 (訳). 北京: 清華大学出版社, 2005.
- [2] 張鈞. 人工知能はポスト深層学習時代に突入 [J]. 知能科学と技術学報, 2019, 1 (01): 4-6.
- [3] 中国電子技術標準化研究院. 人工知能標準化白書 (2021) 版 [4] [R]. 北京: 中国情報通信研究院, 2022.
- [4] Poole D, Mackworth A, Goebel R. Computational Intelligence: a logical approach. 1998 [J]. 1998.
- [5] Russell S J, Norvig P. Artificial intelligence: a modern approach [M]. Malaysia; Pearson Education Limited., 2016.
- [6] AMiner. AI 2000世界人工知能学者 [EB/OL]. 北京: 清華大学 Aminer 學術檢索プラットフォーム, 2022.  
Accessed at : <https://www.aminer.cn/ranks/home>.
- [7] Guide2Research. Best Scientists Ranking (The Top 1000 Computer Science Scientists) [EB/OL]. Guide2Research 网站, 2022.  
Accessed at : <https://guide2research.com/>.
- [8] CSRankings. 2022年度 CSRankings : Computer Science Rankings [EB/OL]. 米国 MIT: CSRankings ウェブサイト, 2022.  
Accessed at : <https://csrankings.org/#/fromyear/2012/toyear/2022/index?all&us>.
- [9] 中国信息通信研究院. 2018世界人工知能産業発展青書 [EB/OL]. 上海: 2018世界人工知能大会, 2018.  
Accessed at : <http://www.caict.ac.cn/kxyj/qwfb/bps/201809/P020180918696199759142.pdf>.
- [10] CB Insights. CB Insights 年度 AI 100世界ランキング [EB/OL]. CB Insights ウェブサイト, 2022.  
Accessed at : <http://case.deeptechchina.com/cbi/>.
- [11] WIPO. WIPO Technology Trends 2019 - Artificial Intelligence [EB/OL]. 2019.  
Accessed at : <https://www.wipo.int/publications/en/details.jsp?id=4396&plang=EN>.

# An Analysis and Comparison Study of AI Development in Beijing (Summary)

**CHEN Yuanyuan**

Beijing Academy of Science and Technology

**YANG Jie**

Beijing Academy of Science and Technology

**LI Jin**

Beijing Academy of Science and Technology

As one of the “Top Ten High-end Industries” in Beijing, artificial intelligence (AI) becomes one key factor for optimal adjustment of industrial structure, rapid growth of productivity, and breakthrough development of science and technology. This paper first described the existing technical resources, R&D achievements, representative enterprise innovation, and industrial development status in Beijing for a fundamental understanding of local AI industry. Through AI patent data analysis and international comparison, the differences of hot areas of research and industrial layouts among various regions were found out. Moreover, the R&D strength, development trends, and some potential problems of AI in Beijing were also summarized. Finally, this paper provided Beijing government with some relevant recommendations for achieving more cutting-edge technological breakthroughs, creating higher value patents, conducting better basic research, establish a more suitable environment for talent development, and participate more proactively in international cooperation and governance in AI field.

Keywords : Artificial Intelligence, Beijing Development, International Comparison

JEL Classification Codes : L86, O57

## イベント

## 2022年度北東アジア経済発展国際会議 (NICE) イン新潟 「分断が進む世界経済一つなかりを求めて」

日 時：2022年12月1日(木)、12月16日(金)

開催方式：会場、オンライン(同時 Web 配信)

主 催 NICE 実行委員会(新潟県、新潟市、ERINA)

後 援 外務省、経済産業省、国土交通省、新潟大学、駐日モンゴル国大使館、駐新潟大韓民国総領事館、中華人民共和国駐新潟総領事館、一般社団法人日本経済団体連合会、一般社団法人東北経済連合会、一般社団法人新潟県商工会議所連合会、一般社団法人新潟県経営者協会、新潟経済同友会、日本海沿岸地帯振興連盟、公益財団法人にいがた産業創造機構、一般社団法人新潟青年会議所、独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)、独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構、一般財団法人日本エネルギー経済研究所、一般財団法人石炭フロンティア機構、一般社団法人ロシア NIS 貿易会、株式会社国際協力銀行(JBIC)、石油連盟、一般社団法人日本プロジェクト産業協議会、世界省エネルギー等ビジネス推進協議会、新潟日報社、毎日新聞新潟支局、読売新聞新潟支局、産経新聞新潟支局、朝日新聞新潟総局、日本経済新聞社新潟支局、共同通信社新潟支局、時事通信社新潟支局、NHK 新潟放送局、BSN 新潟放送、N S T 新潟総合テレビ、TeNY テレビ新潟、UX 新潟テレビ21、NCV (株)ニューメディア、FM 新潟77.5、FM KENTO

参加者数 国内外約320人(うち国外:約30人 中国、韓国、モンゴルほか)

### <プログラム>

#### ■第1日目

開 催 日：2022年12月1日(木)

開催方式：会場、オンライン(同時 Web 配信)

会 場：朱鷺メッセ4階マリナーホール

使用言語：3カ国語(日英中)同時通訳

#### ■開会(10:30~11:00)

主催者挨拶	新潟県知事	花角英世
	新潟市長	中原八一
	NICE 実行委員長・ERINA 代表理事	河合正弘
来賓挨拶	外務省欧州局日露経済室長	石川亘*
	経済産業省通商政策局北東アジア課課長補佐	柏原直明*

#### ■特別講演(11:00~12:00)

「分断が進む世界における日本の役割」

宮本アジア研究所代表、元駐中国特命全権大使 宮本雄二\*

#### ■経済安全保障セッション「世界経済の分断は回避できるか?—危機の時代の経済と安全保障」(13:30~15:30)

#### <パネリスト>

東京大学公共政策大学院教授	鈴木一人
ブルッキングス研究所東アジア政策研究センター(CEAP)所長	ソリス・ミレーヤ
中国社会科学院日本研究所長	楊伯江*
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授	服部倫卓

<コーディネーター>

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事

河合正弘

■ 農業・食料セッション「農産物貿易の将来展望と北東アジアへのインプリケーション」(15:45～17:45)

<パネリスト>

国際食糧政策研究所 (IFPRI) 主任研究員

マーティン・ウィル

株式会社農林中金総合研究所理事研究員

平澤明彦

中国人民大学教授

唐忠\*

香港貿易発展局日本首席代表

ヤウ・ベンジャミン

アクセンチュア株式会社シニアマネジャー

小栗史也

<コーディネーター>

ERINA 調査研究部長・主任研究員

新井洋史

■ クロージング・リマーク (17:45～18:00)

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事

河合正弘

■ 第2日目

開催日：2022年12月16日(金)

開催方式：会場、オンライン(同時 Web 配信)

会場：朱鷺メッセ4階マリンホール

使用言語：2カ国語(日英)同時通訳

■ 開会挨拶(10:30～10:35)

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事

河合正弘

■ 第4回 Future Leaders Program (FLP) (10:35～12:00)

—北東アジア地域の未来シナリオ—

■ エネルギー・環境セッション「共に目指すカーボンニュートラルの実現」(13:30～15:30)

<パネリスト>

アグラ・エナギーヴェンデ欧州エネルギー政策統括部長

ブック・マティアス\*

モンゴル環境観光省気候変動研究協力センター主席科学顧問

バトジャルガル・ザンバ

ソウル大学校客員教授、UNFCCC パリ協定第6条4項監督委員

呉大均(オ・デギョン)

欧州森林研究所主席科学研究員

サフォーノフ・ゲオルギー\*

一般社団法人海外環境協力センター(OECC)研究員

渡辺潤

長岡技術科学大学大学院情報・経営システム系教授

李志東

<コーディネーター>

ERINA 調査研究部主任研究員

エンクバヤル・シャグダル

■ FLP 表彰式(15:45～16:15)

■ 総括講演(16:15～17:00)

「分断が進む世界経済—北東アジア地域の課題と展望」

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事

河合正弘

\*オンライン参加

本稿は、「2022年度北東アジア経済発展国際会議イン新潟」の内容を当日の録音および資料をもとにまとめたもので、文責は ERINA にある。関係各国名は中華人民共和国を中国、朝鮮民主主義人民共和国を北朝鮮、モンゴル国をモンゴル、大韓民国を韓国、ロシア連邦をロシアとそれぞれ表記した。



# FY2022 Northeast Asia International Conference for Economic Development (NICE) in Niigata

## Program

### “An Increasingly Divided Global Economy: In Search of Connections”

#### Organizers

NICE Executive Committee (Niigata Prefecture, City of Niigata, and ERINA)

#### Sponsors

Ministry of Foreign Affairs of Japan; Ministry of Economy, Trade and Industry;  
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism; Niigata University; Embassy of Mongolia in Japan;  
Korean Consulate in Niigata; Consulate-General of the People’s Republic of China in Niigata;  
KEIDANREN (Japan Business Federation); TOHOKU ECONOMIC FEDERATION;  
Federation of The Chambers of Commerce & Industry of Niigata Prefecture; Niigata Employer’s Association;  
Niigata Association of Corporate Executives; The League of Japan Sea Coastal Promotion; Niigata Industrial Creation Organization;  
JUNIOR CHAMBER INTERNATIONAL NIIGATA; Japan External Trade Organization;  
Japan Organization for Metals and Energy Security; THE INSTITUTE OF ENERGY ECONOMICS, JAPAN;  
Japan Coal Frontier Organization (JCOAL); Japan Association ROTOBO; Japan Bank for International Cooperation;  
Petroleum Association of Japan; Japan Project-Industry Council; Japanese Business Alliance for Smart Energy Worldwide;  
The Niigata Nippo; Niigata Bureau, The Mainichi Newspapers; Niigata Bureau, The Yomiuri Shimbun;  
Sankei Shimbun Co., Ltd. Niigata branch Office; The Asahi Shimbun Niigata General Bureau; Niigata Bureau, Nikkei Inc.;  
Kyodo News Niigata Bureau; JIJI PRESS Niigata bureau; Japan Broadcasting Corporation, Niigata Station;  
Broadcasting System of Niigata Inc.; NST Niigata Sogo Television, Co., Ltd.; Television Niigata Network Co., Ltd.;  
The Niigata Television Network 21, Inc.; NEW MEDIA CORPORATION; FM-NIIGATA 77.5; FM KENTO

#### Participants

A total of approximately 320 persons (inclusive of 30 persons from overseas: China, ROK, Mongolia, et al.)

## ■ Day 1

*Date: 1 December 2022 (Thursday)*

*Method: Hybrid (Combination of Real and Online delivery)*

*Venue: 4th Floor “Marine Hall”, Toki Messe (Niigata International Convention Center)*

*Languages: Simultaneous Interpretation in Japanese, English and Chinese*

#### □ Opening Addresses (JST 10:30 to 11:00)

Organizers’ Welcome Addresses

HANAZUMI Hideyo Governor of Niigata Prefecture

NAKAHARA Yaichi Mayor, City of Niigata

KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA

Guest Addresses

ISHIKAWA Wataru\* Director, Japan-Russia Economic Affairs Division, European Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs

KASHIWABARA Naoaki\* Principal Deputy Director, Northeast Asia Division, Trade Policy Bureau, Ministry of Economy, Trade and Industry

#### □ Special Address (JST 11:00 to 12:00)

“Japan’s Role in an Increasingly Divided World”

MIYAMOTO Yuji\* Chairperson, Miyamoto Institute of Asian Research; Former Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary to the People’s Republic of China

#### □ Economic Security Session “Can We Avoid Division of the Global Economy? — Economy and Security in Times of Crisis” (JST 13:30 to 15:30)

<Panelists>

SUZUKI Kazuto Professor, Graduate School of Public Policy, the University of Tokyo

SOLIS Mireya Director, Center for East Asia Policy Studies (CEAP), the Brookings Institution

- YANG Bojiang\* Director-General, Institute of Japanese Studies, Chinese Academy of Social Sciences (CASS)  
 HATTORI Michitaka Professor, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
- <Coordinator>  
 KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA
- Agriculture and Food Session “Outlook for Agricultural Trade and Implications for Northeast Asia” (JST 15:45 to 17:45)
- <Panelists>  
 MARTIN Will Senior Research Fellow, International Food Policy Research Institute (IFPRI)  
 HIRASAWA Akihiko Research Counselor, Norinchukin Research Institute Co., Ltd.  
 TANG Zhong\* Professor, Renmin University of China  
 YAU Benjamin Director, Japan, Hong Kong Trade Development Council (HKTDC)  
 OGURI Fumiya Senior Manager, Accenture Japan Ltd
- <Coordinator>  
 ARAI Hirofumi Director and Senior Research Fellow, Research Division, ERINA
- Closing Remarks (JST 17:45 to 18:00)  
 KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA

## ■ Day 2

*Date: 16 December 2022 (Friday)*

*Method: Hybrid (Combination of Real and Online delivery)*

*Venue: 4th Floor “Marine Hall”, Toki Messe (Niigata International Convention Center)*

*Languages: Simultaneous Interpretation in Japanese and English*

- Opening Address (JST 10:30 to 10:35)  
 KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA
- The 4th Future Leaders Program (FLP) (JST 10:35 to 12:00)  
 —Future Scenario of Northeast Asian Region—
- Energy and Environment Session “Together for Carbon Neutrality” (JST 13:30 to 15:30)
- <Panelists>  
 BUCK Matthias\* Director Europe, Agora Energiewende  
 BATJARGAL Zamba Chief Science Advisor, Climate Change Research and Cooperation Center, Ministry of Environment and Tourism of Mongolia  
 OH Daegyun Visiting Professor, Seoul National University;  
 Member, Supervisory Board of UNFCCC Paris Agreement Article 6.4  
 SAFONOV Georgy\* Principal Scientist, European Forest Institute  
 WATANABE Jun Researcher, Overseas Environmental Cooperation Center, Japan (OECC)  
 LI Zhidong Professor, Graduate School, Department of Information and Management Systems Engineering, Nagaoka University of Technology
- <Coordinator>  
 ENKHBAYAR Shagdar Senior Research Fellow, Research Division, ERINA
- FLP Awards Ceremony (JST 15:45 to 16:15)
- Closing Address  
 “The Increasingly Fragmented Global Economy: Challenges and Prospects for Northeast Asian Economies” (JST 16:15 to 17:00)  
 KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA

\*Online participant

## 〈特別講演〉

## 「分断が進む世界における日本の役割」

宮本アジア研究所代表 宮本雄二



本日の「分断が進む世界における日本の役割」というテーマは、日本と中国の関係を世界という大きな舞台から見なければ正確な日中関係は掴めない、というこれまでの私の論理的枠組みの説明にもなるかと思う。

## 1. 現行国際秩序は人類の叡智の結晶

### (1) 平和と発展を可能とした戦後国際秩序

現行の国際秩序は人類の叡智の結晶である。第2次大戦が終わる前からルーズベルト大統領は戦後の世界秩序はどうあるべきか、優秀な人材に政治、経済の各観点から検討を命じ、それを踏まえていわゆる「戦後国際秩序」というものを打ち出した。その前提となったのは第1次・第2次世界大戦からもたらされた人類の壮絶なる悲惨な結果をくり返してはならない、すなわち、戦争を二度と起こしてはならず、経済は持続的に発展できるような国際関係を作らなければならない、という明確な意思でありそれを基に作り上げたのが戦後国際秩序である。

それまでの基本は強者が勝つ、強者が全部取る、まさにジャングルの掟であった。これを、そうではないように変えることによりやく成功したというのが、第2次世界大戦後の秩序だ。

実は、類似の試みはヨーロッパにおいて、第1次大戦後に行われたがこれは失敗した。その失敗をもたらした張本人の一人が日本であったという現実、我々は深く反省する必要があると思う。

### (2) 平和と発展を担う仕組みの構築

国連という新たな組織を作り、平和を担わせようとした。しかし、米ソ冷戦が戦後、直ちに始まったため、それを前提としていた国連のメカニズムが効かなくなった。そのため、基本的な平和そのものは、米国の同盟関係及びソ連の同盟関係の併存

というかたちで担われた。そして冷戦は終わる。ただし、国連の活動は正当に評価されるべきだと思う。国連があるおかげで、何が正しくて何が正しくないかを世界が一致して示す場がある。今回のロシアのウクライナ侵攻もまさに、国連がそれに対して「ノー」を出す、すなわち、世界の世論がどこにあるかということを示す、極めて貴重な場を提供したし、平和維持活動で国連が果たした役割というのは、比較にならないくらい大きい。それ以外にも人道援助も含め、国連の関係諸機関が世界の平和と人類の福祉のために大きな役割を果たしているということは、認識すべきであろう。いわゆるブレトンウッズ体制によって自由な経済活動が担保された。戦前は自由な経済活動を制限したことによって、ドイツも日本もさらなる侵略に進んでいったという側面がある。従って、経済をそういうものにしてはいけない。資金の流れを安定させ、自由な貿易ができる体制を作る必要があるということで、ブレトンウッズ体制という戦後国際経済秩序ができあがった。

その国際経済が、東西冷戦が始まった時、ソ連圏とそれ以外のところが完全に分断していた。いわゆる開発途上国といわれる第三世界はどちらも貿易をしていたが、西側とソ連圏は完全に対立と分断しており、これが冷戦=対立と分断だ。それが終わることによって、西側主導の現行国際秩序が、旧ソ連圏も含めてあまねく世界を覆った。真の意味での経済のグローバル化が実現し、その結果世界は未曾有の発展を遂げている。それは平和があったからであり、それを支えたのは、実は米国の力であったという現実を認識しておく必要がある。

### (3) 東西冷戦構造の終焉と現行国際秩序の普遍化

こうして、現在の国際秩序は全世界に及んだ。だが現在、大きな挑戦を受けている。その最大のものが中国から来る。

1972年に米中の関係改善があり、それは日本と中国の国交正常化につながっていく。それがアジアにおける東西の冷戦構造を無くし、平和を実現し、経済の自由な動きが実現した。そのことにより、アジアの奇跡の発展となり、中国の発展となり、いまやインドの発展となっている。何よりも平和を確実にすることによってしか、国際社会は発展することができない。そのために、現在の国際秩序がいかに重要か、いかに重要な役割を果たしているかということ、を、まずは理解して頂きたい。

## 2. 現行国際秩序は深刻な挑戦に直面

### (1) 経済のグローバル化に対する挑戦

経済のグローバル化は国際社会から厳しい批判を受けている。グローバル化をやったから移民が増えた、仕事が奪われた、という声が増えてきたが、この議論は通らない。それはグローバル化の結果というよりは、各国の政策の問題であり、グローバル化の意義にかわりはなく、その評価を憂えてはいけない。だが経済安全保障がもたらすデカップリング作用が経済の分断の方向にますます大きな影響を与えている。

経済、軍事安全保障、政治外交という国際関係の柱があるが、それぞれの正しい論点を調和シトータルで考えなければならないと思っている。

安全保障のためにやるべきことはやるといふ議論に反対するつもりはない。しかし、安全保障は常に相手を過大評価することになる。自分のわからない部分はすべて、最悪のシナリオを想定し、それに従って対応しようとする。常に相手を過大評価することになり、その対抗措置も同じようなロジックで作られるので、受けたほうは自分に対する脅威の増大と考える。すなわち、軍拡競争が始まる。軍拡競争が始まると、人類の歴史では、ほぼ例外なく戦争で終

わっている。今日の世界において軍事力の基礎は実は経済であり、軍事力も経済も科学技術によって支えられているというのは自明の理だ。ある意味、科学技術を軍事安全保障の世界から切り離せないが、これを管理することによって、科学技術がある意味で軍事安全保障に対し中立化することも考えて、真剣に管理をしないと、この軍事安全保障の配慮がますます経済に影響を及ぼし、経済のロジックが働かない世界が広まってくのではないかと憂慮する。グローバリゼーションは経済のロジックで出来上がったものなので、経済のためにはこれは続けていかざるを得ない。しかし、安全保障の問題があるということで、これまでのものをバージョン1とすると、有識者にグローバリゼーションの基本は維持して軍事安全保障、サプライチェーンの問題などをうまく包括した形でのグローバリゼーションバージョン2をぜひ考えていただきたいと思っている。

## (2) 世界平和に対する挑戦

政治の分野では世界平和に対する挑戦が起こっている。ロシアのウクライナ侵攻は現行国際秩序に対する重大な挑戦だ。もちろん、ロシアにも言い分はある。すなわち NATO の東方拡大はソ連崩壊直後からロシアにとって最大の安全保障の問題だった。それがロシアに不利に展開しているということでロシアが挽回しようとするのは、動機として理解できるが、しかしながら、国際連合安全保障理事会の常任理事国であるロシアが国際連合憲章に書いてあることを明々白々侵犯するということは、重大な、現行国際秩序に対する挑戦以外の何ものでもない。従って、国際社会が現行国際秩序を守るための行動は基本的に正しいし、続けていかざるを得ないと思う。

もう一つの世界平和、現行国際秩序に対する挑戦は中国の台頭であることは間違いない。すなわち、中国がここまで台頭してきて自分たちの主張を貫くようになり、その主張がこれまで我々が考え想定していた現行国際秩序の考え方に対して異論を唱えているという意味で、これは間違いなく現行国際秩序に対する挑戦になっている。しかもロシアのウクライナ侵攻を中

国が支持したと受け取られて、中口対西側という冷戦構造の復活が議論されるようになった。しかしながらそれは、時期尚早だろう。西側が主導する現行国際秩序があり、中口がそれに対する対抗勢力だと認識されていることは事実だ。よく、第三世界、グローバルサウスといわれるが、ここは基本的に自分たちの立場を明確にするということではなくそれぞれの二国間関係、それぞれの国の利益を踏まえて、西側、あるいは中口の立場を支持したりしなかったりという状況だと思うので、基本的対立構造は西側対中口だ。

この西側とは、欧米と日本（+カナダ、豪州、韓国）だ。しかし、ここに参加している欧州は東西冷戦、米ソ冷戦の時の旧東欧とソ連の一部だった国々も参加している。したがって、この西側は東西冷戦の時代よりもはるかに強い大きな西側になっている。そしてこの西側が一つになると、経済圏は中口の3倍以上であろう。そうなると、実は国際秩序が大丈夫なのかと心配する議論の前提として、西側はこれだけ強くなっているものであり、西側の団結さえ維持できれば、中口の挑戦に対して我々は十分対抗できるという自信を持つべきであろう。

中口は一枚岩ではない。ロシアは現行国際秩序に挑戦しているだけであり、それに代わるものも理念も何も出していない。それらしきものを出しているのは中国だけだ。

## 3. 中国の台頭は現行国際秩序に何をもたらすのか？

### (1) 中国は変化、変革のプロセスの真ただ中にある！

「中国は100年計画をもって世界を制覇しようとしている」(M. ピルズベリー『China 2049- 世界覇権100年戦略』) というが、果たしてそうなのか？ 現実には、そういう100年戦略を考えるような余裕は中国にはなかった。それを考える余裕ができたのは、習近平になってからだ。習近平は2049年の建国100周年を念頭に置いて、2035年まで、2050年までにどうするか、中国共産党の決定として米国を抜きたいと思いついた。具体的計画を打ち出した。しかし、我々が考えておくべきことは、中国が新たな問

題や現実と直面したら、対米関係も含めてまた変えてくるということだ。中国は変革する力を持っている。これが中国共産党の最大の力である。中国は1978年の改革開放以来、ガバナンスに「改革」が組み込まれている。中国が変わらないという前提に立つと、中国側が米国の圧力に屈し妥協するか、あるいは対立を続けて分断するかを選択肢しかなくなる。逆に言うと、中国をそこに追い込むことになるので、この政策は二重の意味で間違っている。

習近平が2012年に政権を取り、新しい中国を始めた。それは鄧小平式改革開放政策が一つの大きなボトルネックに到達していた時だ。経済はうまくいったが、中国共産党のガバナンスにおいて大きな問題を残していた。一つは腐敗、もう一つはガバナンスの非効率性。さらに、鄧小平は経済発展のことは言ったが、経済発展後の中国をどうすべきかについては何も語らなかった。そういうものを埋めるために、習近平は権力を自分に集中し、腐敗を打破し、新たなガバナンスのシステムを今、創り出し、その拠り所としての習近平思想を打ち出していった。これはある意味、党に対する時代の要請であった。権力を重視し、管理を重視し、上からの締め付けを強化するというやり方を今、やっている。

### (2) 中国は現行国際秩序の擁護者であり破壊者ではない！

中国は現在の国際秩序に残るということはずっと決めていた。一時期動揺がなかったとは言わないが、中国共産党の公式の決議においては国際秩序を破壊することは一度も出ていないし、基本的には国際秩序を擁護することで一貫している。習近平は今回の党大会で国際秩序の擁護を全面的に打ち出した。それは考えてみれば当然で、中国が今日まで発展し、豊かになり、国際的な地位と影響力を強めたのは、現行国際秩序のおかげだ。その中国が現行国際秩序を破壊すること自体が論理的に成り立たない。

現行国際秩序を支えている理念と原則。それを支えるたくさんのルール、仕組。これに代わるものを人類はまだ誰も思いついていない。ましてや中国。私は、水平線の彼方にも、現行国際秩序に代わる

ものは見えてきていないと思っている。やりたくても中国にできるはずがない。よって、まず壊す利益がない。やりたくてもやる力もない。そういう状況なので、自然の結論として現行国際秩序を受け入れる。

しかしながら、自分に都合のいいように変えていこうとしている。したがって、中国は現行国際秩序を前提として、その改善と強化を中国に有利な形で進めていくという一連の結論に達する。これを習近平総書記は次のように総括している。すなわち、国際政治秩序に関しては、国連を中心とする国際システム、国際法を基礎とする国際秩序および国連憲章の趣旨と原則を基礎とする国際関係の基本ルールを護持。同時に、中国の価値観や提案を取り入れることで、秩序自体の民主化と公正化を実現することを要求。これが、現在の中国の立場だ。

### (3) 中国に改めるべきことが多々あることも事実

中国が西洋文明とがっぶり四つに組んだのは1978年、正確には1979年以降だ。従って、中国社会における西洋文明の理解はまだ浅い。西洋の考え方を正確に理解できてない。どういふふうな話し方をすれば西洋の人がそれを受け入れるかもわかってないので、自分の考え方を自分のロジックで世界に発信しているのが、中国の現状だ。中国人は必死になって世界のことを学び、世界の人が分かるロジックと言葉で説明することを一刻も早く身につけないと、中国の主張は引き続き西側から理解されないし、西側の主張も引き続き正確に理解できないという状況が続くだろう。われわれからは中国の言動と、現場での行動が一致していない。そのギャップを埋める努力をしない限り、中国の言うことは西側主導の世界から信用されない。信用されなければ、中国の影響力も発信力も強くはないと言いつけるべきだ。

中国と近隣諸国をはじめとする国際社

会、特に西側との関係悪化の最大の要因は、軍事力の急速な増強にある。それに対する十分な説明を中国は一度もしていない。透明性が欠落している。最近に至っては、「大国はそれにふさわしい軍事力を持つのが当然だ」という理屈だ。したがって中国が米国の経済レベルに到達すれば、米国と同じ軍事力を持つのは当然だということになる。このロジックだと、中国の軍事力は間違いなく脅威と認識されてしまう。その結果、中国への不信心、疑念がたまっているのは事実だ。

### 4. 現行国際秩序の護持と強化のために日本がなすべきこと

中国は現行国際秩序の護持、強化を図るということを表明している。もちろん、それが中国の有利な形になるようにする、ということであろう。ただ、それは当たり前のことだ。

世界中のすべての国が現行国際秩序について自国に有利になるようにするというのはすべての国が考えることだ。中国がそう考えても何の不思議もない。ただ現行国際秩序を護持し、それを改善強化するという抽象的な目的が一致していれば、それはそれで国際社会の協働は始められる。そのための努力を日中は始めるべき時に来たと思える。そして、日中が現行国際秩序を護持し、強化するための共同作業に入る。この作業には当然、米国、欧州、ASEANも入れなければいけない。しかし、まず日中でやってもいいと私は思う。そうすることで現行国際秩序の理念と原則をしっかりと確認しながら、より現実にあった、より効果のあるより大きな役割を果たせる現行国際秩序に変えていくべきであろう。

この世界の分断が進む中で日本が果たすべき役割のもう一つは、先ほど西側対中口と申し上げたが、西側の団結が今ほど必要な時はない。逆に、団結をしていけば、西側主導で現行国際秩序をさらに維

持し強化していくことは可能だ。そのプロセスの中に中国を入れていく。もちろん中国の言うことも聞かなければならない。しかし、中国の方がより多く我々の言うことを聞くことになるだろうと思う。いずれにせよ、そのような努力が必要だ。

その中核はG7であり、その中で日本は積極的に現行国際秩序を断固として護持し、いかにしたら強化できるか不断のアイデアを出し続けることをしなければならぬ。それを西側の意見とし、その上で中国とも話し、そうすることで世界がより大きな方向で進んでいく、そういう時代を作ることが可能ではないだろうか。

それは日本のソフトパワーの強化だ。日本と中国の物理的な国力はますます差がついてくる。そういうなかで日本の存在感、影響力を保持する唯一無二の方法がこのソフトパワーの強化だと思っている。従って、この大きなソフトパワーを堅持するために、日本社会として知恵を出す仕組みを作らなければいけないと思う。それは、外交力だ。私は、外交のソフトパワーも非常に重要になったと強く自覚している。この外交とは外務省の外交ではない。日本国の外交である。日本国が全体としてそういう重厚な力強い外交をできるような体制に、ぜひなってほしい。このような体制になれば、日本は長期にわたり存在感を維持できる。

中国の観光客が多く日本を訪れ、中国人は日本社会の平和で安定した安心できる生活に感動して帰っていく。高い文化水準を体現した日本社会に自分たちの将来の夢を結び付けているのだ。そこには日本社会への敬意が生まれる。それは間違いなく日本のソフトパワーだ。このソフトパワーの強化に力を注ぐべきだと思う。

世界の分断を避けるために、場合によっては中国と力強く手を組んで、国際社会に大きな地歩を築く、これが今後の日本のあるべき姿だと思う。

## 〈経済安全保障セッション〉 「世界経済の分断は回避できるか？—危機の時代の経済と安全保障」

米国でのトランプ政権発足などを契機として、世界経済は米中の戦略的競争を軸に分断の時代を迎えようとしていた。さらに、新型コロナウイルスの感染拡大も人と人の国際交流を大きく制限し、世界やアジア地域のサプライチェーンの機能を低下させていた。そこに2022年2月のロシアによるウクライナへの軍事侵攻開始が加わったことで、西側の安全保障上の危機が高まり、ロシアに対する西側の経済・金融制裁は米中競争とは異なる切り口で世界経済を分裂させる事態を生じさせている。

このように、今回のNICEは、経済安全保障の確保が各国の重要な政策課題となっている中で開催された。そこで、本セッションでは、①米中の戦略的競争とサプライチェーンのデカップリングの可能性、②ロシアのウクライナへの軍事侵攻と米欧日による対ロシア経済・金融制裁、③主要国の経済安全保障政策の3つの論点に焦点を当てつつ、いかにすれば世界経済の分断を回避できるかについて議論を深めることを目指した。

セッションの進行は、まず日米中から招いた計4名の専門家からそれぞれ10分程度の発言をいただき、引き続いてコーディネーターを務めた河合正弘(NICE 実行委員長・ERINA 代表理事・所長)から各パネリストに質問を投げかける形でディスカッションを行った。最後に、オンライン参加者も交えたフロアとの質疑応答を行った。以下、順を追って発言のポイントをまとめていくこととする。

一巡目の報告の最初に登壇したのは、鈴木一人東京大学公共政策大学院教授である。「経済安全保障がもたらす新たな秩序」と題した発言の中で、経済安保とは、経済的合理性と戦略的合理性のバランスや強弱を巡る問題であるとの考え方を示したうえで、そこでは経済合理性で動く企業の論理と戦略的合理性を考える政府の論理が必ずしも合致しないことを指摘した。また、2022年10月に米国が導入した、中国向け半導体輸出規制の事例を取り上げながら、米国と中国が相互依存の関係を認識しつつも、特定の分野に限って

規制を導入する形になっているとの現状認識を披露した。

次に、米国のブルッキングス研究所東アジア政策研究センター(CEAP)所長のソリース・ミレヤ氏が「米中の戦略的競争—アジアの地経学への含意」というテーマで、主に米国の政策の考え方を紹介する報告を行った。ソリース氏の現状認識は、鈴木氏のそれに近いものであった。具体的には、最近の米国の政策は、経済と国家安全保障の両面を考慮したものになってきていること、中国との間での完全なデカップリングを目指してはいないことなどを指摘した。また、米国が主導するインド太平洋経済枠組(IPEF)は、中国との競争を意識して経済連携を強化しようとするものであるが、市場開放措置が無いといった限界があるとの指摘もなされた。

三番目の発言者は、オンライン参加した楊伯江中国社会科学院日本研究所長で、「ハイレベルな対外開放による質の高い発展の促進」と題して、中国政府の方針及び日中間を中心とする中国の国際経済関係の現状を説明した。2022年10月の中国共産党第20回全国代表大会では、「中国式現代化」を実現して経済と社会の「質の高い発展」を推進するため、安定的成長、バランスの取れた発展、イノベーション型駆動を実現するといった方針が示された。経済安全保障リスクは様々なものの、2022年の主要貿易相手国との貿易額は軒並み増加している。唯一、日本との貿易は減少しているが、ヘルスケア産業やRCEP枠内での協力、第三国市場での協力など、日中間の協力には有望分野があることに期待を表明した。

一巡目の最後に、服部倫卓北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授が「制裁下のロシアの貿易パフォーマンス」について、自らの評価を発表した。前半では、ロシアが公式の貿易統計の公表を停止しているなかで、独自集計したデータに基づき、中国、インド、トルコ、カザフスタンなど特定の国々と、特定の分野での貿易が増加している状況を説明した。ロシア経済の今後について、短期的には持ちこ

たえることができるだろうが、長期的には厳しいとの見通しを示した。

以上の各パネリストからの発言の後、コーディネーターとの間で質疑応答が行われた。

鈴木氏に対する河合コーディネーターの質問の1点目は、経済安全保障上、同盟国や友好国に対しても過度に依存しない方が良いのかというものであった。これに対して鈴木氏は、画一的な正解は無く、リスクの大小を考慮しながら総合的に判断すべきものだと言った。2点目の論点は、米国が導入した先端の半導体の輸出管理措置であり、輸出管理が半導体以外の技術にも広がる可能性があるかという質問に対し、その可能性はあるが、無制限に広がるわけではなく、安全保障に直結するものに限られるだろうとの見通しを示した。

ソリース氏に対しては、米国が導入した輸出管理政策は米国が一方的に実施しているように見えるが、同盟国、友好国と一緒に考えた方が有効ではないかとの問題提起をした。これに対してソリース氏は、複数国での輸出管理には難しさもあるものの、効果が大きいという点について同意した。その上で、今回の措置に関し、米国は同盟国との間で数か月間にわたって情報共有してきたので、それらの国々の側に驚きはなかったはずだと説明した。もう1点、IPEFの性格も議論の対象となった。河合コーディネーターは、楊氏が「IPEFは経済的な道具ではなく、政治的な道具ではないか」といった発言をしたことを引き合いに、ソリース氏の考え方を尋ねた。これに対してソリース氏は、そもそも自由貿易協定(FTA)など経済連携に関わる枠組みは政治的でも経済的でもあると答えたうえで、IPEFを通じて女性や若者の人材育成などが実現していくことなどに期待を示した。

楊氏に対しても2点の質問があった。最初の質問は、中国は2050年ころに向けて、どのような国際経済秩序を目指しているのかという根本的な問いであった。楊氏は一言で表現するのは難しいとしつつも、備

えるべき特徴をいくつか指摘した。例えば、公平で平等な形で各国が協議しながら共同で構築すべきものであることや先進的な理念を持つ必要があることなどを挙げた。もう一つの質問は、足もとのゼロコロナ政策の見通しを尋ねるもので、楊氏の説明は、現在の政策は正しくは「ダイナミック・ゼロコロナ」政策、すなわち動的なプロセスを経てゼロを目指すものであって、中国の現状に合わせた柔軟な政策が採られているというものであった。

服部氏に対する質問も、楊氏に対する1点目の質問と同様で、ロシアはどのような国際経済秩序を目指している、どのような役割を果たしたいのかというものであった。これに対して、服部氏は、ロシアが世界的覇権は狙っていないことは明らかだと回答した。プーチン大統領が目指しているのは、安保理常任理事国にEUを加えたくらいのメンバーがそれぞれ極となるような「多極世界」であり、ロシアはその一極を占めつつ自らの勢力圏を持つという構造だと説明した。

その後、オンライン参加者を含めたフロアの質疑応答があった。ソリス氏は自身への質問に答える形で、米国の対中追加関税が解除されなかったのは政治的な要因によると考えられることや、最近の米国のオンショアリング志向の政策はインフレ抑制に逆行するだろうとの見通しを示した。また、服部氏は日ロ貿易の展望についての質問に対し、レピュテーションリスクを考慮する大企業とは異なり、新潟などの地方を含めた中小企業はニッチビジネスを続けるだろうと回答した。また、米中対立のはざまにあるASEAN、韓国、日本などの立場に関する質問で、楊氏は中国は、周辺諸国が米中間で自国の利益を維持するためにバランスをとる考えであることを理解していると答え、ソリス氏は建設的な競争とゼロサム的な競争のバランスの問題だと指摘し、鈴木氏はASEANは米中競争の中でしたたかに両方から利益を得ようとしているという見方を示した。最後に、米国の半導体輸出規制が中国などの技術

開発を促進する可能性について、楊氏はその可能性を認め、そのことは米国にとっても世界的にも良くないとの意見を述べ、鈴木氏は米国は中国の勢いを止めて技術的ギャップを詰められないことを主眼に置いているのだと解説した。

これらの議論を踏まえ、最後に河合コーディネーターが自ら着目した点を提示した。技術開発の面では、米国は西側諸国と共に中国の技術発展を抑えつつ、自らの技術力を高めていくことが重要である。また、経済安全保障政策を展開する際に、規制的措置の対象を狭く限定することで、世界経済の落ち込みを避けていくことも重要である。例えば、インドやASEANなどのいわゆる中立国が、中国やロシアとも、また日本や米国とも取引をすることで、開かれた世界経済の秩序を管理していくことが必要だとの考え方が示された。

(ERINA 調査研究部長・主任研究員  
新井洋史)

## 〈農業・食料セッション〉 「農産物貿易の将来展望と北東アジアへのインプリケーション」

世界の急速な人口増加や地球温暖化による異常気象の多発が危惧される中、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大とロシアのウクライナへの軍事侵攻により、食料安全保障と食料価格の高騰を巡る国際環境は不透明性を増している。そこで、安定的な食料供給確保、農産物貿易の円滑化、農産物価格の安定化がグローバルな課題になっている。

これらの背景を踏まえ、農業・食料セッション「農産物貿易の将来展望と北東アジアへのインプリケーション」では、北東アジア地域の農業や食品関連産業の発展に資することを目的とし、国内外の関連分野の専門家が集まり、世界全体と北東アジア各国の農業、食料需給の変化、農産物貿易の構造、農産物の価格変動などに関する現状認識と将来展望を議論した。

本セッションでは、日米中の5名の専門家からそれぞれ15分程の発言をいただき、引き続きコーディネーター新井洋史 (ERINA 調査研究部長・主任研究員)

から各パネリストに質問を投げかける形でディスカッションを行った。以下、順を追って発言のポイントをまとめていくこととする。

最初に登壇した国際食糧政策研究所 (IFPRI) 主任研究員のマーティン・ウィル氏は「世界小麦市場に対する価格保持 (政策) の影響」というテーマで、新型コロナウイルスの感染拡大とロシアによるウクライナへの軍事侵攻がもたらした小麦価格の高騰を考察しながら、それに伴い各国がとった国内小麦の価格保持政策 (price insulation) が世界の小麦市場に与えた影響について議論した。マーティン氏の研究では、様々な政治的および経済的要因により、多くの国が国内小麦市場の価格を国際価格の変動から切り離していること、そしてこの価格保持政策が、新型コロナウイルスの感染拡大とロシアのウクライナへの軍事侵攻によって引き起こされた世界小麦価格の上昇の影響を拡大していることが明らかにされた。

次に、株式会社農林中金総合研究所理事研究員の平澤明彦氏は「日本の食

料輸入依存と食料安全保障」をテーマに、日本の農業の基礎的条件、食料安全保障施策と農業発展の課題について議論した。平澤氏は農地不足が日本の農産物国際競争力低下と大規模な食料輸入の根本的要因であることを指摘した。更に、日本の低食料自給率の背後にある農業発展の歴史的变化を体系的に解説し、国内外情勢が変化中、日本とヨーロッパ諸国の食料安全保障施策を比較しながら、国内生産基盤の維持と農産物の品目転換促進が日本の農業発展と食料安全保障の最重要課題であると結論づけた。

三番目の中国人民大学教授の唐忠氏は「2000～2021年における中国の農産物貿易」と題して、中国の経済発展と国内の食料需要、農産物貿易、国際農産物貿易ルールの不合理などを議論した。唐氏は中国の農産物生産は急速に増加しているものの、人口増加等により需要量の増加が生産量を上回り、中国は農産物純輸出大国から農産物純輸入大国になり

つつあるため、より大きな農業国際企業を擁して、農産物輸入を確保する必要性を指摘した。また、唐氏は既存の国際貿易ルールの不合理について議論し、大関関係の安定が国際農産物貿易の安定した発展を確保するための重要な要素であると主張した。

四番目に、香港貿易発展局日本首席代表ヤウ・ベンジャミン氏は「農産物の貿易の展望と北東アジアへの含意—日本産農産物の主要輸出先としての香港の事例」をテーマに、香港の経済的特徴と日本の農産物輸出の変化を考察しつつ、香港が日本の農産物、特にコメの主要な輸出先であることを指摘した。ヤウ氏は新潟米など多くの具体例を挙げながら、香港の人々の日本への愛情が、日本の農産物を香港消費市場で非常に魅力的にしていることと説明した。また、ヤウ氏は香港が持つ大湾区のハブとしての物流優位性を活かし、農産物貿易を含む越境EC（eコマース）の拡大が期待できることを強調した。

最後に、アクセンチュア株式会社シニアマネジャーの小栗史也氏は「国際的な食糧需給を見据えた日本 / 新潟からの農産物輸出の可能性」というテーマで、国際農産物市場、特にアジア市場を調査し、大・小ロット両輪による輸出拡大を提案した。小栗氏は鹿児島県の大吉農園のキャベツ輸出を例として、輸出における“チームづくり”の重要性を指摘した。また、小栗氏はコメ輸出拡大に向けた戦略コンセプトを分析し、“コメ+a”のセット輸出の提案しつつ新潟港の輸出利用可能性などを提示した。

各パネリストからの発言に続くQ & Aの段階で、各パネリストと新井コーディネーターとの間で質疑応答が行われた。コーディネーターは、マーティン氏の報告の中で、小麦など他の穀物と比べたコメ価格の安定が示されていたことから、「コメ」を

キーワードとして、主に2つの側面から質問をした。一つ目は、コメに対する小麦の相対価格が高い状態が中長期的に続く場合、小麦からコメへの消費シフトが起こる可能性について、マーティン氏、小栗氏、ヤウ氏に質問した。二つ目は、コメに対する相対的な小麦価格の上昇が日本、中国の食料自給率に与えるインパクトについて平澤氏と唐氏に質問した。

一つ目の質問に対して、マーティン氏は消費には慣性があるので短期的なシフトは考えにくい、世界的な穀物在庫量や生産量と価格との相互作用の中で、コメと小麦の価格差が長期的に続く場合には、小麦からコメへの消費シフトの可能性があるかと答えた。小栗氏は、米粉から作ったパンや麺などの事例を挙げて、コメと小麦の価格差の影響で海外穀物消費市場の構造転換の可能性があるかと主張した。ヤウ氏は米の加工品の開発や輸出は市場構造の転換を促すための有利な手段となり得ると認めたが、日本産米などの加工品の海外輸出拡大は価格競争力があるかどうか重要な前提となることも指摘した。

二つ目の質問に対して、平澤氏は穀物の相対的な価格変動によってコメの消費量が上がれば、確かに日本の食料自給率は上がるが、ヨーロッパを例にあげつつ、主食を小麦からコメに変えるのは短期的には難しいとの考えを示した。唐氏は所得分配別のグループの観点から、小麦価格の上昇にもかかわらず、短期的に主食の構造を変更することは非常に困難だと指摘した。更に、一国の食料自給率、すなわち食料輸出入の状態は、主にその国の一人当たり農地によって決定されるため、穀物相対的価格の変動は中国の食料自給率を根本的に変えることはないかと主張した。

その後、フロアとの質疑応答があった。NICE 実行委員長・ERINA 代表理事の

河合正弘は、マーティン氏に対して各国の国内小麦価格維持政策が世界小麦市場の需給に及ぼす影響について、また、唐氏に対して国際農産物貿易ルールの不合理が中国の食料安全保障に及ぼす影響について質問した。これに対して、マーティン氏は各国の国内小麦の価格維持政策が実際にゼロサムゲームであることを指摘した。つまり、一国の価格維持政策はその商品の国内消費と輸入を拡大し、それによって国際市場価格を高め、他の国の消費を減少させる可能性が高くなる。唐氏は既存の不合理な国際農産物貿易ルールにより、農業生産を刺激する手段が制限され、それによって中国の食料安全保障に負の影響を与えていると主張した。新潟の食品製造加工業の蔡聖錫氏は蒲鉾を例として、新潟産の農林水産物の中国などへの輸出制限について質問した。小栗氏は新潟県産品の輸出規制は国や市場によって異なるが、長期的な見通しは悪くないと解説した。

各パネリストからの発言と質疑応答を踏まえ、最後にコーディネーターが要点をまとめた。食料安全保障が重要な課題となり、食料価格が高騰する国際環境の中、日本産・新潟県産コメの海外市場拡大の可能性について触れ、理論的には小麦価格が上がり、コメ価格が安定していれば、小麦からコメへの消費シフトが起こることが予想されるものの、現実には様々な原因で短期的に主食消費構造の転換は難しいという形で一連の議論を総括した。今回の「農業・食料セッション」の発言と議論を通じて、開催地・新潟を含む北東アジア各地域への地域農業振興、食料安全保障、国際食料貿易に有益なインプリケーションが得られたものと考えられる。

(ERINA 調査研究部研究員  
董琪)

## 〈エネルギー・環境セッション〉 「共に目指すカーボンニュートラルの実現」

国連気候変動枠組条約 (UNFCCC) のパリ協定は、世界の平均気温の上昇を産業革命以前と比べて2℃未満、できれば1.5℃未満に抑えるという目標を掲げ

ており、各国はこの世界的な取り組みに対し、「国が決定する貢献 (NDC)」を設定している。ほとんどの国が以前よりも高い目標を掲げているものの、2030年の

世界総排出量は、本来ならば43%の削減が必要とされているところ、2019年比でわずか0.3%の減少となる見込みである。また、歴史を遡ってこれまで大気中



に蓄積された排出量を踏まえ、いかなる水準であれ、地球温暖化を食い止めるためには、今世紀半ばまでにネットゼロを達成することが必須条件となっている。したがって、より野心的なNDCを策定すると同時に、一国だけでは限界があるため、国際的協力が不可欠となる。そこで、このセッションの標題を、「Together for Carbon Neutrality (共に目指すカーボンニュートラルの実現)」とした。

ソウル大学校客員教授の呉大均(オ・デギョン)氏は、パリ協定と炭素市場の協調的取り組みについて発表した。呉氏は、気候変動に関する国際協力におけるUNFCCCの「共通だが差異のある責任」の重要性に触れ、京都議定書の柔軟な制度は、温室効果ガス(GHG)排出削減における先進国の負担を軽減し、市場制度の活用と途上国との協力、世界統一炭素市場の設立を意図したものであったと強調した。しかし、現実には、炭素市場は域内・国内市場という形をとった。最初の域内炭素市場は欧州排出権取引制度で、すでにEUの温室効果ガス総排出量の約45%をカバーしている。韓国は2015年から全国規模で炭素市場を運営し、国の温室効果ガス排出量の70%をカバーしている。

呉氏は、パリ協定と京都議定書の特徴は異なるものの、パリ協定のさらなる協調的取り組みはクリーン開発メカニズム(CDM)の経験が基になっていることを指摘した。北東アジアには、異なるNDC目標、政策、炭素価格レベル、既に構築された経済関係を活用して、GHG排出削減プロジェクトをさらに拡大させていく可能性が存在する。さらに、地理的に近く、経済的に結びつきの強い北東アジアで自主的に炭素市場を拡大していくことも、カーボンニュートラルに向けた協力領域である。自主的な炭素市場は急成長しており、各国のNDCがカバーしていない領域で重要な役割を果たす可能性がある。

モンゴル環境観光省気候変動研究協力センター主席科学顧問のバトジャルガル・ザンバ氏は、モンゴルのGHGネットゼロ目標とその実現可能性について見解を述べた。エジプトで開催されたCOP27では、モンゴルの大統領が2050年のネット

ゼロ目標を初めて発表した。モンゴルはNDCにおける2030年の目標を控えめに設定しており、ネットゼロ目標の達成は極めて難しい。エネルギー部門と畜産業を中心とする農業部門は温室効果ガスの主な排出源となっている。しかし、国内のエネルギー生産は需要増に追いつかず、その一方で家畜の数は増え続けている。モンゴルの家畜は、重要な収入源であるだけでなく、地域社会にとって最も長く継続されてきた伝統的な生活に欠かせないものでもある。したがって、近い将来にこれらの部門からの大幅なGHG排出量削減は期待できず、ネットゼロ目標に貢献することは難しい。そのため、吸収源、GHGの除去、炭素貯留を促進することに現在注目が集まっている。

バトジャルガル氏は、北東アジアでのカーボンニュートラルに向けた協力において、モンゴルは積極的な役割を果たすことができると強調した。例えば、エネルギー送電網の統合や、発電と電力消費のバランス調整、グリーン水素の製造、林業などがある。モンゴルは最近、植生陸地面積が拡大し、地球温暖化に対する生態系の回復力が高まる相乗便益を期待し、2050年までに10億本の植樹を行う国家キャンペーンを開始した。バトジャルガル氏はさらに、モンゴルのネットゼロ目標の実現可能性の評価には複雑な科学的分析が必要であり、これをネットゼロ戦略やロードマップ策定の際の基準として使うべきであると指摘した。

一般社団法人海外環境協力センター研究員の渡辺潤氏は、カーボンニュートラルの実現に向けたパリ協定第6条に基づく日本の国際連携に関するイニシアチブについて報告した。渡辺氏は、パリ協定第6条4項はCDMの後継制度として中央管理型メカニズムを設定したが、実際の運用は2024年以降になる見込みであることに言及した。日本では第6条2項に基づくメカニズムのルールを検討中だが、2013年には自主的なメカニズムである二国間クレジット制度(JCM)の運用を開始済みである。スイスも同様の取り組みを行っている。このメカニズムは、途上国にとっては脱炭素技術やソリューションの導入、外部資金へのアクセス、相乗便益によるSDGs

達成への貢献などの利点をもたらす一方、先進国にとってはNDC目標の達成、脱炭素技術・ソリューションの海外展開を支援し、より費用対効果の高い気候変動緩和対策を行う手助けとなる。国際排出量取引協会の調査によると、パリ協定第6条を活用することで、NDCの達成に必要な費用を半減できる可能性がある。日本は現在、25カ国とJCMに協力しており、このメカニズムを通じて1億トンのGHG排出削減を目指すとともに、自国の努力で2030年までに46~50%削減することを目標としている。日本の環境省は、エネルギー効率と再生可能エネルギーに重点を置き、JCMプロジェクトに対して補助金制度を実施している。モンゴルでの6つのプロジェクトを含め、17カ国で200以上のJCMプロジェクトが既に承認されている。廃棄物管理や輸送部門でも取り組みが始まっている。さらに、渡辺氏は、最近開催されたCOP27で日本が立ち上げた「パリ協定6条実施パートナーシップ」について説明した。このパートナーシップは、情報共有や取組支援によるキャパシティビルディングとし、40カ国および23機関が参加を表明している。

欧州森林研究所主席科学研究所員のサフォーフ・ゲオルギー氏は、新しい地政学的状況におけるロシアの脱炭素化の道筋について見解を述べた。2021年に発表された国連環境計画(UNEP)の評価によれば、現在の気候政策のままでは、2050年の炭素排出量の2020年比の削減量は約10%となってしまう、その結果、66%の確率で2.7℃の温暖化がもたらされることになる。ネットゼロのシナリオ案でも2020~2050年で45%の排出量しか削減できず、66%の確率で2.2℃の温暖化がもたらされてしまう。したがって、現行の排出削減の道筋ではパリ協定目標を達成することはできない。大量排出してきた国々のさらに強力な取り組みが必要である。

ロシアは、2060年までのカーボンニュートラル達成を表明している。1990~2020年で52%の炭素排出量を削減したものの、2030年に向けた公約は、現状の水準より45%増加するという非常に貧弱なものである。このような時代遅れの目標は、ロシア政府が2021年に採択した「2050年

までの低炭素排出開発戦略」と矛盾している。サフォーノフ氏は、膨大なグリーンエネルギー資源の活用、ゼロエミッション輸送への切り替え、商用・住居用ビルのエネルギー効率の向上、木質系材料・製品の生産拡大など、ロシアが持つさまざまな可能性を強調した。ロシアにとって、2050年までに2010年比で80~90%の二酸化炭素排出量を削減することは実現可能であり、主に資本投資として年間GDPの1%程度の費用にとどまるであろう。

しかし、2022年2月以降の劇的な変化は、ロシアの気候政策と脱炭素化計画に全く異なる事情をもたらした。主要産業（石油・ガス、石炭、金属など）に対する国際的な制裁と関連部門（運輸、発電など）への影響は、経済活動を大きく低下させることにつながるであろう。経済発展省の悪化シナリオによると、2023年と2024年にロシアのGDPは11%以上縮小する可能性がある。専門家は、原油生産が50%以上、ロシアからの石炭輸出が47%、天然ガス輸出が40%減少するなどの損失が生じると予測している。こうした経済の混乱によって、今後数年間で国の温室効果ガス排出量は現状を20~30%下回り、2030年までにはこの水準で安定する可能性がある。さらに、サフォーノフ氏は、ロシアがパリ目標を実現するためにはグリーン・トランジションが必要不可欠であることを強調した。しかし、政治的・経済的環境の改善なくして、地球規模の気候変動危機の防止へ貢献することはできないであろう。

アグラ・エナジーヴェンデ欧州エネルギー政策統括部長のブック・マティアス氏は、欧州グリーンディールについて報告した。EUは2019年12月に、経済の近代化と革新を組み合わせ、遅くとも2050年までにカーボンニュートラルを達成するという政治的戦略を発表した。2020年9月には、EUは2030年までにGHG排出量を2015年比で55%削減させるという法的拘束力のある目標を設定し、同時に、エネルギーミックスにおいて再生可能エネルギーの割合を45%にするという目標を掲げた。2021~2027年の公共・民間投資額は890億ユーロに達する見込みである。ロシアのウクライナ侵攻の影響により化石燃料が値上がりしたことで、こうした移行は加速した。一方、カーボンプライシングの指標としての力はさらに強まっており、EUの炭素市場は既にこの地域のGHG総排出量の45%を占めている。

長岡技術科学大学大学院情報・経営システム系教授の李志東氏は「中国における脱炭素とエネルギー安定供給の両立に向けた取組みの動向と課題」と題して報告を行った。脱炭素とエネルギー安定供給の両立は世界全体の課題であり、中国も例外ではないことに触れ、中国の国際公約としての「3060目標」について説明した。

「3060目標」は、中国が二酸化炭素排出量を2030年までにピークアウトさせ、温室効果ガス排出量を2060年までに実質ゼロとする脱炭素目標を指す。これは、習

主席が2020年9月の国連総会で公表し、政府が2021年10月に国連に提出した長期低排出発展戦略で明記された目標である。注目すべきは、炭素排出ネットゼロの目標達成時期は先進国が目指す2050年より10年遅いものの、CO<sub>2</sub>ピークアウトからの期間が先進国よりも短く設定されていることや、2020年の自主行動計画目標を超過達成し、実現可能性が十分に考慮されていることである。さらに、脱炭素は中国の持続可能な発展にとっての内的要求であると認識し、「3060目標」を国際公約として位置付け、国家の威信を掛けて達成しなければならないとしている。

これらの5カ年目標を達成できたとして、国連に提出した2030年のNDC目標には、2026年以降の5年間、非化石エネルギー比率をさらに年間1ポイントずつ引き上げ、排出原単位を年率3.5%以上低減させる必要があることを明言したが、決して簡単ではない。この5カ年計画目標のうち、GDP当たりのエネルギー消費量とCO<sub>2</sub>排出原単位の削減、非化石エネルギー比率の上昇など、「拘束力のある目標」はいずれも達成されるであろう。

さらに、李氏は、最近の異常気象による中国の石炭火力発電への回帰は一時的であり、安定供給と脱炭素に関する2025年の計画目標は達成可能であると考えていることを強調した。

(ERINA 調査研究部主任研究員  
エンクバヤル・シャグダル)

## 〈総括講演〉

## 「分断が進む世界経済—北東アジア地域の課題と展望」

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事 河合正弘



「2022年度北東アジア経済発展国際会議（NICE）イン新潟」の特別講演とそれに続くセッションを踏まえて、北東アジア経済と分断が進む世界経済の現状をどのように捉えるべきかについて話したい。

## 【北東アジア諸国経済の成長と課題】

まず、北東アジア地域では経済成長が続いているが、それぞれの国や地域に多くの課題があることを指摘する。最も重要な課題は、世界経済の分断が進む可能性があることであり、世界はそれにどのように対応し、日本は其中でどのような役割を果たせるのかが問われている。

図1の左のグラフは北東アジア諸国のGDP（兆米ドル）を表している。1990年代には、中国は既に改革開放を軌道に乗せ経済発展を進めており、2001年に世界貿易機関（WTO）に加盟した。その後も経済成長を続け、2010年には日本のGDPを抜いて世界第2の経済大国になった。この間、日本のGDPは上昇傾向を示さないまま推移している。旧ソ連邦崩壊後のロシア経済は経済体制移行期の1990年代に混乱したが、2000年代初めに成長

が軌道に乗り、世界金融危機（2007-09年）で一旦下降した後回復して2010年代の前半まで伸び、その後は低迷している。韓国は1990年代末に金融危機を経験したが、その後は順調に成長している。モンゴルと北朝鮮のGDPは規模が小さいので、この図では目に見えるかたちで示されていない。モンゴルは成長しているが、北朝鮮はあまり成長していない。

図1の右側は一人当たりGDP（米ドル）を示している。日本の一人当たりGDPは高水準（4万ドル前後）で推移してきたが、2022年には下っている。韓国の一人当たりGDPは急速に伸び、2022年は日本と韓国がほぼ並ぶ状況になっている。

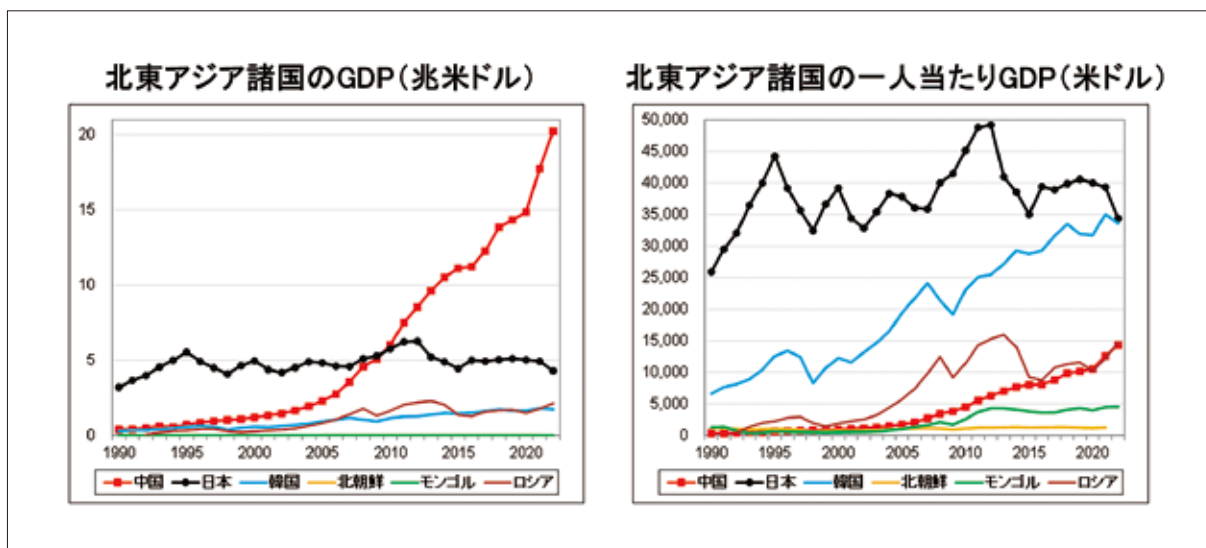
ロシアの一人当たりGDPは2010年代前半までは韓国に次いで伸びていくと見込まれていたが、2010年代以降低迷している。これは、鉱物資源の価格に依存する経済構造になっていること、2014年のクリミア併合で西側諸国の経済制裁が始まったことが影響している。中国の一人当たりGDPは成長し続け、2020年前後からはロシアとほぼ同じ水準になっている。中国の一人当たりGDPは2023年には世界銀行が決める

高所得国のカテゴリーに移る可能性が高くなっている。世界銀行は一人当たり国民所得が1万3200ドル以上の国を高所得国としている。中国は発展途上国の段階を卒業することになる。モンゴルの一人当たりGDPは2010年代初めまで伸びたが、それ以降は停滞し伸びていない。北朝鮮経済は一貫して低迷している状況だ。北朝鮮は国連による厳しい経済制裁下にあるだけでなく、厳格なコロナ対策をとり、かつ自然災害に見舞われるという「三重苦」で経済的に苦しい状況にある。

このように、北東アジア経済は伸びている国と停滞している国が併存している。中国がゼロコロナ政策から脱却し、日本や韓国が国際的な人の流れを活性化させ、北東アジア地域全体が貿易投資を拡大させていくことが、ポストコロナ時代に向けた大きな課題である。

北東アジア各国はそれぞれ重要な構造的な問題を抱えており、構造改革に努めつつ経済成長を図っていく必要がある。日中韓の少子高齢化問題は極めて深刻であり、ロシアも少子高齢化問題に直面している。中国の人口は2021-22年がピーク

図1 北東アジア諸国のGDP、一人当たりGDP（1990-2022年）



出所：IMF, World Economic Outlook October 2022; Bank of Korea, Gross Domestic Product Estimates for North Korea, various issues より筆者作成  
注：2022年のデータはIMFによる予測値。

で、今後は減少していくことになる。中国の生産年齢人口（15-60歳未満）は既に減少を始めている。こうした状況では、労働者一人当たりのGDP（労働生産性）を伸ばさないと経済成長ができない。日本、韓国、中国そしてロシアが同じ状況に面している。

ロシアは2022年2月のウクライナ侵攻を経て西側諸国（米欧日）による経済制裁を受けており、北朝鮮は国連を中心にした経済制裁下にある。北東アジア地域の最大の課題は、米中間の大国間競争が北東アジア諸国、特に日本や韓国の対中関係に大きな影を落としていることだ。大国間競争が世界経済の分断に繋がる恐れがあることから、米中関係の動向に注目していかなければならない。

【世界経済の分断の可能性】

世界経済の分断は、ロシアによるウクライナ軍事侵攻を受け、西側諸国（G7諸国、EU）がロシアを西側経済から切り離そうと制裁を科しているの、既に起こりつつある。それに加えて米中間の大国間競争が世界経済の分断をさらに進める可能性がある。米中対立は、トランプ政権の下で米中貿易戦争のかたちで起きていたが、バイデン政権の下でも、貿易、技術、安全保障に関わる摩擦から価値観（民主主義、人権）や台湾海峡をめぐる対立に拡大してきた。

米中対立がさらに深刻化したり、中口の政治・軍事・経済的な連携がさらに深まったりすると、世界経済は米欧日と中口の分断に繋がるリスクがある。

米国は2022年10月、国家安全保障に係る最先端半導体関連の対中輸出規制を強化しサプライチェーンの強靱化を進めている。米国は、米国の技術やソフトウェアを使った半導体と半導体製造機器の対中輸出を許可しない姿勢を示している。最先端半導体は中国の軍事力強化につながり、米国の安全保障を脅かしかねないからだ。オランダや日本の企業は半導体製造機器に国際競争力を持っているので、それら企業が米国の輸出規制の網に組み入れられる可能性がある。

世界経済の分断は、経済的な効率性を低下させ、生産コストの高騰を招くため、経済的な観点からは避けるべきものだ。しかし、各国とも国家安全保障の確保に努めなくてはならず、経済と安全保障のバランスを取ることが必要になる。

世界経済が主要先進国（米欧日）と中口の経済ブロックに分断された場合、その経済的な影響はどのようなものになるか、世界経済の分断のコストを最小化するには何が必要か、経済安全保障はどこまで進めるべきか、日本は中国とどう向き合うべきかが問われることになる。

世界経済分断のシナリオと経済的な影響については、国際通貨基金(IMF)の報告

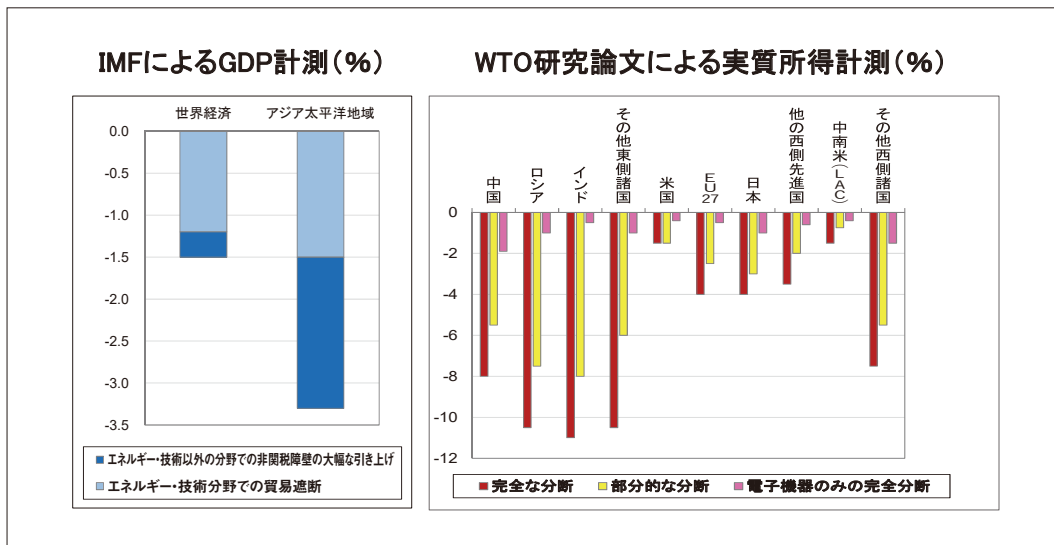
書や世界貿易機関(WTO)の研究論文が分析している(図2)。世界経済は西側(米欧日)と東側(中口等)に分断されると定義し、本格的な世界経済の分断が起こる場合、部分的な分断が起こる場合、そして電子機器の分野に限った分断が起こる場合が想定されている。

これらの分析によれば、世界経済の本格的な分断が起きると国際的な人の流れが阻害され、情報・知識・技術・アイデアの流れが遮断されるためマイナスの影響が極めて大きくなる。それは、西側と東側の経済的な相互依存が極めて高いことの裏返しである。分断のマイナスの影響は、中国やロシアにとっては非常に大きい、西側にとっては比較的小さい。それは、西側の持つ技術水準が高いのに対し、東側にとっては西側の知識・技術・アイデアへのアクセスを遮断されることの不利益が大きいためである。

その一方、世界経済の分断が部分的なものであったり、電子機器などハイテク分野に限られたものであったりする場合には、マイナスの影響が小さくなる(図2の右側)。つまり、本格的な分断のコストは、部分的なハイテク分野での分断のコストを上回る。

したがって、経済安全保障の観点から輸出規制など分断を避けられないとすれば、その対象や範囲をなるべく効果的な分野に絞り、経済全般に広がらないように

図2 世界経済の分断がもたらす経済的な影響



出所: (左)IMF, Regional Economic Outlook, Asia and Pacific: Sailing into Headwinds (October 2022). (右)Goes and Bekkers, "Impact of Geopolitical Conflicts on Trade, Growth, and Innovation." Staff Working Paper ERSD-2022-09, World Trade Organization (04 July 2022).

して、コストを小さくすることが重要だ。米欧日は、貿易や投資の幅広い制限をするのではなく、限られた分野での経済安全保障の施策をとりつつ、自らが技術革新を進めて安定的な国際貿易システムの再構築を目指すべきだろう。要するに、世界経済、北東アジア経済の発展のためには、本格的な分断を回避することがベストであり、仮に安全保障の観点からある程度の分断が避けられない場合でも、それを最小化するよう管理していくことが重要だ。

### 【日本は中国にどのように向き合っていくべきか】

日本は中国との間で建設的かつ安定的な日中関係を維持していくことが課題になっている。

2022年11月の岸田文雄・習近平会談では、以下の共通認識が共有された。

日中関係は重要であり、建設的・安定的な日中関係を維持して、経済や国民交流など互恵的協力を進める。環境・省エネを含むグリーン経済や医療・介護・ヘルスケアの分野での協力を強化する。企業にとって公平で差別のない予測可能なビジネス環境を提供する。青少年を含む国民交流を再活性化させる。世界と地域の平和と繁栄を共に維持する責任を負い、世界的な課題への対応に努める。

日中両国は、これらの共通認識を実行に移していくべきだ。米中は大国間競争にあるものの相互の間での本格的な経済分断を避けることが望ましく、そのためにも日中は経済協力を進める意味がある。日本としては、経済安全保障の対象分野が過大なものにならないように管理し、通常の経済活動の活性化のために、日中経済協力を進めていくべきだ。

日本の多くの企業が中国に進出している中で、中国が国内における透明性・予見可能性を高め、公平なビジネス環境を確保することが欠かせず、そのための政策対話が必要になっている。

また、日中間には、少子高齢化、医療・介護・ヘルスケア、所得格差、不動産バブル、地方財政といった共通する国内課題がある。意見交換をしながら課題への取り組みを進め、貿易・投資を活性化させていくことが重要だろう。貿易・投資面では、

地域的な包括的経済連携（RCEP）を高いレベルに移していくための協議、環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定（CPTPP）に向けた政策対話・事前協議、WTO改革に向けた日中の政策対話を行うことが考えられる。国際的な課題——気候変動、感染症対策、途上国の債務問題など——についても日中で経済協力を進めるべきだ。

米中が相互の大国間競争を管理して軍事対立を避けるためにも、日中間の経済協力は補完的な役割を果たさう。

日中間の政治関係が安定化しないと、経済的な関係も安定しない状況になっている。以前は「政冷経熱」が可能だったが、今は「政冷」が「経冷」になりやすく、政治的な関係を安定化させることが重要だ。日中関係が安定すると北東アジア地域の経済情勢も改善していくと考えられる。

### 【2022年度北東アジア経済発展国際会議（NICE）総括】

2022年度 NICE では、全体テーマを「分断が進む世界経済—つながりを求めて」として経済安全保障、農業・食料、エネルギー・環境などの各分野で専門家による議論を行った。世界レベル、そして北東アジア地域での国際協調、特に国際経済協力の可能性を探った。総括講演では、北東アジア経済の現状と世界経済の分断を避けるための課題について話した。第4回 Future Leaders Program (FLP) では、国内の大学生が「北東アジア地域の未来シナリオ」について議論した。将来を背負う若者による議論は重要であり、今後も続けていただきたい。

2023年3月31日をもって、公益財団法人環日本海経済研究所（ERINA）は解散し、4月1日から新たな組織となるので報告させていただく。

公益財団法人環日本海経済研究所（ERINA: Economic Research Institute for Northeast Asia）は、新潟県をはじめとする11の県、新潟市、民間企業8社の出捐によって、1993年に設立された。1990年代初めの旧ソ連構成諸国の市場経済化の動きを機に、既に改革開放路線をとっていた中国だけでなく、ロシア、

モンゴル、北朝鮮も経済改革と市場開放を進め、これら諸国と日本、韓国との間の経済的な結びつきが強まることが期待された。こうした期待を受け、北東アジア地域を対象とした研究所が新潟に設立され、日本海を挟んで日本と他の北東アジア諸国との経済交流を促進することで地域経済圏を形成するという壮大なビジョンが示された。

ERINA はその後30年にわたり、北東アジア地域の経済発展と域内経済協力の強化に向けて、域内各国の経済動向・対外経済関係を調査研究し、域内経済交流の活性化のための支援や、経済・ビジネス情報の対外発信に取り組み、「シンク・アンド・ドゥ・タンク」として政策の方向性を示す活動を展開してきた。特に中国の東北地域、ロシアの極東地域、韓国、北朝鮮、モンゴルに焦点を当て、域内の経済的な相互依存関係、国際運輸・物流、貿易・投資、資源・エネルギー・環境、開発金融、人的交流などの分野に力を入れてきた。おかげで、ERINA は北東アジア地域経済の調査研究と経済交流支援の機関として、内外で高い評価を得ることができた。

設立30年の節目を迎え、この度、新潟県の行財政改革の方針により、2023年3月末で公益財団法人としては解散し、同4月1日から公立大学法人新潟県立大学に新設される附置研究所「北東アジア研究所」（ERINA: Economic and Social Research Institute for Northeast Asia）として再出発することとなった。現有の研究員のすべてと非研究職員の大半が移籍し、研究所の発展に寄与すべく研究活動に邁進するとともに、広域的な産学連携を推進する。これまでの研究蓄積や人的・情報ネットワークをそのまま引き継ぎ、北東アジア地域経済の研究拠点、広域的な産学連携のハブとしての役割を一層高めていく。

今後の NICE については、新潟県をはじめ行政機関とともに連携しつつ続けていきたいと考えている。

長きにわたり、ご支援、ご協力を賜った国内外の研究者・研究機関、政策担当者・行政機関、経済界、言論界、市民の皆様にも深く感謝申し上げます。

# 大学生・大学院生のプレゼンテーションコンテスト 第4回 Future Leaders Program (FLP) —北東アジア地域の未来シナリオ—

2022年度北東アジア経済発展国際会議(NICE)の第2日目(12月16日)に大学生・大学院生のためのプレゼンテーションコンテスト「第4回 Future Leaders Program (FLP)」が開催された。

テーマは「北東アジア地域の未来シナリオ」。大きな経済発展可能性とともに政治・社会的な不安定要素も併せ持つ北東アジア地域の将来に向け、学生たちが自由な発想でシナリオを描くことで未来のオピニオンリーダーを育成することを目的としたFLPは今回で4回目となった。テーマを「北東アジア」から「北東アジア地域」に変更し、より広い地域への視野を含んだ提案も可能とし、日本国内の大学、大学院を対象とした。県内外大学から19の提案があり、書類選考を経て5チームが本選に臨んだ。

### <本選出場チーム>

1. 新潟大学「Happy Ageing ～日・中・韓共同介護プラットフォームの提案～」  
小山内哲、山岡詩、渡邊剛
2. 富山大学「電子廃棄物のマネジメントから考える未来シナリオ～日韓E-Wasteマネジメントネットワーク構想～」清水日向
3. 東北学院大学「FOOD FOR THE POOR ～COOLをお届け～」  
植木太陽、大友心愛、岡本昇樹

4. 東北大学「日中韓で目指す環境にやさしい太陽光発電」  
中尾春貴、大石真士
5. 新潟大学「北極海航路と日本海経済」  
岡野壮一郎

### <本選審査員>

新潟経済同友会国際戦略委員副委員長  
高橋秀之  
新潟日報社取締役統合編集本部論説編集委員室長  
森沢真理(書類審査員)  
在新潟モンゴル国名誉領事  
中山輝也  
長岡大学教授  
権五景  
新潟中華総商会副会長  
曾衛斌  
新潟経営大学観光経営学部長・教授  
ツェリツェフ・イワン  
新潟県知事政策局国際課長  
小田佳代子(書類審査員)  
NICE 実行委員長・ERINA 代表理事  
河合正弘(書類審査員)

※書類審査では、新潟経済同友会国際戦略委員会の宇尾野隆委員長に審査員をしていただいた。

### <本選ルール>

プレゼンテーション7分、質疑応答8分

### <表彰>

新潟県知事賞(1チーム)、  
審査員特別賞(1チーム)、  
奨励賞(3チーム)

新潟県知事賞は東北大学の「日中韓で目指す環境にやさしい太陽光発電」、審査員特別賞は新潟大学の「Happy Ageing～日・中・韓共同介護プラットフォームの提案～」だった。学生たちからは「北東アジアの将来を危機感を持って考えることができた」「今後もこれらのテーマについて知見を深めていきたい」などの感想が寄せられた。また、同日開催のエネルギー・環境セッションに参加し、「専門家によるパネルディスカッションを初めて体験し貴重な経験となった」という感想もあり、国際会議のプログラムのひとつというのも未来を担う学生の経験値を上げたのではないかと思う。学生たちの考えた未来シナリオが将来の北東アジア地域の平和・安定・繁栄に何らか寄与することを願う。

(ERINA企画・広報部長  
新保史恵)



## 活動報告

# シャルム・エル・シェイク国連気候変動会議 —共に実行を

ERINA 調査研究部主任研究員  
エンクバヤル・シャグダル

2022年11月6日、年に一度開催される国連気候変動会議（以下、会議）がエジプトのシャルム・エル・シェイク国際コンベンションセンターで開幕し、当初の予定を39時間以上延長した11月20日にその役割を終えた。会議には以下の協議が含まれている。

- 国連気候変動枠組条約（UNFCCC）第27回締約国会議（COP27）
- パリ協定第4回締約国会合（CMA4）
- 京都議定書第17回締約国会合（CMP17）

• 実施に関する補助機関第57回会合（SBI57）

• 科学的・技術的助言に関する補助機関第57回会合（SBSTA57）

11月7日、8日にはシャルム・エル・シェイク気候実施サミットが開催され、各国首脳112名がスピーチを行い、食料安全保障、革新的資金調達、公正な移行、エネルギーの未来への投資：グリーン水素、気候変動と脆弱な共同体の持続可能性、水資源安全保障を議題とする6つのラウンド

テーブルで議論を行った。ハイレベル・セグメントの第2部は11月15～18日に開かれ、主に大臣らが出席した。会議には締約国からの代表者1万6118人、オブザーバー組織からの1万3981人、報道機関からの3350人を含む総勢3万3449人が参加した。

COP27、CMA4、CMP17の締約国は、このシャルム・エル・シェイク気候変動会議で60の決議を採択した。COP27の核心となる決議は「シャルム・エル・シェイク実施

写真1 ブルーゾーン入場口



(出所) 筆者撮影

写真2 ブルーゾーン入場口



(出所) 筆者撮影

写真3 シャルム・エル・シェイク国際コンベンションセンターの屋外



(出所) 筆者撮影

写真4 ブルーゾーンの通路



(出所) 筆者撮影

計画」で、これは科学と緊急性、野心と実施の強化、エネルギー、緩和、適応、損失と損害、早期警戒と組織的観測、公正な移行に向けた実施と筋道、資金調達、技術移転と展開、キャパシティビルディング、ストックテイク、海洋、森林、農業、非政府組織主体の行動実施の強化を含む幅広い領域を対象としている。特に、決議には以下の内容が含まれている。

- 「科学と緊急性」に関しては、国連環境計画の適応ギャップ<sup>1</sup>・排出ギャップ<sup>2</sup>報告書2022と、世界気象機関の気候の現状に関する最近の地球・地域報告書<sup>3</sup>に触れ、気候変動の影響は1.5℃の気温上昇の方が2℃の場合と比べて大幅に低減することをあらためて主張し、気温の上昇を1.5℃に抑えるために一層努力することを決意する。
- 「野心と実施の強化」に関しては、慣例、京都議定書、パリ協定の原則と目的に基づき、それらの関連決定事項を考慮し、低排出で気候変動対応能力に優れた開発への野心的かつ公正・公平で包摂的な移行を実施することを決意する。
- 「エネルギー」に関しては、低排出・再生可能エネルギーの増加、公正なエネルギー移行のためのパートナーシップ、その他の協調行動を通じて、全関係部門において締約国が一刻も早く大幅かつ迅速に持続性のある地球温暖化ガス排出削減を行うことが急務となっていることを強調する。
- 「緩和」に関しては、地球温暖化を1.5℃に抑えるためには、2030年までに世界の温室効果ガス(GHG)排出を2019年比で43%、一刻も早く、大幅かつ持続的に削減する必要があることを認識し、締約国に、技術の開発・展開・普及、クリーンな発電の急拡大による低排出エネルギーシステムへの移行、省エネ

対策を加速するよう呼びかける。また、締約国に対して、対策が講じられていない石炭火力発電の速減と非効率な化石燃料補助金の段階的廃止に向けた努力を加速するとともに、各国の状況に応じて、最貧国や脆弱な国に対して所定の支援を行うよう呼びかける。さらに、締約国に対し、2030年までにメタンをはじめとする二酸化炭素以外の温室効果ガス排出の削減に向けたさらなる措置を検討するようあらためて表明する。

- 「適応」に関しては、第2作業部会のIPCC第6次評価報告書への調査結果に基づき、現在の適応水準と気候変動がもたらす悪影響への対応に必要な水準とのギャップに深刻な懸念を示し、先進締約国に対して、適応のための気候対応資金、技術移転、キャパシティビルディングを早急かつ大幅に拡大して提供するように要請する。
- 「損失と損害」に関しては、気候変動による悪影響がもたらす損失と損害の深刻さ、規模、頻度はいずれの地域でも増しており、その結果、強制移住や、文化遺産、人的流動性、地域社会における人々の生活と生計への影響を含む壊滅的な経済的・非経済的損害がもたらされていることに重大な懸念を示し、損失と損害に対する適切かつ効果的な対応の重要性を強調すると同時に、発展途上国にとっては損失と損害による多額の財政費用が債務の負担増加となり、その結果、持続可能な開発目標の実現が妨げられてしまうことに深い懸念を表明する。各国は、気候変動による損失と損害に対応するための資金調達の必要性を認識することに初めて合意した。これは損失と損害に関する突破口となる決定事項であり、資金や調達方法の具体化は今後1年で調整される。
- 「早期警戒と組織的観測」に関しては、

特に発展途上国においては、全球気候観測システムの既存のギャップに取り組む必要があることを強調し、開発パートナー、国際金融機関、金融メカニズムの運営組織に対して、イニシアティブ「全ての人々に早期警戒を」の実施を支援するように要請する。

- 「公正な移行に向けた実施と筋道」に関しては、公正かつ公平な移行は、エネルギー、社会経済、労働力などを含めた道筋を示すが、これらはいずれも国が定めた開発における優先課題に基づいていなければならない、移行に伴う影響を緩和するための社会的保護が含まれていなければならないことを強調する。
- 「資金調達」に関しては、必要とされる資金<sup>4</sup>の調達には、政府、中央・商業銀行、機関投資家、金融関係者などを巻き込んで、金融システムとその構造・プロセスの変革が必要であることを強調する。そのため、先進締約国に対して、本条約における義務に加えて、発展途上締約国を緩和と適応の両面で支援するために、資金、技術移転、キャパシティビルディングなどを通じて支援を強化するように要請し、他の締約国にも自主的にそうした支援を提供するよう促す。
- 「技術移転と展開」に関しては、本条約とパリ協定の目標達成に必要な変革の促進を目的とした、技術執行委員会と気候技術センター・ネットワークの初めての共同作業計画(2023~2027年)の実施の下で、技術開発・移転と革新についての協力が重要であることを強調する。
- 「キャパシティ・ビルディング」に関しては、先進締約国に対して、長期的な国主導のキャパシティ・ビルディングの介入を支援し、これらの介入の効果、成果、持続可能性を高めるよう要請する。
- 「ストックテイク」に関しては、本条約の下で長期グローバル目標を定期的なレ

<sup>1</sup> UNEP. 2022. Adaptation Gap Report 2022: Too Little, Too Slow – Climate adaptation failure puts world at risk. Nairobi: United Nations Environment Programme: <https://www.unep.org/resources/adaptation-gap-report-2022>.

<sup>2</sup> UNEP. 2022. Emissions Gap Report 2022: The Closing Window – Climate crisis calls for rapid transformation of societies. Nairobi: United Nations Environment Programme: <https://www.unep.org/resources/emissions-gap-report-2022>.

<sup>3</sup> 一例として、World Meteorological Organization. 2022. State of the Global Climate 2021. Geneva: World Meteorological Organization: <https://public.wmo.int/en/ourmandate/climate/wmo-statement-state-of-global-climate>.

<sup>4</sup> 2050年までにネットゼロ排出を達成するには、2030年までは年間4兆ドルの再生可能エネルギーへの投資が必要である。全世界の低炭素経済への移行には、少なくとも年間4~6兆ドルが必要の見込みである。発展途上国の国が決定する貢献(NDC)の実施を支援するには、現在の試算では、2030年までは5.8~5.9兆ドルが必要であると見込まれている。同時に、先進締約国は2020年までに緩和対策を目的とする年間100兆ドルの共同支援を行う目標を達成していない。2019~2020年のこうした流れでの金額は8030億ドルだったと推定され、これは地球の気温上昇を2℃より大幅に下回る温度または1.5℃に保つのに必要な年間資金の31~32%程度である。



写真5 本会議室の様子



(出所) 筆者撮影

ビューすることが重要であることに触れ、本条約の下での長期グローバル目標と、その達成に向けた全般的進捗に関する第2回定期レビューの決議を今回のCOP27で採択することを歓迎する。

- 「海洋」に関しては、締約国に対して、NDC、長期戦略、適応情報の伝達をはじめ、各国の気候目標とそれらの目標の実施の下で、適宜、海洋中心の行動を検討するよう促す。
- 「森林」に関しては、締約国に対して、緩和・適応行動として、現状に即した社会・環境面でのセーフガードを確保する一方で、適宜、森林中心の解決策やエコシステムを基盤とした取り組みを検討するよう促す。
- 「農業」に関しては、4年間の農業・食料安全保障に係る気候行動の実施に関するシャルム・エル・シェイク共同作業の確立と、共同作業の下でのシャルム・エル・シェイクのウェブサイト設置を歓迎する<sup>5</sup>。
- 「非政府組織主体の行動実施の強化」に関しては、気候変動への取り組みと対応において、先住民族、地域社会、都市、若者や子どもを含む市民社会の重要な役割を認識し、締約国に対して、気候政策や行動を立案・実施す

るプロセスに子どもや若者を参加させ、UNFCCC 会合への各国代表団に若い代表者や交渉担当者を加えることを検討するよう促す。

サイドイベントと展示会は、公式の協議で発言する機会が限られている参加オブザーバー組織が、締約国やその他の参加者と知識を共有したり、キャパシティビルディングを行ったり、関係者を紹介したり、気候変動に関する課題について実行可能な対処策を模索する場である。この会議では、11月7～17日の間に140を超える出展者がそれぞれ異なる期間で展示を行った。ERINA は英国のグリーン経済研究所 (GEI)、ジンバブエのアフリカ野生動物保護財団 (AWF)、グローバル・グリーンズ (Verts Mondiaux) (Global Greens)、環境政策テクノロジー教育研究リハビリテーションセンター (TERRE Policy Centre)、モンゴルとの共催で、2022年11月17日にブルーゾーンのメンフィスルームで公式なサイドイベントを開催した。この共催サイドイベントのテーマは、「Burning Critical: Where science leads & where must politics dare to go: Reversing Loss & Damage (燃え盛る臨界: 科学が導き、政治が挑

むべきところ: 損失と損害の反転) であった。このサイドイベントのパートナーセッション3では、モンゴル環境観光省気候変動研究協力センター主席科学顧問のバトジャルガル・ザンバ氏が「Climate change and innovation based solution options: Policy level efforts in Mongolia (気候変動とイノベーションに基づいた解決策: モンゴルにおける政策的取り組み)」と題して発表を行い、筆者は「Breakthrough Technology for Circular Economy: Carbon Dioxide Cycling (循環型経済の画期的技術: 二酸化炭素の循環)」について発表した。また、ERINA は他にも英国のグリーン経済研究所 (GEI)、カナダのグローバル・グリーンズ (Verts Mondiaux) (Global Greens)、インドの環境政策テクノロジー教育研究リハビリテーションセンター (TERRE Policy Centre)、香港の天大研究院との共催で、11月7～12日にブルーゾーンで展示を行った。各展示は、①適応、レジリエンス、損失と損害、②農業、食料、国土、③キャパシティビルディングとNDC実施の支援、④教育、科学、技術、⑤エネルギー、産業、公正な移行、⑥ジェンダー、女性、子ども、若者、⑦人間の居住、健康、持続可能なライフスタイル、⑧自然、生物の多様性、先住民、に分類された。筆者たちの展示は、教育、科学、技術に分類され、低温プラズマフィルターを使って二酸化炭素の排出から炭素を分解・除去することができる技術を紹介した。ミライ科学株式会社 (JIS) がこの最先端技術の開発者で、これはさまざまな産業工程や消費者向け製品で使用可能な将来有望なCCU (炭素回収・使用) 技術の一つである。

次回のCOP28、CMP18、CMA5は2023年11月30日～12月12日にアラブ首長国連邦で開催される。

<sup>5</sup> 第27回締約国会議の議題事項3(a-b)の下で提案された「農業・食料安全保障に係る気候行動の実施に関する共同作業」と題する決議案。 <https://unfccc.int/documents/622325>。

写真6 サイドイベント室の様子



(出所) 筆者撮影

写真7 ブルーゾーンの展示ホール(オブザーバー区域)の様子



(出所) 筆者撮影

写真8 ジャパン・パビリオンの様子



(出所) 筆者撮影

写真9 ERINAと共催者のサイドイベントの様子



(出所) 筆者撮影

写真10 ERINAと共催者のブースの様子



(出所) 筆者撮影

# 北東アジア動向分析

## ●中国(東北三省)

### 2022年1-9月期における 東北三省主要経済指標

中国国家统计局の発表によると、2022年1-9月期における中国の国内総生産(GDP)は、87兆269億元(名目値)であり、実質GDP成長率は前年同期比3.0%となった。そのうち、2022年1-9月期の東北三省の域内総生産(GRP)の名目値と実質GRP成長率は、遼寧省が2兆797億元で前年比2.1%増、吉林省が9433億元で同1.6%減、黒龍江省が1兆467億元で同2.9%増となった。三省のGRPの産業別の内訳をみると、2022年1-9月期における遼寧省の第1次産業の付加価値額は1536.5億元で前年比3.0%増、第2次産業は8587.5億元で同0.1%減、第3次産業は1兆673億元で同3.4%増となった。吉林省の第1次産業の付加価値額は699.4億元で同2.9%増、第2次産業は3471.8億元で同2.7%減、第3次産業は5261.9億元で同1.6%減となった。黒龍江省の第1次産業の付加価値額は1153.6億元で同3.0%増、第2次産業は3530.1億元で1.0%増、第3次産業は5783億元で3.8%増となった。

東北三省の工業生産の動向をみると、2022年1-9月期の一定規模以上の工業企業(年間売上高2000万元以上)の付

加価値増加率は、遼寧省が前年同期比1.5%減、吉林省が同2.5%減、黒龍江省が同1.0%増になった。さらに、主な産業部門別の数値をみると、遼寧省では設備製造業が同2.9%増、建材製造業が同11.7%減となり、吉林省では自動車製造業が同7.0%減、建材製造業が同16.5%減となり、黒龍江省では設備製造業が同5.6%増、食品製造業が同5.2%増となった。

投資については、2022年1-9月期における遼寧省の固定資産投資額(農家投資を除く:以下同じ)は前年同期比3.3%増、吉林省は同6.9%減、黒龍江省は同2.4%増であった。固定資産投資額の産業別の内訳をみると、遼寧省の第1次産業は前年同期比0.8%減、第2次産業は同8.2%増、第3次産業は同1.2%増であった。吉林省の第1次産業の固定資産投資額は同69.9%増、第2次産業は同8.3%増、第3次産業は同13.5%減であった。黒龍江省の第1次産業の固定資産投資額は同28.7%増、第2次産業は同9.8%増となった。

消費動向をみると、2022年1-9月期の社会的消費財小売総額は、遼寧省が7057.3億元で前年同期比1.5%減、吉林省が2701.2億元で同8.1%減、黒龍江省が3678.3億元で同4.3%減となった。消費者物価指数(CPI)は、遼寧省が前年同

期比2.1%上昇、吉林省が同2.2%上昇、黒龍江省が同2.0%上昇した。

貿易動向をみると、2022年1-9月期の輸出入額は、遼寧省が5986.7億元で前年同期比3.3%増、吉林省が1153.1億元で同1.9%減、黒龍江省が1901.5億元で同30.5%増となった。内訳をみると、遼寧省では輸出額が2742.2億元で同12.3%増、輸入額が3244.6億元で同3.2%減となり、吉林省では輸出額が365.8億元で同48.0%増、輸入額が787.3億元で同15.2%減となり、黒龍江省では輸出額が363.6億元で同17.2%増、輸入額が1537.9億元で同34.1%増となった。

ハイテク産業をみると、2022年1-9月期における中国のハイテク製造産業の固定資産投資額は同23.4%増となり、一定規模以上のハイテク製造産業の付加価値は前年同期比8.5%増となった。東北三省をみると、2022年1-9月期における遼寧省のハイテク産業の付加価値は同18.7%増となった。吉林省の一定規模以上のハイテク製造産業の付加価値は同1.5%増となった。黒龍江省ではハイテク産業の増加率が公表されてないが、ハイテク製造産業への固定資産投資額は同9.8%増と示されている。

ERINA 調査研究部研究員  
董琪

		2020年				2021年				2022年1-9月期			
		中国	遼寧	吉林	黒龍江	中国	遼寧	吉林	黒龍江	中国	遼寧	吉林	黒龍江
経済成長率(実質)	%	2.3	0.6	2.4	1.0	8.1	5.8	6.6	6.1	3.0	2.1	▲1.6	2.9
工業生産伸び率(付加価値額)	%	2.4	1.8	6.9	3.3	9.6	4.6	4.6	7.3	3.9	▲1.5	▲2.5	1.0
固定資産投資伸び率(名目)	%	2.9	2.6	8.3	3.6	4.9	2.6	11.0	6.4	5.9	3.3	▲6.9	2.4
社会的消費財小売伸び率(名目)	%	▲3.9	▲7.3	▲9.2	▲9.1	12.5	9.2	10.3	8.8	0.7	▲1.5	▲8.1	▲4.3
輸出入収支	億ドル	5,350.3	▲189.4	▲106.8	▲124.6	6,837.1	▲172.0	▲124.7	▲172.1	6,451.5	▲72.2	▲60.6	▲168.9
輸出伸び率	%	3.6	▲15.3	▲10.3	3.2	21.2	24.9	21.5	24.4	12.5	12.3	48.0	17.2
輸入伸び率	%	▲1.1	▲5.8	1.1	▲22.5	21.5	12.6	16.0	31.2	4.1	▲3.2	▲15.2	34.1

(注)前年比

工業生産は、一定規模以上の工業企業のみを対象とする。2011年1月には、一定規模以上の工業企業の最低基準をこれまでの本業の年間売上高500万元から2,000万元に引き上げた。

2011年1月以降、固定資産投資は500万元以上の投資プロジェクトを統計の対象とするが、農家を含まない。

2019年以降の貿易データは公表値が元建てであったことから、輸出・輸入の伸び率は公表されている元建て数値の伸び率、貿易収支は元建て貿易収支の数値を人民銀行公表の期末為替レート(2020年12月末:6.5434、2021年12月末:6.3897、2022年12月末:6.9546)によりドル建てに修正したものである。

(出所)中国国家统计局、商務部、遼寧省統計局、吉林省統計局、黒龍江省統計局ウェブサイトならびに黒龍江日報、遼寧日報、吉林日報、人民銀行の資料より作成。

## ●ロシア

### 2022年のロシア経済

ロシアによるウクライナへの侵攻とこれに対する西側諸国による経済制裁はロシア経済に対して負の影響を与えている。ただし、その度合いは春先に国内外で予想されたほどではない。

四半期ごとのGDP成長率(前年同期比)は、戦争開始前を含む第1四半期こそ3.5%のプラスだったが、第2、第3四半期はそれぞれ4.1%、3.7%のマイナス成長となった。第4四半期、そして通年でもマイナス成長となることは確実である。ロシア中央銀行が外部エコノミストを対象に行っているコンセンサス調査では、12月時点での2022年経済成長率予測はマイナス2.9%となった。ロシア中銀自体の予測は、2022年10月時点でマイナス3.5～3.0%であったから、直近のエコノミストらの予測はそれよりも楽観的である。さかのぼって、IMFの4月時点での予測(マイナス8.52%)、世界銀行の6月時点での予測(マイナス8.9%)を思い起こすと、ロシア経済はかなり持ちこたえていると言えよう。

1～11月の主要産業の生産動向を見ても、全体として低調であることは確かだが、意外と健闘している分野がある。鉱工業生産全体では、前年同期比マイナス0.1%となっているが、鉱業だけを取り出すとプラス1.1%となっている。原油生産量が2.2%増加していることなどが寄与している模様だ。これに対して、製造業の1～11月の生産は前年同期比0.8%のマイナス

であった。特に落ち込みが大きいのは自動車産業で、マイナス44.4%もの大幅減となっている。主要な外資自動車メーカーがロシアでの生産を停止、撤退したことの影響が如実に表れ、1～11月の乗用車生産台数は前年同期の3分の1にまで減少した。他方で、輸入代替が起こったと思われる製品群もある。コンピューターや電子・光学機器の生産が4.0%増加した他、飲料が3.3%、衣類が1.3%、それぞれ増加した。このほか、農業生産も4.7%増加した。

国民の消費動向にもバラツキが見られる。春以降、小売売上高が対前年同月比でマイナスを続けているのに対し、サービス売上高はプラスを維持している。例えば、交通サービスの売上高は、1～11月の累計で対前年同期比4.1%増加した。

消費者物価は4月ころまで急速に上昇したこともあり、11月末時点の消費者物価は前年末と比べて11.1%高い水準にある。ただし、消費者物価の動向は夏以降落ち着いている。その背景として、通貨ルーブルの為替レートが比較的高い水準で安定していることが指摘できる。

### 2023年連邦予算

ロシア政府は毎年秋に翌年以降3か年の中期経済見通しを作成し、これに基づいて3か年予算を編成して、年内に予算法として成立させる。2022年9月にロシア政府が発表した経済見通しでは、2023年度の経済成長率をマイナス0.8%としている。原油価格が低下すること、天然ガス輸出量が減少することなどから輸出総額

は2022年よりも減少すると予測している。

こうした経済見通しの下、2023年の連邦予算はGDPの2.0%に相当する赤字を見込んでいる。歳入面において、石油や天然ガスの採掘税や輸出税などを原資とする「石油ガス歳入」が減少(GDP比2.0%相当)する影響が大きい。歳出面では、「国家安全保障・治安維持」が2022年のGDP比1.9%相当から同2.9%相当へと大きく増えることが際立つ。これとは別に、国防費(同3.3%相当)が計上されており、まさしく「戦時財政」を組んでいると言えよう。赤字の補填には、主に国民福祉基金からの繰り入れと国債発行を活用する計画である。国民福祉基金残高は、2021年末時点で対GDP比10.4%あったが、2年続けて赤字補填のために取り崩すことで、2023年末には同4.2%まで減少する見込みである。

なお、これらの経済見通しや予算は、政府公式の立場を公表したものであり、厳しい現実を糊塗して、国民や外国向けに外面を取り繕ったものと考えるのが妥当であろう。例えば、2023年のウラル原油の平均価格を1バレル70.1ドルと予測しているが、2022年12月には西側諸国が1バレル60ドルという上限価格を設定し、現実に同月のウラル原油の平均価格は60ドルを下回っている。このままいけば財政赤字が予算より拡大し、経済の落ち込みも大きくなるだろう。

ERINA 調査研究部長・主任研究員  
新井洋史

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
GDP・実質成長率 (%) <sup>(1)</sup>	4.0	1.8	0.7	▲ 2.0	0.2	1.8	2.8	2.2	▲ 2.7	4.7
固定資本投資・実質増減率 (%) <sup>(1)</sup>	6.8	0.8	▲ 1.5	▲ 10.1	▲ 0.2	4.8	5.4	2.1	▲ 0.5	7.7
鉱工業生産高・実質増減率 (%) <sup>(2)</sup>	3.4	0.4	2.0	0.2	1.8	3.7	3.5	3.4	▲ 2.1	6.4
輸送貨物量・実質増減率 (%) <sup>(1)</sup>	2.9	0.6	▲ 0.1	0.6	1.8	5.6	2.7	0.8	▲ 4.9	5.6
小売売上高・実質増減率 (%) <sup>(1)</sup>	6.3	3.9	2.7	▲ 10.0	▲ 4.8	1.3	2.8	1.9	▲ 3.2	7.8
サービス売上高・実質増減率 (%) <sup>(1)</sup>	3.7	2.1	1.3	▲ 2.0	▲ 0.3	0.2	3.2	1.7	▲ 14.6	16.7
実質貨幣可処分所得・増減率 (%) <sup>(1)</sup>	4.6	4.0	▲ 1.2	▲ 2.4	▲ 4.5	▲ 0.5	0.7	1.2	▲ 2.0	3.0
消費者物価 (%) <sup>(3)</sup>	6.6	6.5	11.4	12.9	5.4	2.5	4.3	3.0	4.9	8.4
輸出額 (10億ドル、通関データ) <sup>(4)</sup>	524.7	526.0	497.4	343.5	285.7	357.3	450.3	424.3	337.1	491.6
輸入額 (10億ドル、通関データ) <sup>(4)</sup>	317.3	315.3	287.1	182.9	182.4	227.9	238.7	244.6	231.7	293.4
為替相場 (ドル/ルーブル) <sup>(5)</sup>	30.4	32.7	56.3	72.9	60.7	57.6	69.5	61.9	73.9	74.3
原油価格 (ブレント、ドル/バレル) <sup>(6)</sup>	111.6	108.6	99.0	52.3	43.6	54.1	71.3	64.3	42.0	70.9

	2021				2022			
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
GDP・実質成長率 (%) <sup>(1)</sup>	▲ 0.3	10.5	4.0	5.0	3.5	▲ 4.1	▲ 3.7	
固定資本投資・実質増減率 (%) <sup>(1)</sup>	3.3	11.0	7.9	7.6	12.8	4.1	3.1	
鉱工業生産高・実質増減率 (%) <sup>(2)</sup>	▲ 0.3	11.1	7.1	7.9	5.1	▲ 2.5	▲ 1.3	
輸送貨物量・実質増減率 (%) <sup>(1)</sup>	0.5	10.2	7.0	4.8	4.2	▲ 3.0	▲ 5.5	
小売売上高・実質増減率 (%) <sup>(1)</sup>	▲ 1.4	24.3	5.9	4.7	3.5	▲ 9.8	▲ 9.4	
サービス売上高・実質増減率 (%) <sup>(1)</sup>	▲ 3.2	53.2	16.4	12.6	7.8	0.0	1.3	
実質貨幣可処分所得・増減率 (%) <sup>(1)</sup>	▲ 4.0	7.0	8.9	0.0	▲ 1.2	▲ 0.8	▲ 3.4	
消費者物価 (%) <sup>(3)</sup>	5.6	6.0	6.8	8.3	11.5	16.9	14.4	
輸出額 (10億ドル、通関データ) <sup>(4)</sup>	93.7	115.4	131.9	150.6	-	-	-	
輸入額 (10億ドル、通関データ) <sup>(4)</sup>	62.4	74.1	75.1	81.8	-	-	-	
為替相場 (ドル/ルーブル) <sup>(5)</sup>	75.5	73.4	73.2	73.3	81.8	51.6	59.7	
原油価格 (ブレント、ドル/バレル) <sup>(6)</sup>	60.8	68.8	73.5	79.6	100.3	113.5	100.7	

2021		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
経済基礎部門商品・サービス生産高 <sup>(7)</sup>		▲1.5	▲2.1	3.4	13.7	14.3	11.3	6.2	4.0	4.1	6.0	7.0	5.6
鉱工業生産高・実質増減率 <sup>(%)</sup> <sup>(2)</sup>		▲1.6	▲2.4	2.9	9.0	13.1	11.5	7.9	5.6	7.9	8.3	7.9	7.5
輸送貨物量・実質増減率 <sup>(%)</sup> <sup>(1)</sup>		▲2.1	▲0.6	4.1	6.3	11.4	13.3	9.5	6.2	5.4	5.9	5.7	2.9
小売売上高・実質増減率 <sup>(%)</sup> <sup>(1)</sup>		1.1	▲0.7	▲2.5	36.3	28.0	11.5	5.7	5.8	6.2	4.6	3.6	5.6
サービス売上高・実質増減率 <sup>(%)</sup> <sup>(1)</sup>		▲8.9	▲5.3	4.7	59.8	60.2	41.2	21.9	15.2	12.7	13.0	14.0	10.9
消費者物価 <sup>(%)</sup> <sup>(3)</sup>		0.7	0.8	0.7	0.6	0.7	0.7	0.3	0.2	0.6	1.1	1.0	0.8
輸出額 (10億ドル、通関データ) <sup>(4)</sup>		27.0	30.2	36.5	36.9	35.3	43.2	43.4	43.0	45.4	46.1	47.7	56.8
輸入額 (10億ドル、通関データ) <sup>(4)</sup>		16.8	20.6	25.0	25.3	23.9	24.8	25.4	25.1	24.6	25.6	26.8	29.4
為替相場 (ドル/ルーブル) <sup>(5)</sup>		76.3	74.4	75.7	74.4	73.6	72.4	73.1	73.6	72.8	70.5	75.0	74.3
原油価格 (ブレント、ドル/バレル) <sup>(6)</sup>		54.8	62.3	65.4	64.8	68.5	73.2	75.2	70.8	74.5	83.5	81.1	74.2

2022		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
経済基礎部門商品・サービス生産高 <sup>(7)</sup>		7.7	4.8	1.6	▲2.9	▲3.5	▲4.7	▲2.9	▲1.5	▲3.5	▲3.2	▲2.5	
鉱工業生産高・実質増減率 <sup>(%)</sup> <sup>(2)</sup>		8.0	5.4	2.3	▲2.6	▲2.4	▲2.4	▲0.5	▲0.1	▲3.1	▲2.6	▲1.8	
輸送貨物量・実質増減率 <sup>(%)</sup> <sup>(1)</sup>		7.8	1.1	3.6	▲1.4	▲1.8	▲5.8	▲5.2	▲4.1	▲7.1	▲6.7	▲5.7	
小売売上高・実質増減率 <sup>(%)</sup> <sup>(1)</sup>		3.1	5.5	2.0	▲9.8	▲10.1	▲9.6	▲9.0	▲9.1	▲10.2	▲10.0	▲7.9	
サービス売上高・実質増減率 <sup>(%)</sup> <sup>(1)</sup>		11.6	8.2	4.0	0.9	1.2	1.5	1.6	3.5	1.1	1.5	2.0	
消費者物価 <sup>(%)</sup> <sup>(3)</sup>		1.0	1.2	7.6	1.6	0.1	▲0.3	▲0.4	▲0.5	0.1	0.2	0.4	
輸出額 (10億ドル、通関データ) <sup>(4)</sup>		45.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
輸入額 (10億ドル、通関データ) <sup>(4)</sup>		23.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
為替相場 (ドル/ルーブル) <sup>(5)</sup>		77.8	83.6	84.1	71.0	63.1	51.2	61.3	60.4	57.4	61.5	61.1	
原油価格 (ブレント、ドル/バレル) <sup>(6)</sup>		86.5	97.1	117.3	104.6	113.3	122.7	111.9	100.5	89.8	93.3	91.4	

出所・注：

- (1) 『ロシア短期経済指標 (2022年11月)』 (2022年12月29日) の数値。
- (2) OKVED・第2版の産業部門分類 (2018年価格) に基づく。『ロシア短期経済指標 (2022年11月)』 (2022年12月29日) の数値。
- (3) 年次データは前年12月比、月次データは前月末比の増減率で、『ロシア短期経済指標 (2022年11月)』 (2022年12月29日) の数値。四半期データは対前年同期比で、ロシア連邦統計庁ウェブサイト掲載値 (2022年10月12日更新)
- (4) ロシアは2022年2月以降、通関統計の公表を取りやめている。2022年1月分はロシア連邦税関 (2022年3月10日公表値)、それ以外はロシア連邦統計庁の既報値。
- (5) 年次・月次データは、期末の数値。四半期は月次データの単純平均値。『ロシア短期経済指標 (2022年11月)』 (2022年12月29日) の数値。
- (6) スポット価格。四半期データは月次データの単純平均値。アメリカ合衆国エネルギー省 (2022年12月28日)。
- (7) 前年同期比増減率 (%)。ロシア連邦統計庁の公表値 (2022年12月28日)。

## ●モンゴル

モンゴル経済は、COVID-19パンデミックの影響を受けた深刻な収縮から、2022年も緩やかに回復し続けた。モンゴル銀行は、自国通貨の利率を維持し、上昇するインフレを抑制するに引き締めの金融政策を継続した。

### マクロ経済

モンゴルの実質四半期 GDP は、2022年第1四半期に前年比3.9%減で3四半期連続で縮小したが、第2四半期は前年比6.3%、第3四半期は前年比7.1%の成長となり、1-9月期で前年比3.7%の成長となった。サービス部門と農業部門が成長の主な原動力となった。第3四半期の季節調整済みの実質 GDP は、前四半期から0.1%高くなっている。1-9月期の名目 GDP は35.2兆トゥグルグであった(図1)。

需要面では、最終消費と総資本形成が成長の原動力となったが、純輸出は引き続きマイナスに寄与した。最終消費は2022年の1-9月期に5.3ポイントの成長をもたらした。第1四半期、第2四半期、第3四半期では、それぞれ6.6ポイント、4.2ポイント、5.2ポイントに相当した。総資本形成の寄与度は、第1四半期と第2四半期

にそれぞれプラス5.0ポイントと26.5ポイントだったが、第3四半期にはマイナス3.7ポイントになった。総資本形成は1-9月期に成長に9.3ポイントのプラスの貢献をした。同時に純輸出は1-9月期の成長にマイナス10.8ポイント寄与した。四半期ごとでは、第3四半期の純輸出は5.4ポイントのプラスの寄与だったが、それ以前の2四半期はマイナスだった(図2)。

実質鉱工業生産(GIO)は、2022年第3四半期まで4四半期連続で減少し、1-9月期で前年比7.5%の縮小となった。石炭、銅精鉱、原油など、主要な鉱業部門の生産量は、非貨幣用金と銀精鉱を除いて、前年よりも低かった。製造業部門の生産も、肉、牛乳、小麦粉、たばこ、練炭、銅片など、主要品目のほとんどで前年を下回ったが、アルコール飲料とノンアルコール飲料、カシミア製品、石灰の生産は前年を上回った。

消費者物価指数(CPI)は引き続き上昇し、2022年第2四半期には16.3%、第3四半期には14.9%に達した。CPI上昇の主な要因は、食品と衣料品の価格上昇であった。食料品と衣料品のシェアは、全品目の25.1%と12.3%にそれぞれ相当する。

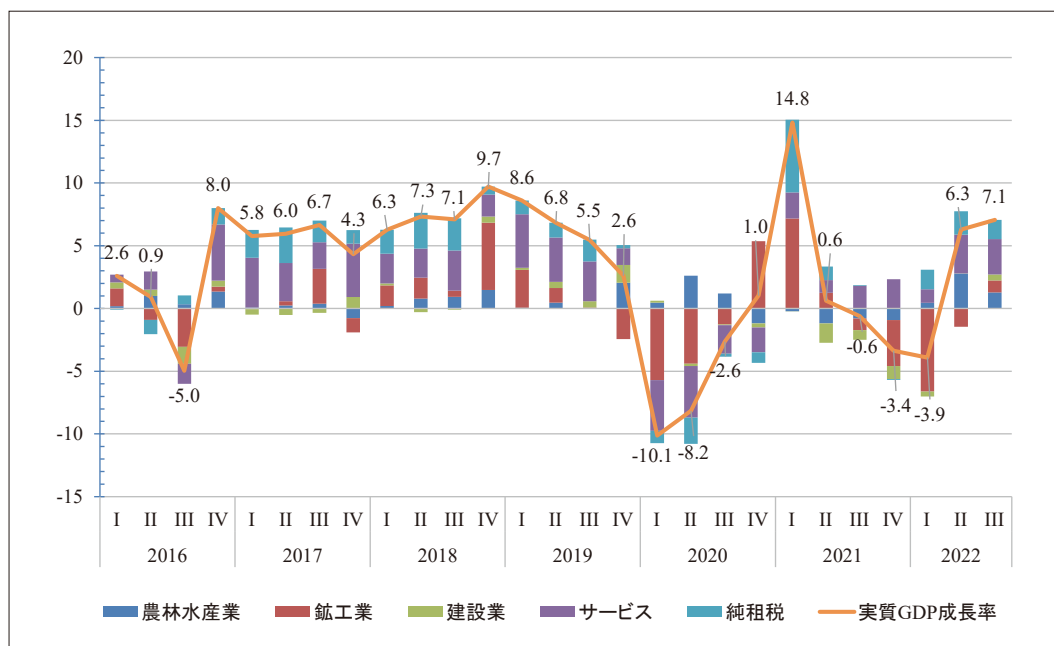
モンゴルの通貨トゥグルグは引き続き減値し、2022年第3四半期の1米ドルに対

する平均名目為替レートは3199トゥグルグで、前年比12.3%の減価となった。輸出の減少と輸入の増加は通貨下落の引き金となった。

2022年9月末のマネーサプライ(M2)は27.5兆トゥグルグ(84.3億米ドル)で、前年比0.8%増加した。モンゴル銀行は、2020年から2021年にかけて導入した金融緩和政策を撤回し、政策金利を当初の6%から2022年1月末には6.5%に引き上げ、さらに3月には9.0%、6月には10%、9月には12%に引き上げた。12月には13%となり、2017年5月以来の高水準となった。その結果、融資残高の伸びは4月末の前年比28.9%から9月末には前年比13.7%、11月末の前年比12%まで低下し、11月末の融資残高は22.4兆トゥグルグとなった。同時に、不良債権の割合は、2022年3月末の9.7%から2022年9月末には11.2%に増加した。

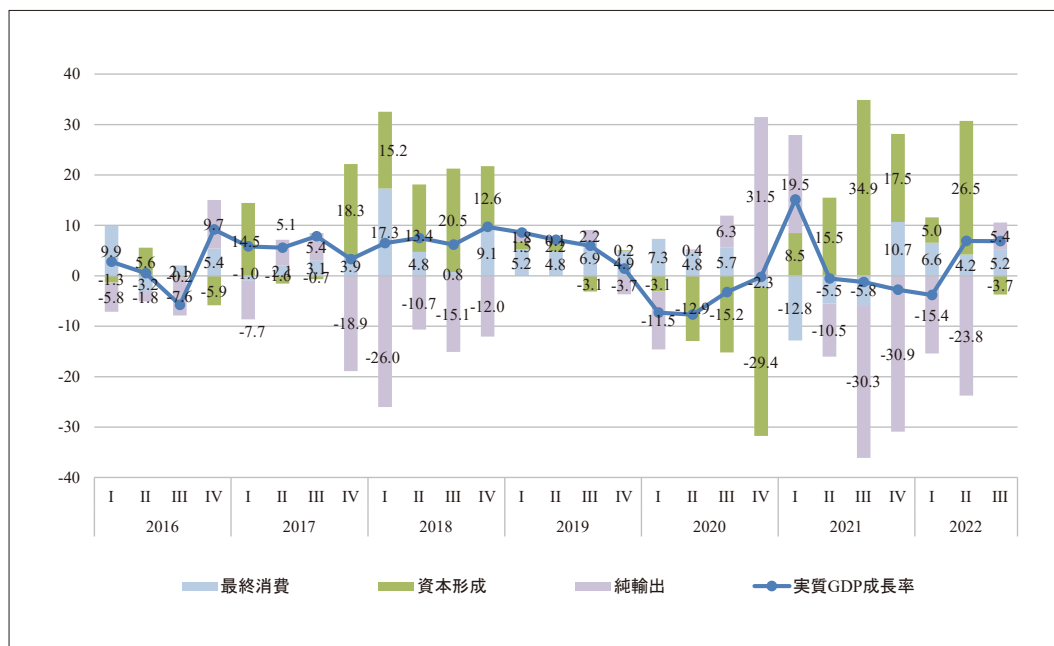
国家予算は、2022年1-9月期において9621億トゥグルグの赤字で、赤字幅は1年前より24.7%減少した。総収入と助成金の合計は11.5兆トゥグルグ(前年比19.1%増)で、総支出と純貸付は12.5兆(前年比14%増)となった。予算支出は、経常支出、設備投資、純貸出のすべての項目で前年を上回った。

図1 四半期GDP成長率と生産部門別寄与度(対前年同期比)



(出所) モンゴル国家統計局

図2 四半期GDP成長率と需要項目別寄与度(対前年同期比)



(出所) モンゴル国家統計局

### 外国貿易

2022年1-9月期に、モンゴルは156カ国と貿易を行った。総貿易額は151億ドルに達し、輸出は89億ドル、輸入は64億ドルで、貿易収支は25億6000万ドルの黒字となった。輸出と輸入はそれぞれ前年比39.4%と24%増加した。輸出が増加したのは、主に石炭と非貨幣用金であった。

モンゴルはこの期間に1900万トンの石炭と9.9トンの非貨幣用金を輸出した。石炭の輸出額は450万ドルで、前年の3倍に達した。中国は引き続きモンゴルの最大の輸出先であるが、石炭は対中国輸出全体の54.2%を占めている。

中国は同時に2022年1-9月期のモンゴルの最大の輸入元となり、ロシアと日本が

それに続いた。これらの国からの輸入は、それぞれ全体の35.1%、29.9%、8.3%であった。モンゴルのロシアからの輸入の60%が石油製品であるのに対し、モンゴルの日本からの輸入の66.1%は乗用車であった。

ERINA 調査研究部主任研究員  
エンクバヤル・シャグダル

	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2021年 1Q	2021年 2Q	2021年 3Q	2021年 4Q	2022年 1Q	2022年 2Q	2022年 3Q	2022年 1-9月
名目国内総生産(兆トゥグルグ)	23.9	28.0	32.6	37.8	37.5	43.6	9.26	10.60	10.07	13.63	9.58	13.44	12.21	35.2
実質 GDP 成長率(対前年同期比:%)	1.5	5.6	7.7	5.6	▲4.6	1.6	14.8	0.6	▲0.6	▲3.4	▲3.9	6.3	7.1	3.7
鉱工業生産額(対前年同期比:%)	▲0.3	5.1	6.4	1.7	▲1.6	49.3	71.1	50.5	47.5	28.1	▲7.2	▲6.4	▲8.7	▲7.5
消費者物価上昇率(対前年同期比:%)	0.8	4.3	6.8	7.3	3.7	7.1	2.5	6.0	9.2	11.7	15.4	16.3	14.9	15.5
失業率(%)	10.0	8.8	7.8	10.0	7.0	8.1	8.8	8.4	7.4	8.1	8.5	7.8	5.4	7.2
対ドル為替レート(トゥグルグ)	2,148	2,441	2,473	2,664	2,813	2,849	2,850	2,850	2,849	2,849	2,869	3,092	3,199	3,053
貨幣供給量(M2)の変化(対前年同期比:%)	21.0	30.5	22.8	8.2	16.2	13.8	22.9	29.6	20.2	13.8	4.2	▲1.3	0.8	0.8
融資残高の変化(対前年同期比:%)	6.1	9.6	26.5	5.0	▲5.0	21.3	2.8	10.3	16.5	21.3	25.2	22.6	13.7	13.7
不良債権比率(%)	8.5	8.5	10.4	10.1	11.8	10.0	11.5	10.3	9.9	10.0	9.7	9.0	11.2	11.2
貿易収支(百万 USドル)	1,558	1,863	1,137	1,492	2,277	2,398	477	373	448	1,126	230	1,130	1,203	2,563
輸出(百万 USドル)	4,916	6,201	7,012	7,620	7,576	9,247	2,000	2,111	2,313	2,848	1,921	3,388	3,611	8,920
輸入(百万 USドル)	3,358	4,337	5,875	6,128	5,299	6,849	1,524	1,737	1,865	1,722	1,691	2,257	2,408	6,356
国家財政収支(十億トゥグルグ)	▲3,660	▲1,742	3	▲756	▲4,539	▲2,909	▲96	▲973	▲208	▲1,631	▲255	▲589	▲118	▲962
国内貨物輸送(対前年同期比:%)	20.0	15.3	14.6	7.4	1.1	▲13.2	15.7	0.7	▲24.2	▲34.0	▲38.0	▲26.7	▲13.4	▲26.2
国内鉄道貨物輸送(対前年同期比:%)	7.9	9.1	13.5	13.5	10.3	▲4.1	4.0	1.5	▲5.4	▲17.2	▲32.0	▲28.3	▲22.5	▲27.2
国内道路貨物輸送(対前年同期比:%)	78.4	33.6	17.3	▲6.6	▲24.5	▲50.6	94.1	257.0	▲76.8	▲81.1	▲51.0	▲15.0	128.4	▲19.7
成畜死亡数(千頭)	1,452	888	2,635	1,118	2,064	3,012	1,049	1,339	18	607	67	151	141	359

(出所) モンゴル国家統計局『モンゴル統計年鑑』、『モンゴル統計月報』各号 ほか

(注) 消費者物価上昇率、登録失業者数、貨幣供給量、融資残高、不良債権比率は期末値、為替レートは期中平均値。



## ● 韓 国

## マクロ経済動向

韓国銀行(中央銀行)が2022年12月1日に公表した2022年第3四半期の成長率(改定値)は、季節調整値で前期比0.3%となり、前期の同0.7%を下回った。需要項目別に見ると内需では、最終消費支出は同1.2%で前期の同2.3%から低下した。固定資本形成は同3.0%で前期の同0.3%から上昇した。その内訳では建設投資は同▲0.2%で前期の同0.2%からマイナスに転じた。設備投資は同7.9%で前期の同0.5%から上昇した。外需である財・サービスの輸出は、半導体の輸出が減少したが、輸送機械、サービスの輸出が増加して同1.1%となり、前期の同▲3.1%からプラスに転じた。

2022年第3四半期の鉱工業生産指数伸び率は季節調整値で前期比▲1.5%となり、前期の同▲1.6%からマイナス幅が縮小した。月次では季節調整値で、2022年10月に前月比▲3.5%、11月に同0.4%となっている。

2022年第3四半期の失業率は季節調

整値で2.7%であった。月次では2022年10月に2.8%、11月は2.9%となっている。

2022年第3四半期の貿易収支(IMF方式)は54億ドルの赤字で前期の93億ドルの黒字から赤字に転じている。また10月の貿易収支は15億ドルの赤字であった。

2022年第3四半期の対ドル為替レートは1ドル=1340ウォン、月次では2022年10月に同1426ウォン、11月に同1358ウォン、12月に同1294ウォンと推移している。

2022年第3四半期の消費者物価上昇率は前年同期比5.9%であった。月次では2022年10月に前年同月比5.7%、11月に同5.0%、12月に同5.0%であった。2022年第3四半期の生産者物価上昇率は前年同期比8.4%であった。月次では2022年10月に前年同月比7.3%、11月に同6.3%と推移している。

## 2023年及び2024年の経済展望

韓国銀行は2022年11月24日に経済見通しを発表した。

2022年の成長率については2.6%としている。2021年の4.1%から低下する。また2023年の成長率は1.7%、2024年の成長

率は2.3%としている。2023年の成長率については、前半が前年同期比1.3%、年後半が同2.1%と予測している。

2023年の成長率を需要項目別に見ると、内需は民間消費が1.7%となり、2022年予測の2.6%から低下する。一方、設備投資は▲3.1%となり、2022年予測の▲2.0%からさらに低下する。建設投資は▲0.2%となり、2022年予測の▲2.4%からマイナス幅が縮小する。財の輸出は0.7%となり、2022年予測の3.4%から低下する。

2023年の失業率については3.4%で2022年予測の3.0%から上昇するとしている。雇用者数の変化は9万人の増加で、2022年予測82万人の増加から低下すると見込んでいる。2024年については、失業率は3.3%、雇用者数の増加は15万人としている。

一方、2023年の消費者物価上昇率は3.6%で、2022年予測の5.1%から低下すると予測している。2024年については2.5%としている。

ERINA 調査研究部主任研究員

中島朋義

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	21年 10-12月	22年 1-3月	4-6月	7-9月	22年 10月	11月	12月
実質国内総生産(%)	3.2	2.9	2.2	▲ 0.9	4.0	1.3	0.6	0.7	0.3	-	-	-
最終消費支出(%)	3.1	3.7	3.2	▲ 2.4	4.1	1.5	▲ 0.4	2.3	1.2	-	-	-
固定資本形成(%)	9.8	▲ 2.2	▲ 2.1	2.6	2.5	1.1	▲ 2.6	0.3	3.0	-	-	-
鉱工業生産指数(%)	2.5	1.5	▲ 0.1	▲ 0.3	7.4	1.1	3.8	▲ 1.6	▲ 1.5	▲ 3.5	0.4	-
失業率(%)	3.7	3.8	3.8	4.0	3.7	3.4	3.0	2.8	2.7	2.8	2.9	-
貿易収支(百万USDドル)	113,593	110,087	79,812	80,605	76,207	16,652	10,731	9,283	▲ 5,418	▲ 1,478	-	-
輸出(百万USDドル)	580,310	626,267	556,668	517,909	650,015	178,019	174,970	180,161	172,917	52,594	-	-
輸入(百万USDドル)	466,717	516,180	476,856	437,305	573,807	161,368	164,239	170,878	178,334	54,073	-	-
為替レート(ウォン/USDドル)	1,130	1,101	1,166	1,180	1,145	1,183	1,205	1,261	1,340	1,426	1,358	1,294
生産者物価(%)	3.5	1.9	0.0	▲ 0.5	6.4	9.3	8.8	9.9	8.4	7.3	6.3	-
消費者物価(%)	1.9	1.5	0.4	0.5	2.5	3.5	3.8	5.4	5.9	5.7	5.0	5.0
株価指数(1980.1.4:100)	2,467	2,041	2,198	2,873	2,978	2,978	2,758	2,333	2,155	2,294	2,473	2,236

(注)国内総生産、最終消費支出、固定資本形成、鉱工業生産指数は前期比伸び率、生産者物価、消費者物価は前年同期比伸び率、株価指数は期末値

国内総生産、最終消費支出、固定資本形成、鉱工業生産指数、失業率は季節調整値

国内総生産、最終消費支出、固定資本形成、生産者物価は2015年基準、消費者物価は2020年基準

貿易収支、輸出入はIMF方式、輸出入はf o b 価格

(出所)韓国銀行、統計庁他

## ●朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)

### 各地で二毛作の播種

2022年9月27日発『朝鮮中央通信』によれば、各地の農業部門が二毛作の一環としての秋小麦、大麦の播種を行っているとのことである。

### 平壤市に楽浪博物館が開館

2022年9月28日発『朝鮮中央通信』によれば、平壤市に楽浪博物館が開館し、同日竣工式が行われた。

### 金正恩総書記が習近平総書記に祝電

2022年10月1日付『労働新聞』によれば、中華人民共和国創建73周年に際して金正恩朝鮮労働党総書記、朝鮮民主主義人民共和国國務委員長が習近平中国共産党中央委員会総書記、中華人民共和国主席に祝電を送った。祝電の内容は次の通り。

北京  
中国共産党中央委員会総書記  
中華人民共和国主席  
習近平同志  
尊敬する総書記同志、

私は中華人民共和国創建73周年に際して朝鮮労働党と朝鮮民主主義人民共和国政府、全朝鮮人民を代表して、総書記同志と中国共産党と中華人民共和国政府、兄弟的な中国人民に熱烈な祝賀を送ります。

これまでの73年間、中国の党と政府と人民は歴史のあらゆる挑戦と試練を克服しながら社会主義偉業の遂行において刮目に値する成果を成し遂げました。

第18回党大会以降、総書記同志を中核とする中国共産党の指導の下に中国政府と人民は、小康社会を建設し、社会主義現代化国家を全面的に建設する新たな歴史的旅程に入りました。

われわれは中国の党と政府と人民が収めたすべての成果について自分の事のよ様に心から喜ばしく思っております。

中国人民は社会主義建設で新しい里程碑をもたらしようになる中国共産党第20回大会を迎えることになります。

総書記同志の指導があり、党の周りに

団結した中国人民がいるがゆえに、中華民族の復興の夢は必ず実現されるであろうと確信します。

わが党と政府と人民は、国の自主権と領土保全を守り、統一を実現するための中国の党と政府と人民の正義の闘争を変わらず支持、声援するでしょう。

こんにち、朝中両党、両国は、社会主義偉業を擁護固守し輝かすための共同偉業の遂行において相互支持、声援しながら、不敗の親善・団結の歴史を引き続き刻み込んでいます。

私は今後も総書記同志と共に、伝統的な朝中友好関係を絶え間なく深化、発展させ、アジアと世界の平和と安定を守るために積極的に努力するでしょう。

総書記同志が、党と国家の責任ある活動でより大きな成果を収めることと中華人民共和国の隆盛・繁栄と中国人民の幸福を願います。

朝鮮労働党総書記  
朝鮮民主主義人民共和国國務委員長  
金正恩  
チュチュエ111(2022)年10月1日  
平壤

### 第13回平壤第一百貨店商品展示会開催

2022年10月3日発『朝鮮中央通信』によれば、同月2日、第13回平壤第一百貨店商品展示会が開幕した。今回の展示会には、各省、中央機関と各道の工場、企業所等で生産された工業製品、食料品をはじめとする2500余種、133万余点の多様な商品が出品された。開幕式には李成鶴内閣副総理をはじめとして、省、中央機関の幹部、生産および商業単位の活動家と従業員が参加した。クァク・チョンジュン商業相が開幕の辞を行った。

### 全国情報化成果展覧会－2022開幕

2022年10月4日発『朝鮮中央通信』によれば、同月3日、全国情報化成果展覧会－2022が情報産業省の主催で国家資料通信網(イントラネット)を通じ、バーチャル展覧会の方式で開催された。今回の展覧会のスローガンは「社会主義の全面的発

展と情報化の熱風」であった。省、中央機関、各級人民委員会、工場、企業所、団体が参加した展覧会には、人民経済各部門と科学、教育、保健、体育部門等でのしとげられた1400余の成果の資料と作品が出品された。会期は同月31日までであった。

### 外務省国際機構局長のロシアのドネツク、ルガンスク統合を支持する談話

2022年10月4日発『朝鮮中央通信』によれば、外務省のチョ・チョルス国際機構局長は、「去る9月23日～27日までドネツク人民共和国とルガンスク人民共和国、ヘルソン州、ザポロージェ州で行われた国民投票は、諸民族の平等と自決権の原則を規定した国連憲章に合致するように、そして現地住民の意思が十分に反映されるように合法的な方法と手続きに従って行われ、絶対多数の有権者がロシアとの統合を支持した」として、北朝鮮として「ドネツク人民共和国とルガンスク人民共和国、ヘルソン州、ザポロージェ州の住民たちを尊重し、上記地域を自らの構成(主体)として受け入れようとするロシア政府の立場を尊重する」旨の談話を発表した。

### 外務省が韓米合同軍事演習についての広報文発表

2022年10月6日付『朝鮮新報』によれば、外務省が次のような広報文を出した。

朝鮮民主主義人民共和国外務省は、米国と一部の追従国家が朝鮮半島の軍事的緊張を高める「韓」米連合訓練に対するわが軍の適当な対応行動措置を国連安全保障理事会に不当に持ち出していったことに対して強く糾弾する。

われわれは、米国が朝鮮半島水域に空母打撃集団を再び入れ、朝鮮半島と周辺地域の情勢安定に嚴重な脅威をつくりだしていることを注視している。

主体111(2022)年10月6日  
平壤

### 金正恩國務委員長がロシアのプーチン大統領に祝電

2022年10月7日付『労働新聞』によれば、金正恩國務委員長がロシアのプーチン

ン大統領の70歳の誕生日に際して祝電を送った。祝電の内容は次の通り。

モスクワ  
ロシア連邦大統領  
ウラジーミル・V・プーチン閣下

私は生誕70周年を迎えるあなたに心からの温かい祝賀のあいさつを送ります。

あなたは長期間国家元首の重責を担い精力的な活動を展開して、強力なロシア建設の雄大な戦略的目標を実現するための刮目する成果を収めたことで、広範な大衆の高い尊敬と支持を受けています。

こんにちロシアが米国とその追従勢力の挑戦と脅威を粉砕して、国家の尊厳と根本的利益をしっかりと守っているのは、あなたの卓抜した指導力と強靱な意志を抜きにしては考えることができません。

私は2019年にウラジオストクで行われたわれわれの初の対面で遂げられた合意に従い、伝統的な朝口友好・協力関係をより高い段階へ昇華・発展させ、地域の平和と安定を守り、国際正義を実現するための闘争において、両国間の相互支持と協力が前例なく強化されていることについてうれしく思います。

私は、歴史の風波の中で検証され、いつそう強固になった朝口友好を、時代の要求と両国人民の志向に合わせて絶えず強化・発展させていくうえで、われわれの間に結ばれた個人的な絆がより大きな役割を果たすようになるという期待を示すとともに、あなたが健康で幸福なことでロシアの繁栄を目指す責任ある活動で大きな成果を収めることを願います。

朝鮮民主主義人民共和国國務委員長  
金正恩  
チュチェ111 (2022) 年10月7日  
平壤

### 慈江道時中郡に板ガラス生産工程が竣工

2022年10月8日付『労働新聞』によれば、慈江道時中郡の時中ガラス工場に板ガラス生産工程が新たに確立された。これは、各地方の原料に基づくさまざまな建材生産基地を実利が得られるように整備し、

多様な建材を多く生産するべきという党政策を体したものであるとのことである。地元に近い原料資源を利用して、原料投入から製品完成に至るまでフロー式になっている板ガラス生産工程をもったもう一つの建材生産基地が築かれたとしている。建設は同工場の従業員と時中郡の青年突撃隊員が行ったとのことである。

### 清津木材加工工場が新たに改築

2022年10月8日付『労働新聞』によれば、清津木材加工工場が新たに改築された。報道では、道所在地に家具工場をモデルとして建設し、建具を生産して、市、郡に供給するべきという党政策を体したもので、「党の恩情によって建てられた」としている。工場では、既存の数十台の木材加工設備を整備・補修し、能率の高い新しい設備の設置を短期間で終えて、建具と家具を量産することのできる準備を十分に整えたとしている。

### 咸鏡南道建材展示会が行われる

2022年10月10日付『民主朝鮮』によれば、咸鏡南道咸興市で行われた咸鏡南道建材展示会に道内の数十個の単位で生産した各種の製品が出品されたとのことである。咸鏡南道製鋼工場と城川江タイル工場、国家科学院咸興分院と咸興化学工業大学、咸興建設大学の研究チーム、2.8ピナロン連合企業所、咸興戦傷栄誉軍人プラスチック製日用品工場、木製品生産単位のほか、定平郡と端川市、咸興市東興山区域、金野郡、高原郡、利原郡などが各種建材や技術を出品した。

### 連浦温室農場の竣工式が行われる

2022年10月11日付『労働新聞』によれば、同月10日、咸鏡南道咸州郡連浦里で連浦温室農場の竣工式が行われた。金正恩朝鮮労働党総書記が竣工式に参加し、テープカットを行った。同農場は280ヘクタールの敷地に850余棟の水耕および土壌温室と、地方の特色を生かした1,000余世帯の住宅、学校、文化会館、総合サービス施設などがそろう大型の農場である。建設は主に朝鮮人民軍の将兵が行ったとのことである。

### 万景台革命学院と康盤石革命学院の創立75周年

2022年10月13日付『労働新聞』によれば、万景台革命学院と康盤石革命学院の創立75周年記念行事が同月12日、万景台革命学院で行われた。金正恩総書記が参加し、「万景台革命学院と康盤石革命学院はチュチェ偉業が億年青々とすることを保証する中核育成の原種場になれ」との演説を行った。

### 朝鮮労働党中央委員会が中国共産党第20回大会に祝電

2022年10月16日付『労働新聞』によれば、朝鮮労働党中央委員会が中国共産党第20回大会に祝電を送った。その内容は以下の通り。

北京

中国共産党第20回大会 宛

朝鮮労働党中央委員会は中国共産党第20回大会を熱烈に祝い、中国共産党のすべての党员と兄弟の中国人民に同志的あいさつを送ります。

中国共産党は受難多き中国人民を奮い立たせて新しい中国を立てたし、社会主義現代化国家建設のために奮闘して刮目する成果をおさめました。

これまで10年間、党建設と党活動を強化しながら中国人民を指導して国家の持続的発展と繁栄を成し遂げ、主権と領土保全を守り抜くための闘争を力強く展開して総合的国力と国際的地位を著しく高めました。

中国で収められた成果は、党の周りに結集して新時代中国の特色ある社会主義思想の指し示す道に沿って前進する中国人民を遮ることができないことを実証しています。

われわれはこれに対して心からうれしく思います。

中国共産党第20回大会は中国人民の新しい百年の道のりで重要な里程碑をもたらす政治的出来事です。

朝鮮労働党は今回の大会が習近平同志を核心とする中国共産党の指導力をいっそう強めることによって社会主義中国の勝利的前進を裏付け、全人民を中華の復興に向かう目標遂行へと奮起させる歴

史的大会になると確信します。

今日わが両党はいつにもまして複雑多難な国際的環境の中でも変わらず支持、協力しながら両国人民の共通の利益を守り抜き、社会主義の偉業を強く牽引しています。

朝鮮労働党は今後も中国共産党と共に両党領袖たちの心血が込められたわれわれの同志的絆をさらにしっかり固めて発展させて朝中関係のすべての領域でその生命力がより力強く誇示されるように積極的に努めるでしょう。

中国共産党第20回大会が立派な成果を収めることを心から願います。

朝鮮労働党中央委員会

チュチェ111 (2022) 年10月16日  
平壤

### 金正恩総書記が中央幹部学校を訪問、記念講義を行う

2022年10月18日付『労働新聞』によれば、金正恩総書記が同月17日、中央幹部学校を訪問し、「新しい時代のわが党の建設方向と朝鮮労働党中央幹部学校の任務について」と題する記念講義を行った。

この演説の中で、金正恩総書記は過去10年間の党建設を「自己強化において歴史的意義を持つ継承期と発展期を経た」とした。その上で、2012年4月に行われた朝鮮労働党第4回代表者会議について、「革命偉業継承の歴史的課題が前面に提起されたことに応じて、継承性が徹底した党の指導思想と最高綱領を確定し、その実現を確信をもって導くことのできる新たな指導部を構成した」と規定した。2016年5月にあった朝鮮労働党第7回大会については、「わが党の歴史において36年ぶりに行われた大会として党の強化・発展において新しい段階を切り開いた」と位置づけた。また、2021年1月に開かれた朝鮮労働党第8回大会については、「党の指導力と戦闘力を全面的に強化する上で新たな革命的転換をもたらした」「第8回大会を起点にして、わが党は5年を周期として革命発展と自己強化をけん引する定期的かつ効果的な活動体系を持つことになり、党建設と党活動の原理に即して改正された党規約と再調整、再整備された党の各中央

組織の機能と役割に基づいて、党活動全般を持続的に、革新的に深化、発展させていけるようになった」という見解を示している。

また、この10年の党建設と党活動において収めた成果は第一に「思想と指導の唯一性を確固と守り抜き、継承したこと」であり、第二に「指導的機能と役割を非常に強めたこと」であり、第三に「人民に奉仕する革命的な性格をいっそう強化した」としている。さらにこの10年で「党の指導力が非常に強化され、党組織の戦闘力と活動性が向上した」と指摘している。その中で重視されたこととして、「革命の参謀部である党の指導的地位と機能に即して党大会と党中央総会、政治局会議をはじめ、重要党会議を定期的に稼働させる制度を復元し、その運営を改善すること」があったとしている。

### 「秋季全国履物展示会－2022」開幕

2022年10月19日付『労働新聞』によれば、朝鮮科学技術総連盟中央委員会と軽工業省の主催で「秋季全国履物展示会－2022」が開幕し、同月18日に平壤駅前百貨店で開幕式が行われた。同展示会のテーマは「靴の多様化、多様化、多色化、軽量化、堅固性」であり、元山製靴工場、柳園履物工場、ソチョンヘドン工場、羅先サムリョン履物工場、西城松島靴製作所をはじめとする数十単位で生産された1000余種、10万余点の製品が出品され、履物工業部門で成し遂げられた60余件の研究成果資料が提出された。会期は同月27日までとのことである。

### 内閣総会拡大会議が行われる

2022年10月20日付『労働新聞』によれば、同月19日に内閣総会拡大会議が行われ、金徳訓内閣総理が会議を指導した。パク・チョンゴン、楊勝虎内閣副総理をはじめとする内閣のメンバーが参加した。

内閣直属機関、省機関の活動家、道、市、郡人民委員会の各委員長、農業指導機関、主要な工場、企業所の活動家が傍聴した。

会議では党中央委員会第8期第4回、第5回総会決定貫徹のための第3四半期人民経済計画の実行情況を総括し、金正恩同志が最高人民会議第14期第7回会

議で行なった歴史的な施政演説に提示された課題を貫徹し、今年の闘争を成功裏に締めくくろうと提起される対策問題を討議した。

パク・チョンゴン内閣副総理兼国家計画委員会委員長が報告を行い、討論が行われた。

### 金正恩朝鮮労働党総書記が習近平中国共産党中央委員会総書記に祝電

2022年10月24日付『労働新聞』によれば、金正恩朝鮮労働党総書記が習近平中国共産党中央委員会総書記に祝電を送った。祝電の内容は次の通り。

北京

中国共産党中央委員会総書記  
習近平同志

私は、中国共産党第20回大会が成功裏に行なわれ、党中央委員会総書記に再選されたといううれしい報せに接して、最も熱烈な祝賀を送ります。

中国共産党第20回大会は、中国の党と人民が総書記同志を中核とする党中央の周りにいっそう固く団結して、新時代の中国特色の社会主義思想の旗印の下、中華民族の偉大な繁栄の歴史的過程を推進する上で画期的な里程碑をもたらしました。

総書記同志が中国共産党を導く重任を引き続き担うことになったのは、全ての党員と人民の変わらない信頼と支持、期待を示しています。

総書記同志の指導の下、中国共産党と中国人民が中国特色の社会主義を堅持し、発展させ、社会主義現代化国家を全面的に建設する新しい道程で、輝かしい勝利を収めるであろうことを確信します。

こんにち、朝中の両党は団結と協力をいっそう強化しながら、いかなる情勢の変化と挑戦の中でも微動だにせず、社会主義を中核とする両国の関係発展を力強く牽引しています。

私は総書記同志と共に、時代の要求に応じて朝中関係のより美しい未来を設計し、その実現を導いて両国での社会主義偉業を引き続き強力に促していくでしょう。

総書記同志が健康であることと、中国の党と人民のための責任ある活動でさらなる成果を収めることを心から願います。

## 朝鮮労働党総書記

金正恩

チュチェ111 (2022) 年10月23日

平壤

## 清津市遊園地に乗馬路が新たに建設

2022年10月24日付『朝鮮中央通信』によれば、咸鏡北道清津市の清津市遊園地に新たに乗馬路が建設された。

## 大成山アイスクリーム工場竣工

2022年10月27日付『労働新聞』によれば、同月26日、平壤市の大成山アイスクリーム工場が竣工し、竣工式が行われた。同工場は慶興貿易局に所属するようである。

## 「婦人服展示会-2022」が開幕

2022年10月28日付『労働新聞』によれば、同月27日、「婦人服展示会-2022」の開幕式が平壤市西城区の三大革命展示館で行われた。展示会場には、銀河貿易局、烽火貿易局、平壤市被服工業管理局をはじめとする全国の衣料品生産単位、各地の洋裁店を含む540余りの単位で作られた30代、40代女性の季節衣料が展示された。展示会ではまた、女性の服装に似合う靴、ハンドバッグ、ブローチ、髪飾り、帽子などの嗜好品と、女性が好む化粧品、良質の服地も出品されたとのことである。開催期間、衣服加工単位間の技術交流、需要者と被服生産単位との相談があり、製品に対する専門家審査、大衆審査と共に注文サービスも行われるとのことである。

## 金星トラクター工場1段階改築対象竣工式

2022年11月3日付『朝鮮中央通信』によれば、同月2日、金星トラクター工場1段階改築対象竣工式が行われた。金徳訓内閣総理が参加し、竣工の辞を述べた。

## 咸興青年1号発電所竣工式

2022年11月7日付『労働新聞』によれば、同月6日、咸興青年1号発電所竣工式が行われた。リ・ジョンナム咸鏡南道党委員会責任書記とキム・ヨンシク咸鏡南道人民委員会委員長、パク・ドン Chol 道農業経営委員会委員長、建設に参加した突

撃隊員、定平郡内の活動家、勤労者、発電所従業員がこれに参加した。キム・ヨンシク咸鏡南道人民委員会委員長が竣工の辞を述べた。

## 咸鏡北道電子業務研究所新たに建設

2022年11月10日付『労働新聞』によれば、咸鏡北道清津市に咸鏡北道電子業務研究所が新たに建設された。プログラム開発室をはじめとする研究開発室と事務室が備わった電子業務研究所が建てられたことで、道内の各部門の生産と経営活動の情報化を実現することに寄与することができるようになったとのことである。

## 金正淑教員大学の改築現代化工事完成

2022年11月14日付『朝鮮中央通信』によれば、同月13日、咸鏡北道会寧市の金正淑教員大学の改築現代化が竣工し、竣工式が現地で行われた。キム・チョルサム咸鏡北道党委員会責任書記とパク・マンホ道人民委員会委員長、関係者、建設者、金正淑教員大学教職員、学生、道内の大学部門の活動家と教員、会寧市の勤労者がこれに参加した。パク・マンホ道人民委員会委員長が竣工の辞を述べ、その後決意討論が行われた。

## 最高人民会議常任委員会常務会議開催

2022年11月16日付『労働新聞』によれば、同月15日、最高人民会議常任委員会常務会議が15日に行われた。会議では便益サービス法、会計検証法、廃物取扱法、地震、火山被害防止および救助法、非常防疫法の修正・補充案を審議し、当該の政令を採択した。

## 開城市の龍首山ミネラルウォーター工場が竣工

2022年11月18日付『朝鮮中央通信』によれば、開城市の龍首山ミネラルウォーター工場が竣工し、同月17日、竣工式が行われた。

## 咸鏡北道清津市の清津少年野外劇場が竣工

2022年11月19日付『朝鮮中央通信』によれば、咸鏡北道清津市の清津少年野

外劇場が竣工し、同月18日、竣工式が行われた。同劇場は海岸べりにあり、5000席の観覧席と舞台、グループ室、楽屋、照明設備塔が備えられているそうである。

## 金正恩総書記が新型大陸間弾道ミサイル試射を視察・指導

2022年11月19日付『労働新聞』によれば、同月18日、金正恩総書記が戦略武力の新型大陸間弾道ミサイル試射を平壤市順安区域の平壤国際空港で指導した。新型大陸間弾道ミサイル「火星砲-17」型は、最大頂点高度6040.9キロメートルまで上昇し、距離999.2キロメートルを4,135秒飛行して、日本海の公海上の予定水域に正確に着弾したとのことである。

## 第5回保衛活動家大会行われる

2022年11月25日付『労働新聞』によれば、第5回保衛活動家大会が同月19日から23日まで平壤市で行われた。朴正天朝鮮労働党中央委員会書記とリ・チャンデ国家保衛相、朴寿日社会安全相、ウ・サン Chol 中央検察所長が大会に参加した。国家保衛省をはじめとする各級保衛機関と武力部門保衛機関の指揮メンバー、保衛活動家に参加した。司法、検察、社会安全部文活動家が傍聴した。

金正恩総書記が第5回保衛活動家大会参加者に送った綱領的な書簡が伝達された。

## 習近平中国共産党中央委員会総書記が金正恩朝鮮労働党総書記に答電

2022年11月26日付『朝鮮中央通信』によれば、同月22日、習近平中国共産党中央委員会総書記が金正恩朝鮮労働党総書記に答電を送ってきた。内容は次の通り。

先日、朝鮮労働党中央委員会と総書記同志は中国共産党第20回大会が招集され、私が中国共産党中央委員会総書記として再び選挙されたのに対し、情熱にあふれた祝電をそれぞれ送ってきました。

これは、総書記同志と朝鮮党中央が私自身と中国党と人民に対する親善の情を抱き、中朝関係発展を高度に重視していることを示しています。

私は中国共産党中央委員会とそして私自身の名前で総書記同志と朝鮮党中央

に衷心となる謝意を表し、総書記同志と朝鮮党と人民に心からの挨拶を送ります。

私は中朝関係を非常に重視しています。

近年、私と総書記同志は何度も再会し、一連の重要な共同認識を成し遂げ、中朝関係を導き、新たな歴史の場を開いてゆくことで、半島問題の政治的解決過程を推進し、両国人民の共同の利益を力強く守り、両国社会主義偉業を力強く守

護し、地域と進んで世界の平和と安定を力強く守護しました。

今、世界の変化、時代の変化、歴史の変化は、前例のない方法で起こっています。

新しい形勢下で、私は総書記同志とともに中朝関係を設計し、導く事業を強化し、中朝関係を見事に守護し、見事に固め、見事に発展させ、両国人民により良い福利をもたらし、両国社会主義偉業の発展

を推進し、地域、さらには世界の平和と安定、発展と繁栄を促進するために、新しく積極的な貢献をする意思があります。

総書記同志が朝鮮党と人民を指導し、朝鮮の社会主義建設偉業で新たなより大きな成果を収めることをお祈りします。

ERINA 調査研究部主任研究員

三村光弘

# 研 究 所 だ よ り

## 職員の異動

### <退職>

企画・広報部部長代理（広報戦略担当） 高井弘明

## ERINA 日誌

8月2日	令和4年度第1回東ゴビ砂漠における深穴方式による乾燥寒冷地緑化推進技術協力実行委員会」出席（技術士センタービル、新井調査研究部長）	9月22日	新潟モンゴル国名誉領事館開設15周年記念祝賀会【ERINA 共催】（ホテル日航新潟、河合代表理事）
8月8日	一般財団法人国際経済連携推進センター「北東アジア連携推進検討委員会」出席（東京、三村主任研究員）	9月24～25日	北東アジア学会理事会、北東アジア学会第28回学術研究大会出席・発表（富山市、新井調査研究部長、三村主任研究員）
8月10～12日	大阪公立大学人権問題研究センター「第15回コリア学国際学術討論会」参加（大阪、三村主任研究員）	9月24～25日	新潟・モンゴル会主催「モンゴルフェア in 新潟2022」【ERINA 後援】（万代島多目的広場 大かま）
8月22日	ERINA REPORT (PLUS) No.167発行	9月25日	新潟県主催「国際人材フェア in NIIGATA」【ERINA 後援】（朱鷺メッセ）
8月22日	ERINA Annual Report 発行	9月28日	国際ワークショップ「北東アジアにおける持続可能な開発目標達成のための協力推進」開催・発表（ウランバートル、三村主任研究員）
8月24日	ERINA・国立調査コンサルティングセンター（NRCC）・モンゴル・日本人材開発センター（MOJC）共催「第12回 ERINA 共同国際ワークショップ・イン・モンゴル」開催（ウランバートル、エンクバヤル主任研究員）	9月29日	Bloomberg TV Mongolia 出演（三村主任研究員）
8月24日	モンゴルeagle放送『Eagle News』「第12回ERINA共同国際ワークショップ・イン・モンゴル」	10月7日	国際情勢研究所「ロシア研究会」出席（東京、新井調査研究部長）
8月26日	令和4年度 NEANET 情報交換会講演「ウクライナ事変後のロシア国内の現状」（オンライン、新井調査研究部長）	10月13～14日	「にいがた BIZ EXPO 2022」【ERINA 後援】（新潟市産業振興センター）
8月28日	第6回アジア未来会議「台湾と東北アジア諸国との関係」討論者（オンライン、三村主任研究員）	10月25日	ERINA 評議員会（ERINA 会議室・オンライン）
9月5日	国際経済連携センター「日韓ワークショップ北東アジア連携推進検討委員会」参加・発表（東京、三村主任研究員）	10月25～27日	新潟経済同友会第2回国際戦略委員会・沖縄視察（那覇市、新井調査研究部長）
9月6日	「日朝国交交渉20年検証会議報告会」コメンテーター（東京、三村主任研究員）	11月2日	東アジア貿易研究会理事会・ブリーフィング（東京、三村主任研究員）
9月7～16日	国際協力機構（JICA）草の根技術協力実施「東ゴビ砂漠における深穴方式による乾燥寒冷地緑化推進技術協力（地域活性化特別枠）」コーディネーター（モンゴル（ウランバートル、サインシャンド）、エンクバヤル主任研究員）	11月3日	吉林大学東北アジア研究院主催「東北アジア国別及び地域研究ハイレベル論壇」講師（オンライン、三村主任研究員）
9月9日	日本国際問題研究所『『大国間競争の時代』の朝鮮半島と秩序の行方』研究会（東京、三村主任研究員）	11月4日	国際情勢研究所「ロシア研究会」出席（東京、新井調査研究部長）
9月14日	ERINA Web セミナー「インフレが進む世界—これからの世界・日本経済の見通し」（朱鷺メッセ中会議室、株式会社三菱総合研究所政策・経済センター 綿谷謙吾研究員、田中康就研究員）	11月5日	韓国経済システム研究会（オンライン）
9月15日	新潟市国際交流協会補助金審査会（クロスバールにいがた、新保企画・広報部長）	11月5～6日	ロシア・東欧学会2022年度研究大会討論者・運営（新潟大学、新井調査研究部長）
9月16日	ERINA・専修大学共同研究会（NICO プラザ会議室、河合代表理事ほか）	11月9日	新潟県国際交流協会「2022年度留学生のための就職セミナー」【ERINA 協力】
9月20日	国際フォーラム「ユーラシアと朝鮮半島」発表（韓国・光州広域市、三村主任研究員）	11月10日	吉林大学東北アジア研究院主催「東北アジア国別及び地域研究ハイレベル論壇」講師（オンライン、新井調査研究部長）
9月22日	「東アジア貿易研究会第3回研究会」発表（東京、三村主任研究員）	11月10日	新潟市国際交流協会理事会出席（クロスバールにいがた、新保企画・広報部長）
		11月11～14日	モンゴル北東アジア安全保障・戦略研究所（MINASS）開設記念行事参加（ウランバートル、新井調査研究部長、三村主任研究員）
		11月11～20日	国連気候変動枠組み条約第27回締約国会議（COP27）参加（エジプト・シャルム・エル・シェイク市、エンクバヤル主任研究員）
		11月17日	環日本海懇談会幹事会講師（万代シルバーホテル、三村主任研究員）
		11月19日	「韓・朝鮮半島と法」第23回研究会・幹事会（東京、三村主任研究員）
		11月21日	新潟県立大学ゲスト講師（新潟県立大学、三村主任研究員）
		11月23日	新潟県主催「国際人材フェア in NAGAOKA」

	【ERINA 後援】(アオーレ長岡)	12月4日	新潟県主催「業界説明会」【ERINA 後援】(万代島ビル会議室)
11月25日	国際情勢研究所「朝鮮研究会」(東京、三村主任研究員)	12月8日	東アジア貿易研究会講師(東京、三村主任研究員)
11月26日	早稲田大学日米研究所・仁荷大学国際関係研究所国際セミナー「日米韓協力と日韓相互理解の模索」発表(東京、三村主任研究員)	12月10日	国土研究院・ERINA 共催セミナー講師(ソウル、三村主任研究員)
11月28日	早稲田大学ゲスト講師(東京、三村主任研究員)	12月14日	長岡市・新潟県主催「NAGAOKA COMPANY TOUR & MEETING」【ERINA 後援】
11月28日	新潟県立大学ゲスト講師(新潟県立大学、董研究員)	12月16日	2022年度北東アジア経済発展国際会議(NICE) 新潟(朱鷺メッセ)
11月29日	釜山港湾公社主催「釜山港セミナー in Niigata」【ERINA 後援】(ANA クラウンプラザホテル新潟)	12月16日	第4回 Future Leaders Program (朱鷺メッセ)
11月30日	ソウル大学・早稲田大学日米研究所共催国際セミナー「転換期の韓日関係」(東京、三村主任研究員)	1月11～15日	新潟県ベトナム・シンガポール訪問団(ベトナム・ハノイ、シンガポール、新井調査研究部長)
12月1日	2022年度北東アジア経済発展国際会議(NICE) 新潟(朱鷺メッセ)	1月26日	新潟県主催「SANJYO COMPANY TOUR & MEETING」【ERINA 後援】
12月1日	北東アジア経済データブック2022発行	1月27日	第3回北陸圏広域地方計画有識者懇談会出席(金沢市、新井調査研究部長)
12月2日	国際情勢研究所「ロシア研究会」出席(東京、新井調査研究部長)		

## 編 集 後 記

公益財団法人環日本海経済研究所(ERINA)が発行するERINA REPORT (PLUS)は本168号が最後で、大きな区切りとなる。本誌は、1993年10月のERINA発足から間もない1994年2月にERINA REPORTとして第1号が発刊され、以来29年間、原則として隔月刊のペースで発行されてきた。

創刊号の冒頭、初代ERINA理事長の金森久雄氏が発刊の意義を述べている。そこでは、当時、眼前で進んでいた様々なダイナミックな動きを引き合いに、環日本海経済圏が非常に急速に発展しているとの現状認識が示されている。他方で、日本の積極的な参加なくして環日本海経済圏の発展は不可能であるにもかかわらず、日本の取組は中国や韓国に比べて遅れており、実証的な研究や情報収集という点でも非常に不十分だとも指摘している。これらを踏まえ、「環日本海経済研究所は環日本海圏における研究と情報収集の中心となり『ERINA REPOERT』をその発表と伝達の媒体にするという意気込みでやって行きたい」との決意表明で結んでいる。

当時は、インターネットも普及しておらず、今では当たり前オンラインでの情報収集など想像すらできなかった。北東アジア各国の、しかも地方部での動向を把握するには、現地に「行って」、「見る」、「聞く」しか手段が無かった。したがって、初期の本誌では、現地調査や各地で開催された国際会議の報告記事などが多く掲載された。今読み返すと、各地に向かったERINAスタッフの、そして彼らを迎えた現地の人々のキラキラ輝く眼が心に浮かぶ思いがする。

設立直後のERINAは出捐団体等からの出向者が多かった。2000年代になって、出向者に代わり自前の研究者を採用する形で少しずつ体制が変わるのに伴い、本誌でも論文・論考の掲載が増えた。また、国内外の研究者・研究機関等との関係構築が進むことで、本誌の認知度も高まった。こうした中で、内外の研究者からの寄稿を得て特集を構成するという現在の編集スタイルが確立していった。

また1997年に、主にビジネス情報を掲載したERINA BUSINESS NEWSが創刊されて以降、2誌の並行体制が約20年間継続した。そして、2017年の2誌統合を契機に、現在のERINA REPORT (PLUS)に改称した。ここに至り、本誌は「理論と現実を結合させた総合的な情報を提供」し、「質の高い研究素材を提供する」こととなった。(本誌表紙裏「本誌の目指すもの」参照。)

2023年4月1日に新潟県立大学に新設される北東アジア研究所(Economic and Social Research Institute for Northeast Asia: ERINA)は、現ERINAの研究資産や人的ネットワークを継承して活動する。現在の北東アジアには、30年前に金森氏が見ていたものとは異なる風景が広がっている。残念ながら、バラ色の未来を予感させる要素は皆無に近い。だからといって、この地域を研究することの必要性、重要性が減じたわけではない。いや、かえって高まっているとすらいえる。新ERINAにおいて新たな形で発行される本誌が、北東アジア研究の分野でより大きな役割を果たすことになるものと信じる。(あ)

発行人 河合正弘

編集委員長 新井洋史

編集委員 新保史恵 エンクバヤル・シャグダル 土田知美

発行 公益財団法人環日本海経済研究所© The Economic Research Institute for Northeast Asia (ERINA)  
〒950-0078 新潟市中央区万代島5番1号 万代島ビル13階  
13<sup>th</sup> Floor, Bandaijima Building, Bandaijima 5-1, Chuo-ku, Niigata City 950-0078 JAPAN  
Tel: 025-290-5545 (代表) URL: <https://www.erina.or.jp/>

発行日 2023年2月20日

禁無断転載



**ERINA** (公益財団法人環日本海経済研究所)

〒950-0078 新潟市中央区万代島5番1号 万代島ビル13階  
Tel:025-290-5545 Fax:025-249-7550 E-mail:webmaster@erina.or.jp

<https://www.erina.or.jp>